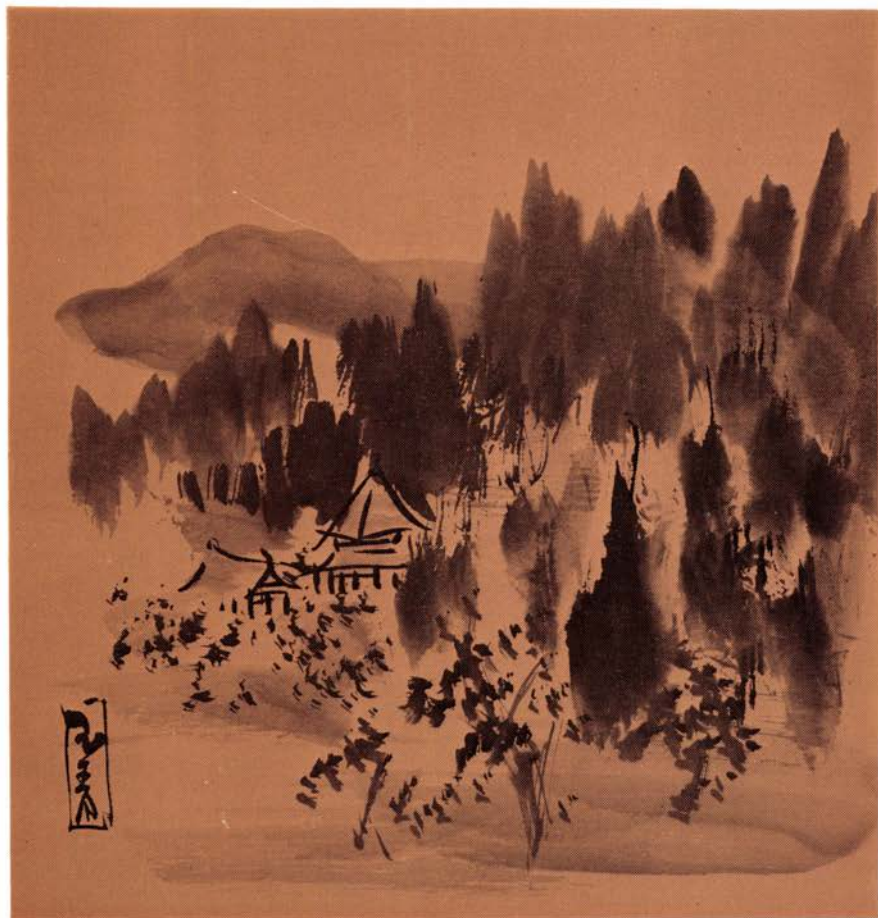


川柳塔

昭和五十九年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六八五号



日川協加盟

No. 685

六月号

大矢十郎還暦記念句集

「みかん船」出版記念

本社8月句会

とき 昭和59年8月7日（火）午後6時開場
ところ なにわ会館

大阪市天王寺区石ケ辻町19-12

地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車東南

電話06(772) 1441

おはなし

兼題

「富」

西尾 栗

「喜」

川上 大輪 選

「豊」

岩本 雀踊子 選

「栄」

野村 太茂津 選

特別課題 「みかん」

橋高 薫風 選

席題 当日一題

大矢 十郎 謝選

各題3句・締切午後7時

黒川 紫香 選

会費 千五百円（句集「みかん船」呈）

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSKJEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **オースケ**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06(941) 8015

ほととぎす

西尾 葉

愈々梅雨の六月になった。梅雨もさることながら、昭和五十九年も、はや半年過ぎたかと思うと、時の経過の恐ろしさに目を見張る。六月十日は時の記念日である。千三百年前、天智天皇が漏刻を以て鼓又は鐘で時を報らせた。

明治十年六月十七日から十九日にかけて、時の総理大臣西園寺公望は、神田駿河台の私邸に文士二十名を招待した。招かれて辞退したのは坪内逍遙、二葉亭四迷、夏目漱石の三人であった。総理大臣に招かれても万障くり合せて、ホイホイと出かけずに断ったところは大変嬉しい。特に漱石が「ほととぎす」厠なかばに出

かねたり」という句で、欠席の返事をしたのには流石である。漱石は子規と一緒に俳句をよくしていた。だからほととぎすの鳴く声は、俳人にとっては渴仰のものである。上手に一句をなしたものである。

西園寺さんも文士を大切にした文化人であることがうれしい。この会を雨声会と言った。最初の会の夜、雨が降っていたので広津柳浪が杜詩の「雨詩ヲ催ス」の句をひいてつけたとも、又第二回の会合の時、寄せ書帖の題簽に、幸田露伴が書いたともいわれている。あとから招かれた永井荷風がよろこんで出席しているのを、反骨作家として不思議だという人もいるが。

「荷風も西園寺さんも、フランスにいた人だからね。それに二人とも独身だった。そしてどちらも女性嫌いではない」という説をなすものもあった。

西園寺家は琵琶を家伝とする堂上公卿で、弁財天に遠慮して代々妻を入籍しなかったのである。

ある時、西園寺公望が琵琶を弾くのを聞いたが、決してうまくなかったということだ。

之を書いている時に、NHKテレビでは、元老西園寺公望「十二人の首相を決めた男」と題して、坐漁荘の西園寺さんが放映されていた。

牡丹や我れも湯客の一人なり

牡丹や甥の縁談もってくる

送り出す庭に牡丹の立話

愛染の身に牡丹の宵の雨

我が心おぞまし牡丹の前に佇つ

座右の句

はしくれの店でも温い風がくる

(きみ)

私の句

どう打つかこの石明日に賭けてみる

大野 武太

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ほととぎす

西尾 栞 (1)

路郎忌に思ふ

若柳 潮花 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (29)

■川柳太平記 (73) 《川柳の群像》 川上三太郎

東野 大八 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (十六丁)

阿達 義雄 (34)

「折句式大成」について

阿達 義雄 (36)

水煙抄

黒川 紫香選 (38)

秀句鑑賞

「同人吟」

松川 杜的 (53)

水煙抄

中川 滋雀 (57)

二賞候補作品中間発表

(54)

路郎忌に思ふ

若柳 潮花

毎年路郎忌が来る度に路郎先生との出会や教えられた日のこと又叱られた数々の思い出が浮んで来る。路郎先生の告別式のあった式場受念寺から先生の遺影を胸に抱いてお宅までお送りする私の背後から生々庵先生が私に潮花と僕とは路郎先生にとつては不肖の弟子だったなあ、よく先生を怒らせたものだ、と言つて口を閉ざされたその言葉が今でも耳の底に残つて消えようとはしない。無論、路郎先生を怒らせたと言ふ理由は生々庵先生と私では全く別な意味からであり、私の場合は怒らせたと言ふより叱られたと言ふ言葉の方がピッタリ来るように思える。

当時私は女流作家の訪問記やおしどり作家の訪問記を毎号川雑に連載していた関係もあり句会部と編集部を兼任させられていた。編集部は部会があり月一回先生のお宅に集まつて編集に関する色々な打合せをする事になっていた。丁度部会も終つてお茶を戴こうとした時、急に先生が私の顔を見て潮花君、君は規則と言ふものが有るのを知っているのか、それとも知らないのか、どちらだ、と急に言われ、あまり突然だったので驚いていると、今月の本社句会あれば何だ、投句は二題三句

愛染帖	橘高薫風選	(58)
海潮温泉	西尾 栞	(61)
若返りと弱体化	小池 鯉生	(63)
「ブーム」	都倉求芽選	(64)
一路集「弾む」	天正千梢選	(64)
「列」	森田熊生選	(65)
初歩教室	本田恵二朗	(66)
柳界展望		(68)
校正雑感	田中正坊	(70)
菊澤小松園追悼本社五月句会		(71)
各地柳壇(佳句地10選/松岡三吉選)		(75)
雅号ぶっちゃけばなし	(209) 杉本智慧子	67

編集後記

薫風・鬼遊・史好

(85)

座右の句

牛小屋に月光美しき浪費

私の句

飛行雲熱い想いがいま届く

(薫風)

奥田 みつ子

という規則があるのに四句も入選をしていた者があつたが、あれを幹事として君はどう説明をするのか答えてみなさい、と言われた時、穴でもあれば入りたい思いがした。もし君が横断歩道を渡る時、信号は赤が出ているけれど車が通っていないからといって渡るか、車が通っていないのである。それが規則である。規則と言つものは絶対に守らねばならないものである。幹事だからと言つて一題に何句受取つてもいいということは許されない、以後よく氣をつけ給え、と言つて私から眼をそむけられたが、折角皆さんに出された葎乃先生からの心遣いのお茶は冷たくなつていた。その当時の句会は今と違つて各自が並べられた投句箱に入れるのではなく、べ切の声がかかると同時に幹事が各題毎に集句して廻るのである。先生が言われた同じ題が四句も入選したという理由は、投句して居られた方がべ切直後飛び込んで来られ、投句して居る句と此の句を入れ変えて欲しいと頼まれ、選者へ渡す直前の事で、一応おことわりしたのですが、どうでもと頼まれ、仕方なく一題に四句も入選する事もあるまいと高をくくつた私は時間もないまま選者に渡してしまつたので一題六句受取つたことになつてしまつたのである。叱られた日の先生のお顔は今でも忘れられない。



西尾 葉選

松原市 谷垣史好

大阪市 小出智子

長いパン抱え性来楽天家

羽根ぶとん絆も軽くなりました

こめかみに澱む欲求不満の血

愛ゆえの痴態神様お許しを

許し乞う声がやがては絶え絶えに

満ち足りて聞く弦楽四重奏

そしてプラハに思いを馳せる五月の陽

西宮市 奥田みつ子

心決めると姑が仏に見えてくる

お見合の手がハンカチを苛めてる

中年に清純と言う恋もあり

酔生夢死あしたも今日の延長か

頭 顔 声も良いとは不公平

象使い昼寝するのも象のかけ

文献のページ追う目よ男の眼

恩は生涯キリマンジャロの雪溶けず

本の虫お前に恩がわかるかい

いつまでも恩を忘れぬ風ぐるま

さりげなく傘をたたんで恩を知る

なつメロを唄うと恩が疼きだす

手巻き寿司小さな恩はすぐ返す

生涯にいくつ拍手をおくれるか
岸和田市 高橋操子

善と悪平行でないやすらぎよ

雪つりをはずした木々に息吹くもの

しゃくなげのつばみハラハラ雪が解け

釣り堀の鱈になぶられ小半日

春の机あの娘この子の花を盛る

知らぬ間にのびているのは爪ばかり
和歌山市 西山幸

日めくりの昨日を破るさむさかな
自画像にすこし保護色塗りすぎる
亡母の日のひとの情けは疑わぬ
冗談のひとつが通じない怖さ

豆を剥く身のゆくすえを思いつつ

倉敷市 小野 克枝

平穩無事沢庵刻む朝があり
弁当に日の丸入れる母の嘘

不可能を知らぬふたりの始発駅

思い出を貼るピンボケもまた楽し

パンのみに生きてはならぬ長い道

ともかくも笑える暮し夫婦酒

桜井市 岩 本 雀踊子

長い冬消えた故郷の時刻表

この町に情に弱い鬼がいる

追い越せぬ自分の影を口惜しがり

花吹雪酒の値上げがくる五月

春うららトカゲの尻尾が踊ってる

手のひらのくぼみに残っていた情

八尾市 高 杉 鬼 遊

鬼病んで人の情けが背にたまる

病みあがり鬼の気弱を笑うなよ

サラ金へさくらの花は散るばかり

金を追い金に追われる地獄沙汰

ご近所の一人が犬に吠えられる

橋を渡るふたりを橋の下が見る

岡山県 嘉 数 兆代賀

京大合格祖母をオッチョコチョイにする

地下足袋に四季を楽しむうたがある

貧しさはいま春には春のすし

保護色で生きる主張は曲げられず

たんぼの綿毛をとばす負けた日に

仏につづく道もつまずく石ばかり

何かも春のリズムだ白杖も

花の数記憶のなかに咲かせたい

髭をそる鏡代りの指が追う

胸張ると花が散りそう背をまるめ

手に触れて戻した記憶花をほめ

鍼使う指には年を取らせない

京都市 松 川 杜 的

寒うてもお不動さんは水が好き

呉服屋のカレンダー「大安」をゴシックす

草刈器蒲公英の一角刈り残し

花は咲かぬが花冷えという寒さ

星に一番近いビヤホール等と宣伝し

自衛隊昔の軍歌は歌わない

大阪市 中 川 滋 雀

安心が欲しくて合わす掌の汚れ

これからのヌリ絵は妻に選ばせる

さくら散るものの哀れが多すぎる

新緑がまぶしい嘘をついた朝

白を黒と言いつて負けたなと思う
どこまで話しましたか中座から戻り

奈良市

宮口 笛生

ストーブの酷使四月のカレンダー

満開は中旬になる四月馬鹿

ナイターへファンも選手も春の冷え

あの花にこの花四月の庭となる

対向の時間へ売れる駅のそば

雪溜めたホームのそばのうまい旅

大阪市

川口 弘生

喜多さんと別れてからの日が長い

御夫婦で来やはるそうなうちも連れ

あたまあええわと匙をひっこめる

お気楽な家と泥棒窓を逃げ

観世音のお手頂いた夢自慢

ズボン下またアベコベに穿く帰館

吹田市

藤村 女

信じやすく騙され易い母でよし

あやとりの糸のもつれの姉妹

カレンダーの格言私をなぐさめる

五十年ですねと別れた夫に語る今

恵まれた老後は過去をふり向かず

飢えし過去思い出となる桜餅

倉吉市

奥谷 弘朗

相談に行かぬ本家と溝が出来
忘れたい傷に女房触れたがり

忠告をためらって居るへそ曲り
針仕事だけで卒業させた母
口下手のところが信用出来そうで
知ってても初耳だと言うずるさ

米子市

小西 雄々

保険屋へいのちの尊さ教えられ

欠点へ針の穴から攻めてくる

自惚れへ時には飛んでくる吹矢

再会へ傷つく蝶は羽根たたむ

遺伝子へ神にそむいてメス入れる

責任の見せ場へ辞表叩きつけ

米子市

八木 千代

菜の花が咲いてる春に違いない

傷の数だけは育てた青い芽だ

両方の耳を受話器に当てている

くちびるはまだ人を待つ夢二の絵

一本杉雲と情死がしたくなる

生い立ちを忘れはしない蝶の旅

米子市

林 瑞枝

マリオネットの歩く手足に嘘はない

粒撰りの豆コンベアで欠伸する

切岸の水が惰性を叱るよう

海はるか兄の絵がある地平線

つまりて頼む気になる父の椅子

背く日の覚悟はしない母の櫛

八尾市

宮西 弥生

お祝いの袋に消えた日の満期

花の宴ころ変り許されよ

子を生まぬ余白大きくなるばかり

笑い皺太く深くもつゆとり

結べない帯の和服で会う臚

花過ぎて男も女も座に戻る

大阪市 津守柳伸

美しい話へ美しい顔集う

精一杯生きて世間にうとい花

なるようになる人生の騙し舟

吊り橋を渡りつづける独りの絵

騙されてから慌てだすヤジロベエ

エープリル損したように昏れかかる

豊中市 安藤寿美子

剪る枝の椿は意地か地に落ちる

どうしても上手な嘘が出て来ない

一人子の知らない事が多すぎる

名案も一夜明ければしょうむない

短針はしずかに一時間をゆく

拭いても拭いても春の眼鏡はくもりがち

和歌山市 浦野和子

芝桜お前程には強くない

傾いた屋根でペンペン草の唄

地の憂さを払い天指す花こぶし

逢魔時のムードに乗ったもつれ蝶

北へ北へと逃げ足早い花を追う

名園へ人間臭さ思い知る

岡山市 時末一灯

人脈のないロボットの真正直

迷わずにきっちり合ってロボットだ

いくたびか転んだ果ての夫婦箸

掘って埋め役所帳尻合うてくる

叱られた通りに叱って管理職

現職の死と年金の解説と

岡山市 川端柳子

花愛す小さな恋と言えるかも

とてもたのしみとてもなやんだ贈物

頼なぐる程の愛情まだのこし

全身を染めておきたい風みどり

ここで生まれここで育ったよりどころ

苔の花ひそひそお話するように

竹原市 小島蘭幸

単身赴任いよいよ堅き男かな

完全武装たしか男の眼だったな

墓参から帰ると届いてた手紙

背かないたつたひとつのチューリップ

子と遊ぶ軽い財布をふところに

良い子悪い子姉妹喧嘩は見ていよう

和歌山市 松原寿子

指先であなたを描く梅雨の窓

宝石箱へ涙を宿す日の鼓動

弱気ともこころの隅に風秘め

感激へ想いを乗せて受話器おく
瞳を見詰め読めた答を胸に抱く
火も風も受けて明日をうたがわぬ

京都市 都倉求芽

無縁仏手向ける者なし落ち椿
娘はお産父は第二の道に立つ

編物の無念無想の指の先

漫画さえ見なけりやエリート顔なのに

本音まだ逃げ腰コーヒー飲み残し

一病息災その一病を秘めておく

大阪市 西出楓楽

団らんの家族みんなが主役です

とりあえず自分を信じておくことに

梅雨空へ以下同文の日が続く

十八の息子も笑い袋持つ

ものごとを計ってならぬ鯨差し

灯を消せばわたしと私が対話する

藤井寺市 吉岡美房

辻切りをやろうか定年素浪人

好きなことさせてくれない二度の職

同窓会まだこれからの酒を酌む

友達に言うほど親と話さない

君の言うことはわかるといふ妥協

松江市 柳楽鶴丸

観音様あなたも大根足ですか

裸の太陽正午の時報打つ
玉のこしとは馬鹿にされたよう
死ぬる迄恥かく男にて候

裏切った友が可哀想になり

天は二物を与えぬ声美人

松江市 小林孤呂二

辞令拝受肩が軽うくなっていた

退職の日から引き算多くなり

男なら拗ねるなさくら咲き遅れ

生者必滅とつくに覚悟できてます

虫がいい敗者は復活などしない

冷め易いのが取柄にされてる少数派

松江市 恒松叮紅

あと継ぎを次男にきめて気を遣い

神経痛が出て遺言を考える

化粧瓶なども揃えて子無し妻

真直ぐに思春期へ来た子のスーツ

長男は不孝長女の親思い

初七日にもうコピーする遺産分け
松江市 舟木与根一

異常気象シクラメンの長い冬

春や春雇用保険の列にいる

雑踏で無職は押され小突かれる

脱サラの一步でぎっくり腰になり

汚れ役やってみたいと宣えり

雨降れば降ったでめでたく言い回し

大阪市 本間満津子

気楽さと引き換えにする温いもの
完全癖今日も眠れぬ夜となる

可愛らしいワイングラスに騙される

思い出を置き去りにしてゆく季節

鰯をもっと喰べると決めた耳学問

目を病めば歪んで見ますお月さま

大阪市 神夏磯道子

髪形が春の私にしてくれる

春を着てマネキン少し自惚れる

歩き方上手になつて横見する

欲のない顔がお好きな辻地蔵

修正し削り夫婦の円さかな

量の月余生の姿かも知れぬ

竹原市 森井菁居

頂上を目ざすと向かい風になる

保険屋でいいさ誇りを持っている

たくましく生きる男の無神論

挽回のエンジンキーは妻が持つ

ちぎり絵へ息づく母の人間味

育つ子へお金の工面ばかりなり

大阪市 黒田真砂

倅せな友に孤独の影を見る

ひたむきに生きて頼れる何もない

やがて来る死を思う時負けて居る

柱の傷壁のしみにもある想い

ごきぶりに馬鹿にされてる独り者
逆転のその時冷えた女の目

和歌山市 堀端三男

鼻の下伸ばしてコーヒー飲んでいる

悲しみのわかる女とうまが合い

昔むかし勤めた村の記事を見る

叙位叙勲新聞で知る恩師の計

三台のテレビ孤独を深くする

本音吐く対決ならば受けて立つ

寝屋川市 江口度

着重ねのはかまで四温待つ土筆

目白きてひよ来て猫のくる小庭

蛙は蛙教育ママの無駄な答

とおつて欲しいすべつて欲しい私立高

恐がつていると狼戸をたたく

さかさまにしても真面目な砂時計

和歌山市 福本英子

忙しい忙しいメダカの餌を忘れてる

禁煙車増えたぐらいでまだやめぬ

騙されてあげようあなたの夢だから

砂に描く愛の一字を急がねば

退屈な極楽へなど行かないで

兄嫁の位置やわらかな風が好き

寝屋川市 稲葉冬葉

許すこと多い私に春の酒

太陽と背中あわせにある愁い

陽炎と男を憎む桃の花

正論を吐いて空しい拒絶感

耳鳴りの女の坂を登り切る

許さねば明日がこない鳩時計

兵庫県 河原みのる

大臣を質に牛肉押し売られ

結局は誰が得する肉騒ぎ

天下り素より降臨の国なれば

生殺しの休田なんぞ要りませぬ

おそ桜だまって罪を負うて咲く

持たぬ幸せめてのんびり湯に浸る

守口市 羽原静歩

中国旅情

ニイハオニイハオ大阪弁は忘れとり

中国のムードにとけてジャスミン茶

上海風景

ペダル踏む新中国の朝の顔

上海・杭州間の列車にて

水墨画のんびりやんわり売りに来る

蘇州風景（二句）

中国の女の業か刺繍見る

寒山寺鐘の余韻を確かめる

弘前市 波多野 五楽庵

いつの日か捨てる女といる夜明け

ポスターへ二泊の旅をまだ迷い

思ひ出の旅へ肩書置いて発ち

早春の緑を入れた絵の具箱
故里に振けば長い終列車

いろはから先も憶えてほしい麻痺

東大阪市 崎山美子

春めいて鉢植一つさげてくる

肝腎のところは実家がにぎってる

風花を背中にパートのペダル踏む

始めての浴衣へ母の手を借りる

ささやかな自衛回数券買っておく

職人の年季が光る爪の形

桜井市 河合茂雄

新しくなるほど怖い核兵器

理屈屋と一緒に呑んで酔いもせず

一枚の紙に約束させられる

食欲の減る頃つばめやってくる

新鮮な空気で騙す造成地

泥舟と気付いた時は遅かった

大阪市 柳原静香

思考みな紫になる春がすみ

冬からのストレス晴らす花の下

睦まじい夫婦になつてにぎりめし

老いや憂し炬燵の上の苺の朱

宇野千代の真似もできないまま老いる

老いの夢どこかでプツンと切れている

円満に別れ話がついた文 羽曳野市 榎本吐来

馬鹿になるすべを五十にして覚え
愚痴こぼしながらも自負の見え隠れ

春闘の鬼子を伴れて四月馬鹿

花便り別れる人と会う人と

ポスターで招く桜は去年の色

活きの良い魚を食べに鳥羽までも

春の宵秘かに決めて居る返事

真ん中でどつしりと居る父が好き

車椅子の子らも混って春の山

やりくりの上手な家よフライパン

つつましい暮しの中で光る鍋

輝を下帯と呼び美しい

釣糸をたれて本職明かし合い

珍客へお隣さんも顔を見せ

アルバムに欠けた仲間を見る仲間

大臣の悪投でよし始球式

平等に分けてももめる子沢山

気短かと気長やりあう研究所

毎度来てかわらぬ無口クラス会

クラス会藍綬話題の外であり

在宅勤務ステテコのみま

囑託となり電卓ばなれ

映像十年評論で声

西宮市

妹尾春江

大阪市

中西兼治郎

町田市

竹内紫鏑

折返し点また新しい数え唄

なら山のそばへ臨時の駅が出来

野の花を愛して道祖神となる

人柄を信じてのびる豆のつる

地の虫を待たせて春の廻り道

花火師の熱意は空で昇華する

素直になると何時も聞こえる神の鐘

一廻り一つの業が消えるなら

おぼろ月母の童話がまだ続く

五徳の足三本揃う幸せよ

髪染めて女の艶が一つ消え

とじ糸に一針ごとの祈りかな

雑兵が裁く手かげん等しない

楽しみな約束続くカレンダー

鮮烈な印象天と契る画布

悪口癖が隣に住んでいた不運

危機を乗り切る天目の抹茶碗

私に似たおっちょこちょいな宮の鳩

花あかり遠まわりするとおぼろ月

春うららゆっくり回る花時計

天上天下人差し指は天を指す

つつましい女になりたい葉指

米子市 桑原伊都

米子市 野坂なみ

吹田市 西川景子

大阪市 杉本智慧子

面影を残す小指の物思い
じゅんさいな人ときき合つてみませんか

八尾市 山下みつる

我が家にもめんこい椿一人いる

縫い針の穴に段々見はなされ

最後にはジंकス通り妻に負け

春めいて誘拐犯が荒れくるう

斜めから斬込んで来る小姑

勇ましい言葉の裏で妥協する

米子市 澤田千春

顔のないラッシュの群がビルをゆく

メガネふく三十五日終えた夜

無学だから人柄のよさあたたかさ

太陽を信用してる花時計

テトラポット怒濤に備え手をつなぐ

乗合いのバスで身の上語り合う

松原市 北野久子

消息を問えば半身不随とか

切替える事が出来れば旅に出る

お化粧は齡の恐さを忘れさせ

動脈の浮く手に女爪染める

やつと近づけば売約済みだった

齡だなあ―疲れを癒す椅子が欲し

倉吉市 渡辺 菩句

臥してからよく回る右半球

朝寝しているのを木偶の坊が視てる

蝶が夢見て僕になり切っている
どの壺も魔法の話しながらぬ
無言劇みるように相談をみてる
いくら頼んでも仏像のうす笑い

西宮市 杉浦 婦美子

熱き血がかすかに騒ぐ風みどり

赤電話心残りを置いてくる

マネキンの柄へへそくりみなはたき

小豆煮る匂いへきようが満ち足りる

教養はちよぼちよぼ話よく弾み

忍ばねば女がすたる花菖蒲

和歌山市 細川 稚代

長かった冬へ別れのボケの花

検査づけやつのがれた彼岸明け

絶筆の賀状となった春彼岸

花曇りしまいきれない掘ごたつ

一粒の涙抱いてるあこや貝

幸せは二本の足で春四月

島根県 松本文子

健康を買いに年金握りしめ

髪切って胸に温めた名を捨てて

許し合う嘘でいねいにのしを貼り

拇印押す軽い痛みが走り去る

勲章を一杯着けて亡父笑い

ふるさとを書く時ペンは素直なり

浜田市 佐々木 裕

まあまあと言ふあきらめも底をつき
故里に足が向けないマイホーム
馬鹿らしくなつて日記のペンを投げ
恋すてた明日に重たいネックレス
ラブコール決まり文句に毛が生える
損をして得も取れないお人好し

島根県 藤原鈴江

薄れゆく眼にまぶし五月晴
紫がここに生きてる花菖蒲
絆とはこんなに憎い子が可愛い
はしたない想いが入りこむ自己嫌悪
まだ他の生き方もあつたと古希の悔い
がたがたの身体にまとう春衣

和歌山市 坂部紀久子

宣言をされて桜咲き渡る
陣取りの眞座へ哀しい三分咲き
春を待つ心に偽りなどは無い
消し炭という日本語も消えて行く
散らし寿司の具にもリーダー格があり
高慢に振舞うライバル怖くない

出雲市 原独仙

産卵魚流れへ登る菜種梅雨
モーターも満員ですの春うらら
悪気ない戯れ泣かれて困り果て
へソクリを猫が見ていた隠し場所
杖ついてまだ情熱の歩を運ぶ

下関市 国弘半休門
陸橋を渡つて老いのひとり言
仲人の一人を借りて来て坐り
農相の渡米レモンを買うてくる
科学者のして良いことと悪いこと
弘法の誤字なら笑いごとですみ

平田市 久家代仕男

構内をどっちへ出ても赤い羽根
水ぬるむ生きて居たのかあめんぼう
父の日は拡大鏡で探さねば
終戦が中支で老医と馬が合い
憔悴に語る言葉もなかりけり

今治市 越智一水

世のさわぎよそこに雲雀の名調子
朝市で老婆が稼ぐ頼かむり
身を粉にして百姓の愚痴続く
春泥へ女が迷わない歩幅
落ちついてそれから腹が立つてくる

米子市 石垣花子

傷口の深さをあかす父母の墓
仏にも鬼にもなれる口先よ
やり直すスタート台の片羽鳥
これしきの試練へ気弱な夫の老い
団体で来て頼む事皆ちがい

島根県 堀江芳子

お客さまお立ち畳も佗しがり

聞きわけのよい血圧になつてきた
見えてた日夫の軒に乗つて来い
春の宵くしやみは誰が呉れたかな
ご馳走が出ると膝からかしこまり

倉敷市

野田素身郎

日曜の予定狂わす救急車
臆面もなく自分の長所など言えぬ
政治にも人事にもある裏表
禁煙へ回し喫みした過去もある
焼酎を部長が飲めばきざになる

大阪市

西森花村

火と水の二人で二人の思いやり
松の花松の緑の色映えて
大鳥居くぐれば賽銭箱が見え
氏神の銀杏も若木の代になり
教育勅語すらすら言える立志伝

鳥取県

川崎秋女

温め合う軽い嘘なら許されよ
こつてりの情へすこし飽いてくる
弱点を握つて哀しい妻でいる
方言が消えると夜叉が同居する
かと言つてすてても置けぬうちの猫

富田林市

岩田美代

弾みすぎて春愁押しよせる
遠廻りして思いがけない春となる
ウインドで気安く惚れる春財布

木蓮の白に自信消えて行く
花びらの軽さのように嘘が出る

綾瀬市

大山と金

高見山愛嬌のある転がりよう
小説の途中結果を先に読み
残つてたばこ一本吸つちまえ
先ず声を掛けてみたまえ胸晴るる
この一球この一球で勝ち進み

大阪市

河井庸佑

運不運背中合わせをしかと見る
ぼろくそに言うが憎めない男
生馬の眼抜く都会に憧れる
無礼講その気で言えば怒り出し
魚心あればと巧みに誘われる

藤井寺市

児島与呂志

坂登る歩幅に自分の分を知り
いい酒はいい友が居ていい話
履歴書の一行があり裏切らず
他人さまのお世話にせわしい下駄の音
人らしく妥協の出来る知恵は持ち

東大阪市

斉藤三十四

呼出し状知恵つけられた逃げ言葉
屋台引く自立は味をもっている
茶柱へ今日のジंकウス信じよう
肝腎な教育論が食違う
かあちゃんに後押しされて肚を決め

妥協せぬ女ふわりと煙吐く

島根県 西村 早苗

筋道を通す四角な膝となる

失恋の娘に飽きて来たドラマ

イミテーションの指光らせて夜が好き

腕時計覗きまたまた腰をすえ

島根県 小砂 白汀

金釘流からおふくろのものの思い

賞められてドライフラワーむきになり

敵陣の不協和音ならこころよい

丸木橋影を逆さに渡りきる

せせらぎへ白鷺見惚れるわけでなし

宇部市 平田 実男

長男卒業、先生となる(一句)

脛はまだまだ噛られる覚悟です

エリートに囲まれ酸素が欲しくなり

悪い例ばかりを病室とりたがり

温室で個性殺した花が咲く

パチンコ屋出て日光がまぶし過ぎ

笠岡市 松本 忠三

謝りのお辞儀へ規則は規則です

失敗は成功のもと失敗す

理解度の裏からそうもとれますな

勘繰ればいつか土俵の外にあり

底冷えのする今朝であり四月馬鹿

呉市 林野 甦光

晩春の点景となる女たち

長雨の閑談鳩時計が止まり

水蓮の風が別れを振り向かせ

崖ばかりのところに住んでる相剋や

余技少し持って生活にあるゆとり

鳥取市 小林 由多香

母の視野子等には足りぬ広場なり

相談に来るといふ子へ落着けず

値を聞いてさわっただけの松葉蟹

志まげない意地が平でいる

厳格な母です着物よく似合い

堺市 高橋 千万子

孫七人中の一人が値嵩株

愚痴こぼす女同士のさくら餅

日記には書けぬ私の出来心

偶然を作るひそかな身づくろい

本論へうまく戻って来た余談

高槻市 傍島 静馬

孫去んでふたりに戻るスキ間風

ピカピカに磨いて行くあてがないキッド

リンゴ丸ごとかぶってみたい総入歯

終着近くそろそろ忙しいコンパクト

会者定離悟ったようにいふ息子

大阪市 江城 修史

人の世の掟の中にある妥協
信じきる絆に足許掬われる

楯となる姿こよなく妻も老い
亡父を知る他人に生きていた家系
踵もう返せぬ道よ主義の道

岸和田市

福浦勝晴

春らんまん死んで花実が咲くものか
ジバンにきつちり包んだ丸い尻
パチンコの帰りに石焼芋を食べ
旅に出て空の碧さへ伸びをする
山鳩がクククと啼いて旅昏れる

鳥取県

清水一保

鶯の鳴き声句想まだ続く
落花しきり今胸襟開きかけ
落日に後一時間の悔い残る
散った日が一番嬉しい桜かも
本籍は家の納屋だよつばめ君

東大阪市

森下愛論

玩具部で親爺の方がよく遊ぶ
蟻一匹迷子になったか行き戻り
オチンチン見たぞ蛙は向きをかえ
洗濯ものへ蝶々がくるも春
ゴキブリのひっくり返って死んだ真似

柳井市

弘津柳慶

ガタガタと屋根を揺って雪が解け
アルバムに妻との過去が蘇る
泣くなよと言いつつ本人が涙ぐみ
出世頭となつて陰口たたかれる

妹の勝気に兄の気の弱さ

兵庫県

辻文平

結び目が解けない女の独り旅
爪染めて女羞恥を振り捨てる
熟年の模索歩幅が狭くなる
妥協する勇気が欲しい晒し首
七彩の糸で下界が乱される

大阪市

天正千梢

北山杉に目の単位くるわされ
推測でしゃべりたくない口つぐむ
脱サラの以前の看板大きすぎ
「なめんなよ」威嚇を内に秘めている

いるものは必ずあるんだこの苦難

神戸市

中村ゆきを

虹になれ星の子になれ知恵おくれ
梅雨のひととき古いレコード廻そうか
メツチャ可愛い娘やねんとドラ息子
いい顔の中のひとりで撮る写真
料理屋の二階に悪い人がいる

京都市

山本規不風

出張の土産ばなしに匂う嘘
逢い引きの宿に一本大柳
箸置き「たぬき」は旅館の守り神
約束が外れた一人の花見酒
本音迄言えずに易者の門を出る

芦屋市

竹中綾珠

春風に耳の霜焼け直りだす

上り坂見も知らぬ人に励まされ

彼岸会に行かずおはぎだけ食べる

転宅に八面六臂の嫁が居る

転宅準備嫁にまかせて医者通い

美彌市

安平次 弘道

花吹雪男引き際考える

失恋のショックが埋めてある余白

峰打ちの慈悲へ自惚れ目がさめる

春おぼろ寡婦も女の血が騒ぎ

福祉予算ボランティアは当てにされ

大田市

藤田 軒太楼

商況の不振にあえぐ寒酷し

裸でもよいとは娘氣にいられ

厚化粧兎角噂を播き散らし

葬送にいつしか我身と老いを知る

計画のずさんが尾を引く後遺症

奈良市

森田 カズエ

捨てるもの何も無かった日がこいし

くずしても泣かぬ積木は妻のもの

へそくりだなんてお臍のしらぬこと

雲つかむ話の中にみたヒント

城まつり金魚も鯉も桜花待つ

和歌山市

若宮 武雄

核兵器想えば何もかも空し

もう帰ろ花見どころでない人出

判りますそ知らぬ顔の口惜しさを

よろこび事三つ続いた渋い顔

目刺し嚙む倅せもある余生

寝屋川市

宮尾 あいき

かくれんぼしても駄目駄目沈丁花

派手な服着たらとあの方おっしゃった

猫蒸発失恋にも似てやるせなや

廻り道そこに咲いてるすみれ草

からみ酒女の弱さむき出しに

和歌山市

内芝 登志代

花柄を選つてゆつたり春の帯

新築へ還りつばめが迷う軒

出産率減つて子育て下手になり

姉妹が美人揃いでライバルで

実直な男で頂点望まない

島根県

大森 孝華

本心は和解を望む深い仲

春を摘む薬草余生の日を満たす

仲人の熱意へ親も折れる縁

三十年苦節の重み耐えて咲き

向かい風丸く納めてお人柄

倉吉市

渡辺 独歩

悪人の耳にも嘘のない時計

ぬるま湯に嘘が浮いてる午前二時

言い聞かす母の言葉にある火種

安らかな眠りでしたは絵空ごと

遮断機と太陽だけは信じたい

玉野市 小谷仙山

老人会春には春のプラン立て
四度目もゆるしてくれる親が居る
ひげ剃って男が春を買いに行く
給食弁当たらぬ人と余る人
有りすぎる暇で仕事を溜めている

鳥取市 林露杖

義理欠いた悔いが眠りを妨げる
プロセスはどうあれ家が建つという
憎み合う夫婦それでも別れない
葛藤の果てに摺んだ愛だつて
こじつけの理屈で愛が買えますか

倉吉市 藤井春日

ままごとの父さん今の夫です
いろいろな民話が温もり呉れる旅
煩惱を断ち切れぬまま喜寿を越え
もう後へ戻れぬ二人の旅路なり
裸木の芽生えつつまし春一番

大阪市 藤田頂留子

お燈明今日も真言誦せる幸
島国で梅雨が頼みの米作り
数あげるほかにすべない手内職
なめくじは殻にこもらぬ自由主義
有難さなくしてわかる親と金

米子市 田中亜弥

月の旅きつと兎をみつけ出す
渋皮の中味は母の愛である
左遷地の橋で男のひとり言
誰よりもきれいと蝶のひとり言
相談を受ける立場で倅せぬ

米子市 雑賀美世

ステージのピアノは過去を振り向かぬ
恵まれて神へ祈りも遠くなる
臨時収入小さな夢が満たされる
つまずいた坂で励ます父の笛
切り株もあの日のままに森の道

米子市 菅井とも子

王冠をきるから王と認めてる
美しいだけでは済まぬ蝶の舞
地下茎をたぐれば同じくに詠り
信用があつてタルマは起き上る
フルムーンまだ倅せがそばに居て

米子市 青戸田鶴

スタートへ桜の花が間に合わぬ
新しい靴がはこんできたリズム
妥協音みつけるまでの長い道
歳月が人柄までもかえていく
口紅も明るい彩で旅に出る

米子市 寺沢みど里

薬草の花へ小さな蝶がくる
雛壇の毬もときどき衝いてやる

お世辞とは取れぬ孫への褒めことば
娘と同じ嵩を湯舟に知らされる
細りゆく生命へ神の手を借りる

八尾市 飯田悦郎

平凡な暮しを襲うサスペンス
もう逢えぬ駅で別れたセレナーデ
付き逢うて見てから解ったドンファン
半分はヒステリックの妻の愚痴
喝采のない人生のリハーサル

神戸市 仲 どんたく

一病と道連れで行く世のゴール
水ぬるむ運動がてらの医師の門
解放感あれど不便な妻の留守
名誉という名前を冠し奉り
恐妻家以下同文の友と飲み

貝塚市 行 天 千 代

雪が降り風が吹いたり春きまま
入試合格さすが我が孫よくやった
自惚れの心白髪を染めさせる
万札が出る出る進学結婚へ
雨降りへ匂いも高く沈丁花

西宮市 林 はつ 絵

紙人形遠い縁の子守唄
生命線長いとだけは言われてる
母遠く藤紫の風となる
移り香にふつとだまされそうになる

たとう紙に紫深く亡母のなお

新宮市 川 上 溪 水

視野狭い男妥協の道を撰る
すれ違う美人に老いも振り返り
部屋に鍵掛けてこの娘も親離れ
言い訳を考えた時負けになる
親の夢などは知らない乳母車

橿原市 岩 井 本 蔭 棒

頭より身体を使う役を撰り
更迭で二君に媚びる臣となり
長旅を帰った夜の免罪符
読みさしの本積んだまま春の鬱
ひな壇に値上げで困る顔がない

倉敷市 小 幡 里 風

軽い咳親子マスクで花粉症
願い事こんなにあつたお賽銭
春風に押されてクールな顔をする
南からマラソンに似た春が来る
遠い春桜はまだか葱坊主

大阪市 清 水 健 司

本場から届く本場に友がいる
連休を考えている洋便器
姉いもと想いは同じ亡父の忌よ
船を待つふたりに罪は消えている
米びつの底から熱の出る話

唐津市 仁 部 四 郎

男ならあえて噂の渦の中

休めぬぞ渦へ位牌も乗せた舟

直径は知らずに探る渦の向き

イチ抜けたつもりへ隣の渦があり

メダカさえ影で渦への間を測り

唐津市

久保正敏

新緑に包まれ少女脱皮する

物溢れ男の眉に骨が無い

蹴とばして木の根に憎悪捨ててくる

公然と怠けて減反金になり

肩車パパの頭はアデランス

唐津市

田口虹汀

持てるだけ持たせ峠まで送り

葉代もいらぬ寂しい年が来る

強がりの顔が喧嘩をさけている

喜寿の座に届く梯子を買うておく

針千本飲んでも言わにやならぬ嘘

仙台市

川村映輝

わが姿言わず妻は老いにけり

どか雪が消えて植木無惨なり

エープリルフル厳しい寒さに忘れられ

再就職じめな自分に堪えるのみ

セールスマン先ず何かを褒めている

大阪市

北勝美

歩どまりはいくらになるか新入社

春の雨夕餉の膳にほうれん草

日めくりの一日一善目にささり

大阪に城の桜と通りぬけ

こめかみがびくびく動く月の末

一流の庭師雇った松自慢

福岡県

横地雅風

ふる里の常識車庫を三つ持つ

田に住んで都会を真似る朝のパン

割切つて鳥と親しむ村で生き

田作りが野菜買つてる計算機

賃上げ闘争鉢巻に金をかけ

鳥取県

森田布堂

肩書の名刺渡しして頼みごと

ロボットの合図で人が使われる

示談屋が仕掛けた罠に判を押し

離婚歴また慰藉料を取るつもり

花好きの蝶でいつでも花粉症

富田林市

藤田泰子

ときどきはあめもしやぶらす調教師

本業は忘れペットに甘んじる

親子連れ留守番させた母想う

キュービットの矢に射抜かれた傷の跡

熟練が買われて幕がまだ引けぬ

富田林市

中村優

また妻の笑顔に負けた朝の靴

嗤われて空しさ残る石頭

年金で細々食っている詩人

どうしてもこの腹芸が通じない

鳥取市 森田熊生

働いた汗に感謝を忘れてた

黙ってた父がどなつて事が済み

再起する足へ大地も呼吸する

酔い少し回つて筆がリズム持つ

早合点した弁解で嘘がばれ

神戸市 山口美穂

沈丁香身を寄せ合つて香を放つ

春の詩ほろり辛夷の白眩し

風邪に臥し桜便りも憂しときく

思いきり寝たいと思つた罰は風邪

知恵の輪は解けず五十路にさしかかる

岡山県 土居耕花

手洗いと言う考える場所がある

勲章を貰うと殻が固くなる

弔いの辺がドラマのハイライト

ライバルの頃をお寺で語り合い

台所の方ばかり見る女客

大阪市 吐田公一

故郷の唄春まだ遠い津軽三味

天国へ薄化粧して母の旅

風邪で寝た三日が妻の安息日

娘の縁談夫は返事をしぶり出し

ふと同じこと考えている夫婦

岸和田市 清野こう

五重を受けて

罪多き吾が身を悔いる弥陀の前

合格へ春をつかんだ笑い声

一枚をぬいで又着る今日の冷え

友の死

思い切り泣いて亡夫へ絶つ慕情

仏前へ酒も供えて春彼岸

岸和田市 吉水照江

入学へ御祝い袋忙しい

一年のおしんおしんも幕が下り

広い部屋いつも一人の置炬燵

春場所でダンロをかこむ残り冬

アルバイト採用美人が一番に

岸和田市 古野ひで

花暦狂い出させるもどり冬

あじけないひとりの膳にも春が来る

春の陽に布団叩かれたたかれて

種火まだ残っていましたためぐりあい

旧姓で呼びあう集いに胸はずみ

高知県 松岡三吉

いつまでも生きてて欲しい肩を揉む

たこ焼きの好きな夫婦で嘘がない

走ったら走るしかない孫の守り

下り坂酒が先行して困る

飲めば眠る夫に不服もございます

高知県 赤川菊野

春愁を埋める女の孤り酒

夫でない男が私の身を案じ

愛された過去が生きてるひめ鏡

病窓へ情けの薄い昼の月

教養も趣味も違うがうまが合い

出雲市

吉岡 きみえ

みちのくも春遠からじコケシ笑む

山菜に遇うと箸が笑いだす

熟年の男を酔わす沈丁花

墓地買つて片道きつぷ予約する

ひとり酒しんみり人の死を悼む

大阪市

鈴木 節子

抽斗の一つ一つに亡母が棲み

小さな灯ともしつづける古日記

いい友の励みに絆深くする

苦勞させた分だけ頭があがらない

ジャスミンの香りしばし音がなし

倉敷市

斎藤 通風

正論は一切空から生み出そう

学歴はいらぬ民話は囲炉裏ばた

毒舌の聞けぬ位牌へ般若経

奇麗ごと並べて落とす金無心

冷水を飲んで命の証とす

和泉市

西岡 洛醉

窓ぎわ族にも熱いお茶が来る

一キロの肥満が年の嵩で悔い

定退の夢消え再職の槌を振る

愛してるよに鼻で笑つて妻も古い

金張りの人生裏側錯視く

姫路市

大原 葉香

パンの耳捨てぜいたくな子が育ち

一本をけちな男は二度に喫い

横断歩道歩く権利を主張する

耳鳴りか否夜の音午前二時

朝のラッシュ押され流され人いきれ

西宮市

野呂 鶴汀

市場籠二階の孫に手を振られ

電柱の影に隠れた片思い

降る雨は別れ話にふさわしい

お袋はきたのう老いて偉大なり

今降りる時ではないと二階借り

大阪市

欄 蘭

コマーシャル湯加減を見に腰を上げ

雑壇に六畳一と間を占領され

デパートで見て松屋町で雛を買い

高層のビルから火事を見物し

気管支炎患いそうな鯉職

大阪市

岡田 ふみ

お彼岸の雪にお墓も冷めたそう

野球だけ春だ春だと騒ぎたて

待つ春は一步前進二歩後退

クラス会亡夫の惚気聞いてくる

A型に生まれて他人を気にし過ぎ

兵庫県 藤後実男

夢少し残して妻に起こされる

変りゆく世に靴だけが拗ねている

燃え残る女鏡へ紅を引き

共稼ぎ厨の灯がついている

ハンカチが女の足を崩してる

浜田市 中川幸一

白と黒とを灰色に見る大人の眼

金持ちと我が家の違いゼロの数

ヒステリーおしんもクソもあるものか

年金も使えばもてるネオン街

気に入らんことを言うから聴こえない

出雲市 園山多賀子

平和だな嫁の茶碗を洗う姑

合格に母の組リズミカル

空砲かもしれないぬ男の気紛れか

未だ炎える証しの火種そつと抱く

ポケットに隠す小さな涙壺

尼崎市 春城年代

許されるわたし自身が許せない

退屈な人の言葉に嘘がない

コーヒー一杯つき合うきずな大切に

敵の手に渡ってからの影法師

片方はとても素直な耳である

七尾市 松高秀峰

闘病の弱み邪教誘いに來

太陽が味方窓際族があり

カメラには心の中まで写らない

剪定をしたいような非行の芽

エクボまでアバタに見える倦怠期

夕食の誘いへ迷うコンパクト 河内長野市 井上喜醉

人相へ嫌な予感が湧いてくる

雑念を捨て温泉の妻の肌

信心の垣根で迷う五十坂

でしゃばりの優越感で笑われる

水軍では名所にならぬ鬼ヶ城 羽曳野市 佐野白水

カメラマン写す景色と見る景色

春休み多忙耳鼻科歯科内科

春光へ貸農園は手にも豆

金剛山の残雪に約束の日を延し 守口市 野呂右近

歳言わぬ女で笑顔絶やさない

嘘ついて好意を受けぬ小さい罪

六十の若さ羨む七十歳

中流の意識ひもじさ等忘れ

上見たり下見たりしてくらしの灯 倉吉市 野中御前

ネズミ取りライトでウインクしてくる

石橋を叩く相談なら乗ろう

鎧戸が味方でなかった日の誤算
保育所の柵のなかにもボスが居る
閻魔だけ知ってる俺の締切日

尼崎市

西村 かすみ

ジャズが好き演歌も好きな祇園の妓
建売りへ今を盛りと咲くさつき
花活けて今日は魔女ではない和服
紫の花へ悪夢がまだ残り
我を通して過ぎて淋しいだけの音

西宮市

津山 冬子

風みどり声も弾んだランドセル
山の火事あとのわらびを期待され
亡父偲ぶ白木蓮に陽が沈む
定年の靴しんみりと妻磨く
鯉のぼり元気な子だと風の私語

豊中市

田中正坊

開発に待ったをかける考古学
珍客の顔して招かぬ客が来る
雑兵に肩書きがつく定年期
起承転転という人生もあって良し
コーヒーのカップに沈む片想い

岡山市

花田 たけ志

又聞きを大怪我にする早合点
呼び返す声待っている歩幅
花の下日頃の憂さも散っている
インタビュール記者皆聖人君子らし

お雛様親の行儀もおついでに

交野市

山本 テルミ

ふるさとの声が激する甲子園
心配が怒りに孫の遠遊び
夫の病氣あれがたべたいうれしい日
点滴のポトリは哀しい涙かも
病床で氣遣っている守り札

松原市

佐藤 藤子

御伽話がとても好きな露天風呂
七曲り柳生の忍者畑を打つ
故里で若い野良着に会う安堵
悲しげな捨犬の瞳抱きすくめ
悪人が心許した花明り

岡山市

行吉 照路

追い抜いた道は曲って何処に出る
眼鏡ごし人間様のエゴを見る
沈む陽へ敵も味方も手を洗う
しっかりと吠えよ言葉じりつかむ
裁ち切れぬ絆は白髪と勝負する

島根県

岸本 輝水

ここだけの話よ赤いチューリップ
雨あがり寝巻のままのお茶にする
花南瓜お前も隣が好きだった
遠来の友へ愛妻らしく酌ぎ
謝ってすむ話なら謝らぬ

尼崎市

伊藤 春子

早朝のブランコが好き無の世界
たそがれの道で心の友ができ
人を指す誤解の責は誰が負う
震源地どこだテレビの字幕待ち
絵に書いた餅で満足強いられる

岸和田市

芳 地 狸 村

金婚へ同じ歩幅で暮そうよ
月面をあばかれ童話戻らない
いたずらな風が運んだ恋噂
潮騒にきたえた喉で攻めている
遺跡には輝く過去が眠ってる

和泉市

岡 井 やすお

文教懇学生代表入れちゃどう
スポーツの会談政治に邪魔をされ
財界じゃ六十七を若手と言う
四月馬鹿契約三度確かめる
ぐれた親ぐれさせまいと子を叱る

島根県

木 村 はじめ

繁華街無死満塁で足を止め
ゲートボール喜寿の声など上の空
大根に愚痴も刻んで野菜高
長閑なり今日も花屋に花溢れ
四月馬鹿明治夫婦の日向ぼこ

境港市

細 木 歳 栄

野良仕事ことりにタクト振られつつ
たった一人の砦を幼虫たち犯す

一日を劣等感にさいなまれ
雑草で終りたくなし辞書を繰る
マイホームパパは窓際よく似合い

島根県

石 田 清 泉

たかが風邪ぐらいがしつこく付きまとい
老醜の髪染め何を企むか
絡み合う糸がほぐれぬ一行詩
ひとときの念珠に心救われる
更生で予算ごまかすことに馴れ

島根県

松 本 はるみ

一陣の風それからの雨の私語
妥協する覚悟へおろかな靴をはく
相続税妻が残ると決めている
十年目それでも忘れ得ぬ話
威勢よくむくろをさばく魚河岸の

西宮市

西 口 いわゑ

雑草に紫ひっそり咲いている
紫は派手と憂いの顔を持ち
母危篤車中の人でいる長さ
路のとう春の息吹きに弾みつけ
新しき鍋なんとなくよそよそし

奈良県

宮 川 古都路

先生が預けた嫉母に聞く
旬が来て売れる野菜に雪深く
一日が終えたマダムの午前二時
手と土に手毬がはずむ童唄

年金があるから老いは別に住み

島根県 竹内 すみ子

残されて孫抱く幸を語りかけ

娘の便り秋には孫が生れそう

嘘つかぬだんだん畑に立ちつくす

膳本の斜線の隅で生きている

葱刻む女に遅い春の音

大阪市 山根 いつを

幸せが来そう南の窓明ける

子育ての道も教えに来たつばめ

順風のいましめみくじまでが凶

看護婦の若さ血圧狂わせる

嘘言うて大好き言うて余所へ嫁き

大阪市 鍛原 千里

言い勝った私を笑うおぼろ月

穴あいた靴下捨てよか捨てまいか

腹八分恋の花も八分咲き

バーゲンで買っても女は満たされる

鍵穴の位置に置いてる桜草

尼崎市 奥山 美智子

桜咲くポストの音を待ちこがれ

童心で花のトンネル通り抜け

あっさりと袂をわかつ花曇り

夜桜のはてりに忍ぶ初恋よ

人の世の憂さをはらって桜散る

米子市 林 荒介

声明に乗らぬ美男の伎楽面
歳老いて優しい嘘の中にいる

須弥壇に昇る梯子を架け直す

葉桜のベンチで風を待っている

それ以後の一行白い住所録

今治市 矢野 佳雲

銭のあるなしで坐るに順があり

冗談の出るころ再起めどがつき

血圧が僅かなことにカンをたて

分ってるママ宿題はすみました

引越しの荷が見せている暮らし向き

熊本市 有働 芳仙

金と暇あるから嫁に行きません

コンパクト男へ背を向けたがり

伝記でもそろそろ書くか六十九

初孫誕生

日もすがら飽かず赤ちゃん今日は

呱呱の声天下の春を握りしめ

大阪市 長谷川 春蘭

拝啓の次はやっぱり花だより

合格通知今日から決意新たなり

実力を買われ栄転支店長

あの場合あかもせなけりや手がないさ

仮面脱ぎすぐ涙ぐむお人好し

藤井寺市 中原 比呂志

戦争とインフレ耐えて五〇〇号

五〇〇冊積んで歴史をまた作る
エンジンは全開五〇〇号波を切る

慾張った夢は五〇〇人五〇〇号
守り抜く平和があつて五〇〇号

尼崎市

角野 かず子

行きどまりの坂で拾った鍵ひとつ
言い過ぎぬように言葉を少し溜め
たそがれて少しのことは許し合い
飾りたい飾りたくない指の節
幕引きで一生終えた生き字引

堺市

河内 月子

深く散る花びらに悔いはない
雷へ子は母ちゃんの後へ寄り
ポケットの底であくびをしてる石
上流へちよくちよく背伸びする女
先頭の群れからあえぐ声を聞く

岡山市

岩道 博友

予期しない治癒に主治医と笑い合い
一歩ずつ退つて絆の紐結ぶ
定年に肩書取れて風の群
手拍子を盛んに打つてる肚の裏
新調の靴へ出社の希望継ぐ

松原市

本多 洋子

春の風亡母の便りを呉れますか
阿呆やなあそんなに悲しむなと亡母
春暁をひととき亡母と話しており

忘れよう五月の風が笑うてる
浮雲よ結果を急ぐのはよそう

鳥取県

中原 諷人

新入りの男をさらうバラの花
消火器をいつも抱いてる妻が居て
ファスナーを信用してる背がでかい
頼もしい風に操を売る女
下駄ばきの余韻で月の影を踏む

鳥取県

森山 盛桜

噂消すように編棒むきになり
鉛筆の倒れた方におじぎする
相談をするには女綺麗すぎ
口論へ出す切り札の間を計り
死ぬ時の綺麗な合図考える

岡山市

直原 七面山

頓死を羨み
胃が痛む程愛し
夢煽る夢二の絵
着飾ってクラス会

唐津市

浜本 義美

恍惚の母を叱つた悔い一つ
我を通す父のルールが走れない
意地つ張る夫婦虚しさだけ残り
意地張る娘花の季節も通り越し
一点のやましきなしと嘘をいい

庫津市

木塚 素石

名投手読心術も心得る

貧乏が家族の肩を寄せてくれ
花も実もある庭木で小鳥呼び

羽咋市 三宅ろ亭

本尊の御前心根見抜かれて

無明ゆえ有明の灯を求め

悟らない男悟ったような弁

老人会今日乗るバスはどこへ行く

岸和田市 原 さよ子

ままごとのお客にされる花の下

ゆつくりと歩きたくなるおぼろ月

雨だれのリズム聞いている老い一人

借景の山がきれいな京の庭

枚方市 稲葉星斗

風邪ぐすり残したままで春を待つ

浮子ひとつ動かさず春の陽うらら

惜しまれてさくら吹雪に鐘が鳴る

南朝の史蹟を訪えば花吹雪

姫路市 丁坪 サワ子

長寿国どこか笑えぬひびき持ち

気が合えばすぐお茶になる嫁と姑

病んでみて嫁の情に素直です

亡夫待てど未だまだ逝けぬ趣味があり

出雲市 板垣夢醉

父逝って酒屋と縁が遠くなり

誓いのことは神は信ぜぬことにする

退任の挨拶元氣欠いている
諦めがついて心の波が風ぐ

岡山市 井上柳五郎

へいへいとすこし卑屈で売り上手

釣銭を貰い得して暫し来ず

痛みから通れる歯抜く老い淋し

酔いどめもこっそり買った戦友会

姫路市 松浦輝月

日溜りで祖母の爪切る娘です

マニキュアの爪通夜でよく喋り

にべも無く振って未練が疼き出す

四面楚歌二人の愛が開く時

豊中市 上田登志美

死んだ筈だった男に慾が出る

未娘のオッチョコチョイに夢托す

病癒え嫁に手ひかれ花を見る

真似しても調子が違う国訛り

名古屋市長古屋市 越村桔梢

サングラス防犯カメラはキザと言う

山が見え橋が見え故郷ちかくなる

集団を解くと素直な単細胞

孫誕生この子は東大向きの顔

西条市 片上明水

底に足とどくところで夢をかく

遍路宿一円玉がころころと

仕合せは女房と同じ柄で旅
伸びている爪に気がつく日曜日

自選集

黒川紫香

弘前で津軽の唄を聞かされる
虹の橋織姫なれば渡れそう

蝶去ると野の花すこし淋しそう
ひとりだと言えば泊めてはくれぬ宿

柔らかい足で踏まれた磯の貝

久し振り逢った女とたこ焼屋

老いの恋せめて握手で別れよう

正本水客

雑音は独り歩きの出來ぬたち

母の帶しめて母の齡を越す

祝電を打って男は耐えている

脇役を買われて花束ひとつ持つ

悪運がつきたと男切符買う

若柳潮花

天下りして生き返る兜首
末の世を親鸞さんは甘過ぎる
ペンペン草は俺を仲間にするという
通夜酒もやはり酒なりやはり酔い
善人は開けっ放しの顔でいる

耳栓をしたい噂が突きささる
サラ金が出来て質屋は店をとじ

税務署で女踏絵を踏む思い

尼緑之助

工藤甲吉

大矢十郎

桜咲く頃妻の着る黒羽織

病院の粗食算術行きわたり

吸殻の紅へ禁煙腹が立ち

クラクシヨンへ娘よりもさとい母の耳

襟巻が寒夜へ用を思い立ち

野村太茂津

意識とは別で手足が笑いだす

狂人であるのに阿呆になれという

許そうといつでも思うペン尖る

苔生して赦し合うてる敵味方

遍照金剛人間臭いとこが好き

山内静水

ボールころころ奥さまギツチヨで投げるわよ

責任を先ずは果せたジャンケンポン

おい妻やお前も踊れよ花の下

人の口なんばになつても男と女

両の手を合せば勿体ないことばかり

藤井明朗

三十五年くらしの詩が伸展す（むらくも）

幸せの合図は誰もしてくれぬ

春風へ街さわやかな恋の詩

花の土手恋風夜風たわむれる

亀に似てゆつくりリズム老いの幸

米沢暁明

金婚の口喧嘩よしまだ元氣

笑つて顔書いてないブラカード

正義感風向きなんか伺わず

不自由と自由半々妻の留守

ご先祖の遺した地所に縛られる

水粉千翁

杯に語り尽くせぬ雪月花

人生のしじまへ夫婦だけのお茶

やりくりはするつもりらし牡丹刷毛

あこがれのよろこびをこそ椿咲く

不揃いの歌でも夫唱婦随です

金井文秋

ちぎり絵の雪そのまんま春になる

空き缶のごろ寝景色が泣いている

日曜でよかった義理が果たせまず

体調が狂えば齢かなと思う

甘党は土産も甘いものを提げ

市場没食子

戦後の耐ようまあボケず生きて来た

叱られて済むスカタンが歳でふえ

辞めてすむ責任でなし金絡む

小一からもうお習字へ塾通い

本家秀君一周忌

僕にまで金一封の遺品分け

月原宵明

菊沢小松園氏追悼

花の四月を追悼号とは悲しかり

頰杖が別の世界へ連れてゆく

満開と言うのにプラカードを担ぎ

後輩がどんな注文する握り

黄門に合わせ夕餉の箸をおく

新岡回天子

あの世見て余った夢は未だ捨てぬ
(冥土に行かぬ詩)

医師が見てかきける首に妻の顔

ごそそと首と首とが寄って行き

何かなし告げる医師がそつとぬけ

呼吸器も何時かはぬけてかえり来ぬ

本田恵二朗

惜しい人だった遺影の片笑くぼ

たった一字探すのに老眼鏡探し

高級化粧品代を稼ぐパートです

家路急ぐ足ママとして妻として

カラオケで結ばれました新世帯

第8回 全日本川柳大会

日時 昭和59年6月24日午前10時開場

場所 島根県米子市皆生温泉グランドホテル

大ホール(米子駅より送迎バス皆生温泉

入口下車)

宿題 第一部(事前投句、5月末日締切)

空(そら) 山本 実道郎 選

艶 泉 淳夫 選

待つ 奥田 白虎 選

3.5×18センチの句箋一枚に一句宛記入、無記名、

封筒に住所氏名明記し、投句料金一〇〇〇円

投句先 千五四二 大阪市南区谷町七丁目一三九

新谷町第二ビル二〇六号

日本川柳協会大会係

振替口座(大阪7) 3575

宿題 第二部(当日出句)

森 八木 千代 選

若い 土居 哲秋 選

鏡 野口 初枝 選

鳴る 堀口 北斗 選

各部各題共一句宛、未発表作品に限る

当日会費は一〇〇〇円(昼食記念品代共)

日本川柳協会

川柳太平記 (73)

川柳の群像

川上三太郎

東野大八

明治24年1月3日東京日本橋蛸殻町に一人の赤ん坊が生れた。戸籍名川上幾次郎。これがのちの川上三太郎である。

「おやちは無学文盲のキセル職人、おふくろは旗本の娘。芳町という柳暗花明の地でこの赤ん坊は鶏の顔は見ずに育った。おふくろは武士の娘であるから割に学問があり、なかなかの読書家で幸田露伴や上田秋成等を手にした。私の読書癖はこの母の影響によるもので、後年私が川柳の道を歩きはじめたのに大きな因を作った。」

「職人の小作が本を読み、且周辺眼にうつるものは灰白い女の顔、耳に入るのは三筋の根じめである。そこで私はだんだん伸びた。従って春夏秋冬の季感ににぶく、花鳥草木の

興味がわからず、ただあるものは人間とその生活だけだった。私はそれを端的に文字にしたかった。その私を捉えたのが十七音字の川柳である。同じ十七音字でも俳句は自然鑑賞であり花鳥諷詠であるが川柳はこれと反対に人間探求、人生追求である。それは丁度人間とその生活より見聞することの出来ない私に

実にピッタリ来ている。私にはこの川柳以外には何も無い。かくして私は川柳に走った。それは私の十三歳の時であった(「孤独地蔵」昭和38年刊序文「わが川柳50年」要約)

「文芸倶楽部」川柳欄に初入選した処女作

―橋立はテングの鼻のようなどこ

明治38年三太郎十四歳だが、この年は柳樟寺川柳会が組織され、主催者井上剣花坊は機

関誌「川柳」を創刊。これに対抗する阪井久良岐のへなづち派も「五月鯉」を創刊した。本来なら江戸のどまん中日本橋生れの三太郎は、江戸趣味濃厚な久良岐に走るべきではないが、山口県生れの田舎侍の方の剣花坊になぜ惹かれたのか「それは鏡花作る婦系図式の江戸ッ子が生来大嫌いであるということもその因をなしているらしかった(「孤独地蔵」)

大正元年大倉商業を卒業した三太郎は、大倉組に入社、中華民国天津在勤となりこの前後は柳樟寺同人で活躍。天津では同志数人と川柳研究会も作っている。然し在津年余で帰国。八年間の無職放浪の生活に入る。一カ月に四十枚の履歴書を書いたのもこの頃だ。

柳樟寺同人でいたこの頃は「個を主軸とした回転をこころみた。これは私の二十歳前後からの野心であったが、当時は異端者と罵られ、外道と嗤われた(「孤独地蔵」後書)この場合の「個」とは個性的主観句を意味した。明治末年から大正初年にかけての狂句まがいの伝統川柳の増長慢の時期だけに、このような川柳主張は、革新川柳の体質を意味し、猛烈な批判が集中した事は想像に難くない。

大正9年三太郎29歳の折、川柳人で文筆家の矢野錦浪の推薦で東京毎夕新聞社に入社。

図らずもここで、柳樽寺同人で親友の吉川雄子郎（のちの吉川英治）と一つ釜のめしを食う因縁が生じた。この時の東京毎夕編集局の社会部長が徳光衣城であった。

この徳光衣城は、終戦まで北京の邦字新聞東亜新報の社長だった。この折筆者は蒙疆新聞北京総局に在勤していたので、よく顔を合わせたものだ。彼の回顧談を記しておく。

「昨年嫁を貰ったばかりで無職なのはさぞおき、ユーモア小説作家志望で川柳も嗜むという男だ、よろしく頼むと錦浪先生にいわれた。ヌーッとした顔の大きな男がそこに立つていた。これが川上三太郎だった。とりあえず編集庶務に置いたが、よく飲みよく遊んだ茫洋とした男だった」

三太郎が東京毎夕に入社した時、東都柳壇の実力者近藤鈴ン坊が柳壇を担当しており、一年遅れて雄子郎、宮尾しげを等が入社し、毎夕川柳会が結成された。しかし三太郎の夢はユーモア小説作家で自立することであり、この頃盛んに講談社系列の大衆雑誌に幾つかの作品を発表している。このため三太郎は、川柳を捨てこの道一筋に進むことを決意し、雄子郎に打ちあけたところ、雄子郎は三太郎の頬をなぐりつけ「現川柳の壁を破るのはお

前とおれだ」と睨みつけその非をなじった。

— 友だちのうしろ姿の有難味 三太郎
の句はこの時に生れたという。

剣花坊・久良伎の担当する有力新聞の柳壇投句家により吟社・柳誌が設立刊行され、加えて大正9年きやり吟社が創立され、機関誌「きやり」が誕生、東都川柳界はとみに活況を呈し、その最中の昭和2年三太郎編の「新川柳一万句集」が刊行された。この好評に氣をよくして翌年「滑稽句集」を出しプロ川柳家としての三太郎の地位を不動のものにした。

この三太郎の実勢の極め付けは、昭和4年国民新聞川柳欄の選者となったことで、月一万を越す投稿者の人氣を足がかりに国民川柳会が結成され、三太郎自身が主宰する吟社と機関誌としての「川柳研究」の素地を作った。

— 子供は風の子天の子地の子 三太郎

— 一人一人産む家白く明けかから 〃

こうした三太郎調の詩性川柳は、若き川柳家連の教祖的渴仰を浴びた。純詩川柳の

— 月光は家逆さまに逆さまに 三太郎
を発表し「川柳は斯く来つたものであるから斯く進むべきだ」の注目すべき川柳進化論を発表したのが昭和7年、この後「国民川柳」を「川柳研究」と改め、伝統的既成作家に挑

む若き川柳人たちのメッかに一変せしめた。「未完成交響楽」(昭10)、「ミモザ館」(昭11)、「大地」(昭13)等の若きインテリ層が傾斜してやまぬ映画から発想されたフレッシユな連作は若い川柳人の血を湧かせた。

「古川柳は阿片である」「句は二倍の内容と二倍の表現と、二倍の情熱と二倍の苦惱で一句になる」「そこまでを句にするより、そこから書くべきである」三太郎のこのような川柳語彙は満天の星のように数多い。

三太郎の晩年は自筆木彫句集「風」(昭27)のあとをうけた第三句集「孤独地蔵」で終るのだが新聞雑誌の選句は読売柳壇等約30種。岸本水府は大勢の中で物を見、考えているのに対し、三太郎の句や文は独りで物を見、ひとりて考えている傾向が強い。「この道は這う這うただ這うのみ」三太郎語録のこれが最後の一章である。紫綬褒章受章。昭和43年12月26日死去。享年七十七。

絶筆の句より

— 鴉の子わたしは月の泣き黒子 三太郎

★次回回は「麻生路郎」

誹風柳多留廿六篇研究 (十六丁)

大屋 六郎・八木 敬一・鈴木 黄
石田 晋一・南 得二・小野 真孝
本田 正範・石田 成佳・多田 光

故岡田 甫

259 嶋かくれ行ほど曇り御見合せ

大屋 嶋かくれ行く」は、「ほのぼのと明

石の浦のあざぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ」(『古今集』)という柿本人麻呂の歌をさす。この歌上の句を宵のうちに、下の句を翌朝よむと早起きのまじないになるといわれた。

明日は花見だといふので、早起きできるようにと「ほのぼのと」の歌上の句をとなくて寝たが、朝になったらすっかり曇ってしまったので、いまにも降り出しそうなので、花

見も見合せとなつてしまつて残念。

八丸ハ花や芝居の起し番 一二一丙・22

八木 贊。言うならば、島がかくれて見えなくなる程の濃い霧と曇りなので花見を中止にした、という秀句。

朝ぎりともでにて夜着を引かふり

安七・松一

多田 贊。起きて「島がくれ行く」の下の句をよむ頃には本曇りになったということもあろう。

岡田 同。

260 他人へは蜘蛛と知らぬが仏也

大屋 既出、吉備真備、耶馬台の詩の句。

難しい詩をたやすく読み終つたのをみて、唐人たちは、それが蜘蛛の導きによるものとは気づかず、奇異の思いをし、真備の才を感嘆し、凡人ではないと思つたことだ。

くものあるくのハしらすたまける

一七・31

くものはうやうに太臣こじつける

二〇・16

多田 贊。

岡田 同。

261 名の高さ五色にもれた唐衣

大屋 唐衣は、「からころも着つつなれにしつましあればはるきぬる旅をしぞ思ふ」(在原業平)の歌。

七月七日の乞香奠(七夕)には、五色の短冊に百人一首の歌などを書いて、笹につけて飾るのだが、あの有名な「からころもきつつなれにし」という業平の歌は、百人一首に入っていないので、短冊に書かれないとの句。

百人のすけて七夕はやくなり 三二・20

四方からふでをつつこむ天の川

一八・4

八木 だいたい賛成ですが、「七夕」にこだわっていません。

かきつばた、〔広〕……その先端に大形の花を開く。色は通常紫または白……。

五色、〔広〕①特に、青、黄、赤、白、黒、紫は五色に入らない。場面はもちろん、三河八橋、業平の句である。

から衣ぬいめくにはねをおり

拾四・31

鈴木 八木説賛、礎稿のような考え方もあるとは思いますが、八木氏も言っているように「七

夕」にこだわっている。

南 同。

名高さハ五色にもれた唐衣

傍四・38

は、先行句か？

多田 八木説賛。十芥抄下に「白、黒、赤、青、黄」とあり。

岡田 同。

262 どつくどつく笑って雑煮二膳出し

大屋 「どつくどつく」は大勢で一度に笑うさま。「雑煮二膳」は、正月やってくる三河万歳に出す雑煮。太夫と才蔵の二人分である。

正月やってくる三河万歳がめでたい祝儀を述べたあと、才蔵の方が滑稽な歌をつたいながら、滑稽な身ぶりをするので、みんなでドツドと笑ったあとで、歌い終わった二人に雑煮を出す。

万歳ハぞうになかばの春の興

五・6

南 賛。

万才にぞう煮を出すときむしかり

宝一三・礼6

本多 賛。万歳は例年訪れる家と日がほぼ決っていたから、馴染みの家で雑煮などを馳走した。

多田 賛。

岡田 同。

263 賑やかな事老筆のしわものび

大屋 本句、八十八の米寿の祝の句と考える。八十八の賀の祝は、子・孫・曾孫・親戚一同寄り集り、近所の人も加わっての盛大な祝である。「賑やかな事」はいうまでもない。

こういう時の例として、老人は筆をとって「寿」とか何とか、めでたい字を書く。気分もよく書くから字ものびのびとしている。

三十八年いきのびてふでをとり

二二・29

八木 老人の新造買いを考えていた。

本多 本句八十八の米寿を詠んだ句であることは動かぬところであるが、寿の字を扇子に書く風習があったことから、扇子の折目を利かせ、扇子を開いた時、寿の字が皺が伸びるように浮かびあがるのを詠んだ句と思う。その祝の扇子を打開いて周囲の人が賑やかに祝すというのであろう。

多田 賛。

岡田 同。

『折句式大成』について

阿 達 義 雄

(一) 折句序説

『伊勢物語』に在原業平が「かきつばた」を「から衣きつつなれにしつましあればはるる来ぬる旅をしぞ思ふ」と詠み込んでいるように、「折句」というのは古く和歌に起こった題詠形式で、連歌俳諧においても多少試みられたが、雑俳が流行してくると、之に種々の趣向を加えた形式が生まれた。

上方の雑俳に多く見られるのは、三字の課題で、例えば「オフタ」の三字を五七五の、それぞれの頭に詠み込んで、

面白や二人漕ぎ行く宝舟

などとするのを折句と言っている。

一般に『武玉川』は俳諧の高点附句集だと言われている。しかし、前句附の前句を取り去って、その附句を一句立にしたものもあることは、宝暦十三年刊の『筆

鸚鵡』を見ると、『武玉川』六編に見える「此蜺壁で死ぬとは思ふまい」は、二十五、六年前の前句附の「知れぬものかな」という題につけられた勝句であって、俳諧の附合の句ではなかったと述べられていることによっても知られることである。

『武玉川』の長句の中に、俳諧的であるよりも、むしろ前句附的又は川柳的な句を屢々発見するのは、このように前句附の前句から採られたものがあつたからと考えられる。

これに似たような現象が、大阪板の『俳諧折句式大成』(宝暦三年刊)の中にも見られることは、大いに注意すべきことである。

延享期・宝暦期の江戸の万句合には折句題のあるものは極めて少ない。

この期の万句合の前句附は、「笑ひ社すれく」(う

かれ社すれく」「そりく」とく」のような置語式の前句題を出し、俳諧の附合とは違い、大衆にも附け易いものになっていた。之に反し、折句は長句又は短句の中に、三文字又は二文字を詠み込んで、一句の意味を成すだけでなく、その句が佳品とならなければならぬという困難があったので、寄句高の多いことを競うようになった宝暦期の江戸万句合には、折句題を努めて避けていたように思われる。

ところが、上方地方では、宝暦期になっても、江戸万句合のように課題を前句題と冠句題とに絞ることなく、雑俳の各種目の課題が総花的に提出されていた。

宝暦期における江戸には未だ折句集というものが刊行されるに至らなかったが、大阪にあつては俳諧高点附句集とともに、折句集が頻りに刊行されていた。例えば、『和国車』(寛延四年)、『あふ夜』(宝暦元年)、『揉闌題折句集』(宝暦初年)、『折句式大成』(宝暦三年)、『蟬の下』(宝暦六年)、『鸚鵡石』(宝暦六年)、『類字折句集』(宝暦十二年)などが、その主なるものであつた。折句集としては『和国車』は先駆的地位を占めるもので、蟬の下はその後編となつており、今、前者の折句題の文字を検するに、「かつを」「よしの」「みやこ」「あつま」「はつせ」「さくら」「やなぎ」などと、意味のある語になつていて、発生期の折句の面影が見られる。尤も、中には「い、い」の題で、

陰陽のいわれを語る伊勢ノ御師

「ふ、い」の題で、
普讀して富士にもたれた懷手
の様なやや進んだものも見られる。

『あふ夜』の方は、百子堂潘山等二十六人の点者毎に分けられて、例えば巻頭の部では

百子堂潘山撰

クフヲくつさめの二ツめに有ルおさな顔

ヨケシ能イ風じゃけれど影絵のしのだ妻

キヲ京から呼んで親を剛がる

となつており、題文字の多くは意味のないものである。又、『揉闌題折句』の点者は未詳であるが、その内容は、ほぼ『あふ夜』のそれに似寄りのものである。恐らく、題を選ぶ時、揉闌によるという点だけが異なつていたものと思う。

ただ、宝暦三年に刊行された『折句式大成』と、その後編の『類字折句集』(宝暦十二年)になると、折句題の文字によつて、いろは別に分類され、その頭音によつて検索に便利なように編集されていた。

又、ここに収められている折句の句風には当時の俳諧高点附句集や、前句附の影響が見られ、宝暦前句の江戸の万句合、江戸で初めて刊行された折句集たる『菊多摺』とも関連が認められるので、単なる折句集としてでなく、雑俳史、川柳史の資料として看過されない問題が含まれている。

(つづく)

水煙砂

黒川紫香選

宝塚市 丸山 よし津

老人に日溜りの無い所在なさ
真実を情報過多で曇らせる
壁ばかりで遠景のない都市砂漠
沈丁花少女の乳房丸み持つ
桜前線出好きの女を誘い出す

熊本県 大川 幸子

馬鹿になる女で幸せのがさない
目に見えぬ風が木の葉に触れている
暗記した孫へ童話の種さがす
ジョギングへ朝日の出会い早くなる
珍しい苗木が庭へ多過ぎる

尼崎市 田中 晴子

欲捨てておいしいカレーを食べに行く
途中下車ちよつといい町高燈籠
たいくつの虫をなだめる父の日よ
包丁のリズムに心覗かれる

これしきの雨では鳴けぬ雨蛙

高槻市 笠嶋 恵美子

泣きごとは云わぬ枯野のきりぎりす
寒い日の心配りへレモン風呂
墓守りのように椿を掃く老女
板前の庖丁女人禁制とか
花を置くだだけのことなのに

西宮市 紀市 郁栄

赤字線のレールもなさけも瘦せている
鮮やかな花火見ている痴話げんか
抜け道を知っているのはおちこぼれ
悲しくて髪の手先まで凍らせる
授乳する母子にたちいる隙がない

藤井寺市 赤木 和子

送られて帰る緑の風の中
その角を曲れば離す手をつなく
受け取ってもらう心のスペアキー

ただならぬ気配に猫が逃げて行く
バカ一人居れば和むのなら馬鹿に

寝屋川市

平松 かすみ

母さんの小言は聞けぬヘッドホン
アハオホホと角座で三時間

ころころと笑う悩みがなさそうに
予定などないから旅に出たくなる
うぐいすの音痴もいます榎尾山

尼崎市

丹下 玉子

野良猫にひけ目感じたうちのミケ
すげなさも深い愛だとあとで知る

企みを隠す言葉に虹の彩
借り貸しのノートにいつか愛芽ばえ

過去帳に我が家の歴史の盛衰記

大阪市

朝倉 利義

くす玉に弾んだ日もあり廃止線
病む妻の顔見て今日の予定決め

前列が好きな男ででしゃばりで
退院の印に弾むカレンダー

春風にうっかり弾む老の足

東予市

小山 悠泉

花泥棒の野心をバラのトゲが刺し
手ごたえは大物釣竿持ち直し

塾塾と教育ママが遊ばせず
引越しへ花を残して発つ未練

振り向けば捨てた小犬の瞳がすがり

熊本市 高野 宵草

正直なマイクくしゃみも拾います

気が狂う方が幸せかもしれぬ
このとしになっても女齡かくす

ロボットを作ってロボットから追われ
大掃除燃さずにおこう子のノート

(前月分) 鳥取県

中原 諷人

ブランコを漕いで宇宙へ逃げて行く
食卓の上でスマイレが咲きました

南から蕾のゆるむ汽車が着く
靴紐が母校の前で解けてくる

君が代を妻の背中へ口ずさむ

孤には孤の安らぎ朝のレモンテイ
あじさいの彩より情しずくする

藤井 高子

袖口の白さ汚して詭弁組む
衝立ての一つで消せる絆です

すぐ乾く髪を洗うて恋遠し

ウインドウに見とれて夫見失い
友情は義足鳴らして逢いに来る

竹内 花代子

つくしんば新幹線で帰って来
暇な目がとらえた鳩のラブコール

ありったけ喋り一泊して帰り

和歌山市 福井桂香

下宿する娘に玉子焼教えとく
フランスパン買うと花屋へ足が向く
体調が崩れてからの怠け癖
濃い目の茶入れて寛ぐさくら餅
お化粧の濃さに埋れるふしあわせ

尼崎市 春城 武庫坊

山の絵が明るくなった部屋に居る
電車着き羅漢の顔が皆変る
香水がそれぞれ顔を持っている
啖呵切る口に盛塩しておこう
神棚の灯のゆれようにある不安

尼崎市 吉永 伊三郎

スイッチヒッター女に見抜かれる
じゃんけんぽんやと芽を出す柿の種
黙々と走る貨車には罪はない
なけなしの年金妻に握られる
陽当りのうしろの妻がいじらしい

熊本市 宇野 昭代

パーマかけましたのそうかでそれつきり
振りむきもせず消えて行く曲角
みんな送り出してテレビと朝ごはん
皮ひとつ脱いで竹の子背のびする
押し売りをソフトに帰す祖母のちえ

近江八幡市 前川 千賀子

風邪癒えて主婦の箒の騒がしさ
五月雨を塔で聴いてる古都の鳩
灯を消せばおしやべりになる沈丁花
見下ろせばいつもひとりを映す井戸

和歌山市 後藤 正子

上きげんのアイロン糊がピンとたち
山積みの見積りがある妻の椅子
ネグリジェの裾ひるがえす朝寝坊
大屋根でネコが雀を待っている

熊本市 永田 俊子

半衿を白く寡婦という決意
ふんざりがつかず逃した青い鳥
水が出ることに幸せ見つけた日
鮮やかに男の折目見せて退き

吹田市 井上 照子

桜茶屋悩み忘れた顔が寄り
洋食に箸ついて来た恥しさ
捨て猫のまつわりついて帰られず
シャッターを九輪の塔と七分咲

富山市 舟渡 杏花

たかが芋石焼いにもある値段
手の鳴る方へかたむく良心かなします
SOS出しては父も甘ったれ
慰籍料の主張へ外すイヤリング

尼崎市 山田 保藏

エンド豆霜から新芽覗いてる
さよならも言えずに頬がぬれている

明治初期ヒゲのあるのはエライ人

底力出して見たのが縁となり

岐阜市 市川 鱈 魚

馬頭観音名馬の里は酒もある

産油国衣の下が気にかかる

盛塩の高さに置いてあるねがい

風船を吹いて人生まだ死ねぬ

高石市 浅野 房子

花冷えに過去をすてたい女坂

仇野に水子の霊をすてて来る

大根めし家計簿だけが知っている

天ぶらの衣が厚い旅の宿

富田林市 植松 慶子

初恋はパステルで画く絵のように

シャネル五番一人の人に匂わせる

幼稚園児バス待つ間のこぜりあい

兄が消すローソク一本の誕生日

和歌山県 寺田 裕美

母さんにかあさんがいる五目飯

静寂に殺されそうな杉木立

バカでいてくれと夫の目が笑う

子にわたすバトンを夫婦で研いでいる

大阪市 今西 静子

貸し本の中から銀杏のしおり出る

引越しに捨てた小犬がもどる夜

血統書付きで鎖につなされる

悪人を憎みながらも見るドラマ

岡山市 広田 小菊

捨てネコのようなあせりを女みせ

姿見に女のさがのくつきりと

一すじに操たてますはなれても

にぎやかにふるまう女のせなに影

豊中市 満仲 きく子

握手する掌があたたかい春の雨

その花を活けると生きてくる花びん

外人のセールスが来る春うらら

春なのに中曽根さんのおつむの毛

京都府 木本 如洲

ゲームなり嘘の一つは許される

銀の雨決め手をもたぬ蝸牛

血圧に効く錠剤を妻も飲む

ライバルのはなしを笑う葱坊主

芦屋市 上田 佳秋

閉店を知ってゴキブリ動き出す

共稼ぎメモがポツンと置いてある

競馬さえやめたら血圧下るかも

嘘ついて男虚しく口説いている

和歌山市 神平 狂虎

自分自身にいつも卑怯なコップ酒
刺客のひとりに妻によく似た顔がいる
雑巾になれば世間が見えるのに
笑うのを忘れた素晴らしい喜劇

和歌山市

森 敏 子

ふる里へ素直な彩を見に帰る
腹立てて作つたらしいこの辛さ
おたがい知りすぎている不幸せ
だしぬけに頭の上で鳴くカラス

泉南市

坂 根 流 水

在阪の球団勝つて桜咲く
酒飲まぬ野暮をいわれて長生し
故里も大川のみが悠々と
澤がにのごとくつぶやき野心すて

唐津市

浜 本 ち よ

畳替えしても家には嫁が来ず
じゅうたんで畳の感触押し殺し
風采を殊更無視の天邪鬼
シヤム猫よお前も外人瞳が青い

益田市

里 本 た かし

信じてる夫と斜めの線保つ
ついてくる妻が反対意見持つ
模様替え金庫の位置が目立つて来
バレンタインデー妻は掃除機をかける

寝屋川市

堀 江 光 子

道草の少女にかえる水鏡
よいことがあったかちよつと飲むという
早春の朝茶柱のたつ湯呑
甘酒の湯呑に梅の香がまじる

兵庫県

森 脇 和 子

すぐ飽きる子に鬼の面つけさせる
雨の午后孫のモデルでくたびれる
初孫の入園近し長電話
言い勝つて後味悪い冷えたお茶

尼崎市

児 玉 歌 子

ハネムーン斜めの傘で帰宅する
始発駅女うしろを切り捨てる
むらさきを水面に浮かす花しようぶ
梅の香に連れ出されて庭の下駄

唐津市

山 口 高 明

橋立に太いお尻が勢揃い
宮仕え進軍ラッパ鳴るばかり
苗木市買うも買わぬも見て廻り
拘置所の窓とは知らぬ鳥の声

岸和田市

島 崎 富 志 子

新米のセールス肩が張っている
エブリフルフル仕掛けるつもりが仕掛けられ
名刺たまるほど会社もうけてず
ナイター開幕夫婦が敵となる茶の間

出雲市

落 合 正 江

糸電話楽しい事はよく聞え

夫の留守どうあがいても独り言

黙ってる方が本当の様に見え

追伸の友の言葉に弾む毯

羽曳野市 麻野幽玄

しよせん逃げおうせぬビクを突き続け

一ランク旅館落して遠出旅

目配せの意味分らないまま別れ

俯いて咲く花があり芳香す

八尾市 古川 覚然坊

忘れては嫌よと指切りまでさされ

鈴付けた鉄片身に娘は嫁ぎ

首に鈴猫の役目が果されず

約束をきっちり守って馬鹿にされ

八尾市 宮崎 シマ子

自愛かな自虐かな灸すえており

葬いの車も走る花の道

沈丁花開いたとそれから仲直り

孫生れ風向き変えた鬼瓦

熊本市 北川 一進

母の瞳にはととするよな子のバスト

割勘の顔二次会の場合をきめ

予算超過幹事せわしく廻廻り

パソコンを孫に習って買わされる

鳥取県 羽津川 公乃

わだかまり解けてうきうき角砂糖

フルムーンうきうきりボン照れて揺れ

モデル貸金家族構成だけが似る

仲人は必ず秀才才女にし

西宮市 草刈 墮駄

大理石ロダンが彫れば人となる

貧しきについ角のある口を利き

たそがれの鐘の音しかと眼にも聞き

自殺する男が食後に胃の薬

西宮市 松本 一郎

幾何模様メモ一杯の長電話

社長室孤独の座わる椅子一つ

好きなことさせてあげてと退院す

良心の呵責が夜を長くする

吹田市 茂見 よ志子

散歩道馴染の犬が跳んでくる

晴れた朝富士が見えろと娘が招く (東京府中にて)

お店屋で大阪ですかとすぐ聞かれ ()

煮える間に我流体操台所

大阪市 古川 美津枝

狸寝は内緒話に耳をたて

顔出した土手のつくしへ親子づれ

見せかけの余裕で寒いふところ手

人情にもろい悪女の泣きどころ

守口市 森川 まさお

通う道の花だけで櫻北上す

沈丁花におい昼寝がしたくなり

ビルに近い窓際におく観葉樹

コートのボタン一つ外して橋に佇ち

寝屋川市

岸野 あやめ

孫が出しせつせと通う宝塚

嘘燻べる火鉢の灰が見当らぬ

孫よんでシャボン玉など吹いてみる

青空へ何言つてやんでえばかやろう

羽曳野市

吉川 寿美

旅立ちの娘に持たす母の鈴

編棒の先に広がるママの夢

内緒話つめこむ母の耳袋

出雲市

河原 恵美子

お湯わりのレモンは少し浮気めき

つっぱってわたしにキスをくれた百合

ずけずけと答えを出した電算機

出雲市

園山 よし子

この声に孫も居るはず幼稚園

浪人の殻から抜けてやつと春

ライバルがまだ離さない火吹竹

吹田市

栗谷 春子

造花までほころびそうなこの陽ざし

ライバルと思われていて当惑し

朝になり新鮮な血が又走る

西宮市

山片 紀雄

ランドセル終世の友に出会いけり

花便り燕が春を連れて来る

パトカーが見え隠れ付く春の午後

尼崎市

鈴木 良征

あやとりの指にダイヤの欲がない

切りかえのにぶい男に腹を立て

切り札を持たぬ女の一人旅

尼崎市

大江 かね子

髪洗う逢えるあしたへ雨の音

雨の日はママの小言が多くなる

そんなこと初耳ですと聞き上手

和歌山県

森 三枝子

退屈をさせぬ女がいるお通夜

満開の花で蝶々も浮気する

念仏を唱えたいよな湯のかげん

和歌山市

山川 克子

節くれた父の手袖の詩ばかり

顔見れば結局笑って許してる

主張する自信がないから化粧する

和歌山市

玉井 豊太

順不同だけど末尾は気に入らぬ

少量の晩酌妻に割り込まれ

片ちゃんばの下駄を桜が笑うてる

竹原市

岩本 笑子

海青く心に満つるものがあり
明日生きる女白足袋白く干す
子を四人並べて足の爪を切り

榎原市 西本保夫

これからは夫婦で春の風に酔う

妻が傍に居る一日は眠くなる

アイデアが出ぬまま夫婦石をける

兵庫県 脇田米朝

ガタついた歯から正論こぼれ出る

慾張った荷物で出口が通れない

胃袋のカメラが何か言う怖さ

大阪市 板東倫子

嫁姑視点の違うドラマ評

妥協せぬ女に強い風当り

小雪舞う大谷廟はお彼岸会

羽曳野市 天崎只士

春の雲蝶のいくさがふえてくる

ピンク色人の気持をよくつかみ

行先を知らない奴が前に立つ

守口市 結城君子

紫を着ると貞女の顔になり

ブランデー入れた紅茶で日曜日

春霞の向うに好きな二上山

大阪市 稲本凡子

来る人も無い室の掃除して満ちたりる

風吹いて私のヤル気吹きとばす
肝心な事抜けていた日記帖

滋賀県 安田志津

花吹雪お地蔵様も衣替え

桜餅生の葉っぱの店で買う

縄電車で遊んだ路地に立つて見る

高槻市 上原逸

あじさいが窓にしておれて友の計

青春を戦地に置いて来た平和

雑踏に迷う子犬がふまれそう

岡山県 豆原千代女

児をうまく背負うきれいなお母さん

脱穀機だけ田に残されている姿

お美味しいと二三度行く間に値が上り

岡山県 杉本伊久栄

負け惜しみ女も呑みたい夜もある

振子の様に動いた母の顔のしわ

肩の荷を下した時から下り坂

岡山県 伏見すみれ

ぐれた子が卒業してから立ち直り

仲人のつとめ果したうまい酒

ローカルの車窓へ泳ぐ鯉のぼり

西宮市 朝山千世子

アートフラワー褒めて帰りに生花買う

お人好しうっかり本音さらけ出し

自信句入選終日老い弾む

和歌山市

桜井千秀

土一升金一升到犬の糞

たかが風邪馬鹿にし乍ら医者通い

動く児にカメラもじつとして居れず

米子市

大田みさと

そつとしておこうお伽の国の謎

マイホーム廻り廊下が夢でした

蝶だって目立ちたくない蝶もある

(前月分) 長岡京市

木本如洲

勲章を貰う友だちをもっている

生涯の花道無口な父でよし

二人して歩けば明日の虹に逢う

大阪市

塩田新一郎

なーんだと去来の墓を去るヤング

春風の邪魔もしないで小さい墓

嵐山桜だよりに病める妻

大阪市

松尾柳右子

ストレスを溜めて雨足強くなり

テリトリー心得嫁の束ね髪

五月晴れ簞笥のドレス喋り出し

大阪市

白石潔

百花繚乱極楽の夢かいま見る

雨の梅林わがもの顔で二度巡り

さよならに後追いをせぬ孫となり

大阪市 川原章久

三十を過ぎて破れぬ親の殻

基地の隅黒い鳥が一羽居る(沖繩にて)

潮騒と蛇味のリズムが夜明けまで(〃)

愛媛県 八塚三五島

艶話どうも尾鰭がついている

旅先でいいねいに道尋ねられ

近道を逃げると鬼が待っていた

新潟県 高野不二

おしん引合いにして子供に笑われる

お化け屋敷だから自然に手を握る

女房と一ぺんかわり娘に電話

兵庫県 奥野テル

花の香にふと足止めた朝の道

無欠席裏に目立たぬ妻がいる

ひかえ目な女で紫よく似合う

守口市 中原好恵

マニキュアし桜貝だとひとりごと

全員が揃えば夕餉声はずみ

愛犬に服まで着せるエゴイズム

竹原市 石原淑子

紫陽花が喜んで呉れると雨の私語

さわやかな挨拶交す花しようぶ

ふりしきる雨が二人を燃えさせる

竹原市 佐藤令子

頼られて汗にまみれた父陽気
喋るだけ喋って電話の味気なさ
仲直りしたい二人で種を蒔く

高槻市 芦田 静江

風花が彼岸ゆるがす山の春
励み合う相見互いの千羽鶴
鴨川に弾む手足が萌えている

大阪市 大倉 圭介

はしゃぐ子を叱って夫婦仲直り
連休に所在もなくして無精髭
弾まない心寄せ合う老夫婦

米子市 茂理 高代

庭少しあって明るい老いの辛
決心のつかぬまま汽車走り出す
落椿のように死にたい願い抱く

島根県 森山 英子

旅の汽車出雲なまりの懐かしさ
京の旅しぐれて寺の軒を借り
早起きのプラン昼寝も組んでおき

鳥取市 湯村 色舞

春風へ女うきうき隙を見せ
相談はするが結局我を通し
この辺で妥協すすめる袖を引く

大阪市 萩谷 まさ

占いの一週間が気にかかり

浅はかな女心を見抜かれる
緊迫の九回裏は胸痛む

水戸市 上鈴木 春枝

電話して結局愚痴を聞かされる
呼鈴へまずセールスと身構える
道草のゆとりが出来たランドセル

熊本市 黒田 緑

戸を締めた音へ決意促され
風に散る花は恨まず風に乗り
飲み残す茶に味がある落ちこぼれ

山口県 高崎 雀声

畑荒れて農婦旗振る道修理
残飯を母はだまって口に入れ
花咲かぬまま定年がやってくる

尼崎市 佐藤 美代子

薄味とすすめられてる白い髪
合同葬にぎりこぶしで涙ふく
花筏蝶も一かどフルムーン

尼崎市 野瀬 昌子

白木蓮空いっぱいを庭にして
想出が多くて靴が捨てられぬ
華やかでやがて空しい生花展

大阪市 北山 悟郎

発展をすればする程市が赤字
停年に雑音迄も遠ざかる

落椿無残な首を横たえる

京都市 森川春子

任地聞いて老母はがつくり肩おとす

老人の世帯なれども雛祭る

お節句の太刀を玩具にして遊び

姫路市 人見翠記

暖房の電車でアクビうつされる

趣味の道歩いても歩いてても遠い道

空箱がじつと出番を待っている

寝屋川市 立床晴風

縁起物提げて仲人が来てねばる

楽しんだ後から付け馬ついて来る

どちらかを落とす秤に掛けている

枚方市 二宮山久

受付に美人をおいている杜訓

ふる里の味をデパートからもらい

ふる里の漬物石の味届く

指宿市 渡辺伊津志

おだてられついでに本音出てしまい

紅を引く時だけ女沈黙し

突然の電話は金が要るらしい

岡山市 後安ふさえ

一生を楷書の様な人で生き

空風呂を焚いて十日を貰い風呂

母さんを描いて園児の得意顔

島根県 福間芳枝
左遷地へ天地晴朗と荷をまとめ
故郷で下駄つっかける解放感
手枕の中を子猫が潜り抜け

大和高田市 岸本豊平次
春一番老人会が動きだす
文学も知らない母にあるドラマ
肩書はないが百科辞典にされ

岸和田市 奥礼子
嘘つけぬ心相手に見抜かれて
黙ってる時間が二人を遠くする

息子小学校入学
亡き父母に見てもらいたい一年生
西宮市 秋元てる

春雨へつばみの紅はまだ足らぬ
「気配りのすすめ」いよいよ気が疲れ
弾む背がゆっくり花道引きあげる
青森県 波ただお

銀婚式日本列島晴れ上がり
除雪車の来ない季節で安眠し
もう春だ春が来たよと金魚売り
岡山県 千原理恵

もひとりの私が旅のプラン練る
去勢され松は小さくかしこまり
親切があだとなる日の風寒し

D51と歩いた自慢持ちつづけ
押し売りを帰えせば後も見ず歩く
七十と言えとみんなにおだてられ

岡山県 二宗吟平

立派な字書いた葉書に見入る父
漬物の石持つ母はまだ達者

岡山県 戸田種子

印鑑を押して互いに他人です

岡山県 松本元江

脱皮する夜明けをしっと待つトンボ
もう寒さ忘れて軽い立話

岡山県 小林妻子

不況貫く親子の意見寄せてみる
思い切り泣いた涙はふかずおく

岡山県 田中隆二

春一番どこへ吹いたか村は雪
今日もまたお尻を叩く棒グラフ

羽曳野市 堀江純子

針の穴が女の視野を深くする
意地見せて日かげに育つ藪椿

米子市 新宮市 船越正

我がの身を常に案じて恩師逝き
モノリザ画意味がありげに俺を見る

飽食に馴れて心はすさみゆく
追伸に本音を秘めた子の便り

新宮市 山田平和

捨てられて泣いた砂場が美しい
逆転の執念はこぶ最高裁

広島市 望月晴彦

やけに鳴く鴉利息の高い金
日教組文教自動販売機

弘前市 田中叶

紫陽花の好きな私は雨おんな
台所器用な男のひとり酒

桜井市 前山美恵子

朝ぐもり靴もうかない顔をする
渡り鳥明日のテーマを見とどける

米子市 門脇晶子

結局は子に従って春の風
合格か受話器の声が弾んでる

和歌山県 北山凡太

糸くずを取りつつパートに昼が来る
カンカンと角突き合わせ奈良の春

大阪市 渡部さと美

寝た切りへ窓開け放し春を呼ぶ
美しい夢なら抱いたままで居る

岡山県 山本玉恵

岡山県 池田半仙

帰りました孫の大声百点か
一番に賑やかなのが町議戦

大阪市 權 安 達 一 郎

列つくる事もおぼえた入園児
口少しもつれる友と草団子

大阪市 町 田 達 子

そよ／＼と吹く春風は旅の使者

子供よりママ弾んでる入学式

高知県 曾 我 部 裕

孫が来る報せ押ピンさがさねば
したたかに狂う日もあり宮仕え

大阪市 松 本 た だ し

にぎやかに極楽がありへんろ宿

どこまでも大師とふたりの鈴の音

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

初恋の昔を告げる同窓会

あの辺が我が家機上にはしゃぐ妻

島根県 高 尾 よ し 子

早春の陽だまりに咲く野水仙

貧しさは言うまい湯豆腐踊ってる

吹田市 西 岡 豊

一献の本音をぐいと呑んで笑む

元校長酒に浮かれた意外性

西宮市 飯 森 泰 世

結婚もせずに息子転勤し

若者の話に老人疎外され

鳥取県 灘 尾 民 子

美女眠る森に王子が訪れる

新しい門出に夢を積みあげる

大阪市 堀 口 欣 一

東京はこんなに広い春の夜

ヒゲ伸びていても楽しい春の旅

和歌山県 山 田 久 子

雪どけを待ってたように娘が嫁ぐ

娘が嫁ぎ老犬が逝く寂しいなあ

鳴門市 八 木 芳 水

家中が風邪に縋なめされた冬

ちよつと出た言葉に重荷背負い込み

米子市 本 吉 宗 光

下馬評にそむき阪神勝っている

長い冬耐えたと言わず花四月

高知県 北 川 竹 萌

ゆきとどく掃除に目立つ塵一つ

載いた餅固くする抜歯の日

大阪市 田 中 節 子

一人きりの家でハモニカ吹いてみる

夫退院と決まり残りの梅を見た

川西市 野 村 静 雄

退院の元氣へ髭が生きてくる

過去みんな話して少し悔やまれる

島根県 北川 民子

三步の庭ありて見上げるおぼろ月
糸口がみつかるまでの腕相撲

出雲市 竹 治 ちかし

母の道歩んで母の心知り
合掌をすれば善人らしくなり

島根県 園 山 世 似

屋上の干し物カラフル春の風
老妻に幼児のごとく粥をやり

守口市 長谷川 司

走るのも妻より歩幅が狭くなる
サウナとは赤道直下だと思ふ

東大阪市 小 林 勇 人

雄飛せよ太郎次郎の鯉幟
豪邸に住んで憩いのないお方

鳥取県 林 原 一 尚

土地売った農夫の派手なゴルフ帽
労使双方に般若心経読ませたい

大和郡山市 岡 田 すみれ

話せぬ人形づくり生き甲斐に
寒くとも一雨ごとに梅ふくらみ

倉敷市 赤 沢 沢の藤

もの言わぬ亡父の写真の目を避けて
老二人向き合って飲む熱いお茶

八尾市 松 下 蕉 露

終点で一人になった赤字線
七人の敵が消え女房だけが敵

鳥取県 松 本 みさき

酔ぎめの出鼻をくじく妻の愚痴
プラン立てて包丁さばきの音のよき

大阪市 平 井 露 芳

日本列島寒気もたらしおしん去る
花冷えと言うても桜咲いとらず

大阪市 田 淵 晴 子

詩流る憩の家の弾む声
列乱す中年女のあつかまし

大阪市 大 塚 節 子

たいていのニュースも刺激にならぬ世に
古き塔にはのめく雲や吉備路行く

和歌山県 西 村 重 彦

明日もねあしたもねと仲のよき
人生の弾みはいつも涙です

西宮市 待 田 麻 黄

延着の列車の雪に春はまだ
遠足の列に小犬がついて行き

八尾市 椎 尾 公 子

戸籍係一字まちがえて男の子
うら若き女流作家は眼鏡かけ

大阪市 山 脇 正 之

春寒し医者の口癖血圧に

釣天狗一流釣具でヘラ二匹

大阪市 山本 灼 齊

人生に飽きても八十路虹の夢
美しい嘘の誘いにふと迷い

兵庫県 野々口 ゆう也

トマホーク若い生命を無駄にすな
毎日の練習はずむママチーム

千葉県 中村 有人

太極拳体操ブームで若がり
虫虻にも葬列蟻の黒喪服

唐津市 筒井 朴 竜

病みつきになって食事も忘れたり
襟足を見せる女に過去があり

米子市 光井 玲子

川柳列車赤字路線に力水
菓子屋の子甘茶の味に馴染めない

鳥取県 福田 あや子

艶少し残したままに落椿
子の手紙寒い心に灯がともる

八戸市 島田 昭治

休日は欠伸の続く長い春
病院に居つき三食昼寝付き

鳥根県 喜島 ノブ

合格の電話涙で聞きとれず
肺ガンのすすめ政府たばこ売り

高知県 小澤 幸泉

沼の中蓮の花咲く花庭
ねずみ今年こそはと思う丈

大阪市 北田 秀月

はるかなる老後と笑う若い友
ビル影が重なり合った夕の街

泉佐野市 大工 静子

かにかくに春の一日のんのん歩き
ねこやなぎ信頼出来る友ばかり

弘前市 眞喜内 實

一人住む義姉に昔を恨まない
味見して満腹一品入れ忘れ

鳥取市 武田 帆雀

全身に手の届きたるありがたさ
鍵束の一つで開ける寡婦の城

島根県 田中 幸里

ジュニアの部

お父さん好きな遊びが多すぎる
おねえちゃんちよっと待ってが多すぎる

岸和田市 奥 篤司
(六歳)

青春のシンボルのまま卒業す
花の芯さあれば花が笑い出す

— 同人 吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

松川 杜 的

本当は淋しがり屋という悪女

西川 景子

人間誰しも生れながらの悪人は居ない筈。不幸にして悪の道に走ったが、恐らく本心は悔悟の念に苦しんでいる淋しがり屋ではないか。

熱演は裸になっただけのこと

谷 垣 史 好

熱演とは裸になることか、脱ぎさえずりや儲かる時世。私も女に生れたかった。

水ぐるま自問自答をくりかえす

西山 幸

ゴットン、ゴットン廻る水車の音が何か自問自答を繰り返しているように聞える。静かな空間に自分を水車に置きかえてのひととき。

裸婦の絵をまっすぐ見つめる絵の心

岩 本 雀 踊 子

画廊の一隅で裸婦の絵を食い入るように見

つめている作者が見えるようである。美を探究するその眼が異様に輝いている……。私も俗の素人だが絵が好きでよく見に出かける。ちよつと乱れた型で女の服流行る

遠山 可 住

全く女性の服ほど千変万化なものはない。中には布地一枚をそのまま、時には左右不揃いの型のものやら……。こんな様を中七で適確に表現した手腕見事。

まないたが不協和音をたてている

八 木 千 代

奥さんとの間に何かがあった。台所からの不協和音が耳につく。仲睦い夫婦にもたまには好いんじゃないですか？ 作者は女性です。客観句と解します。協和音について楽理上申しますと、振動数の比の簡単な物ほどよく協和し、最大公約数の求め得られないものを不協和と言つておす。

何事も無かつたようにお早うさん

小 野 克 枝

姑と嫁が昨夜ちよつとした事で言い争つたのだらう。翌朝まで持ち越した気まずさまでちからからの「お早うさん」の一言で和解が成立するものです。めでたしめでたしと言ふところでしょうか。時の流れも汲みとれる楽しい句となりました。

裕福なおしんが遠い人になる

津 守 柳 伸

貧乏で苦しんでいる姿がおよそおしんのイメージ。裕福なおしんではびんとこない。そこでこんな句が生れたのでは。

咽喉の辺までしか出てこぬ年になり

有 働 芳 仙

テレビに映つてゐるタレントの名が「ソレノソレノ」咽喉の辺まで出てくるが、そこらがなかなか思い出せない。年はとりたくないものです。

実力を買いかぶられた日の不安

黒 田 真 砂

お互い実力を持たぬ者の実感句です。私など川柳に限らず他の道でもしよつちゅう味わされてます。

子を叱る言葉を里へ聞きにくる

辻 文 平

当世の子育ては難しい。下手に叱つたらとんでもない事になりかねない。里の親に聞きに来たと言つのであるが、親とて適切な言葉を知る由もない。子育ての難しさをずばり句にまとめました。

正直に旅のみやげはわかめだけ

北 野 久 子

命令どおりお土産にわかめだけを買つて帰った。何だか御機嫌が悪い。ちよつと気をきかせてイヤリングの一つでも買つてくればよかったと思つても後の祭。女心とはこんなもの。作者は女性客観の句と解します。

水少しさせば氷の角もとれ

雑 賀 美 世

放つておいても氷は溶けていくが、ちよつと水をさしてやると角の方からきれいに溶けてゆく。世の中ってそんなものでは。

59年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自 59年1月号
至 59年4月号

路郎賞候補作品

(到着順)

野村 太茂津

おだてにものろう鞭にも打たれよう

小出 智子

焚火囲もうよ傷の掌かざさうよ

八木 千代

大根が満足そうに煮えている

西山 幸

妻だけは指の動きをみんな読む

堀江 正朗

当り前の顔してみんな生きている

野坂 なみ

子に貰うこの嬉しさと口惜しさと

若宮 武雄

残照へ亡母の笑顔をぬくめます

坂口 公子

道草の罪は数えぬ方がよい

春城 年代

スランプの度に私は縄をなう

澤田 千春

そばに居るだけで息切れすると言っ

奥谷 弘朗
好きになった理由は一つだってない

山口 美恵

コーヒーが飲みたくなって逢いにく

松本 文子

寒いからけつねうどんでも食うか

蘭 蘭

オシッコに夢の逢う瀬を断ち切れ

宮尾あいき

疵口の深さへ赤い実を落す

林 瑞枝

ひとり暮しかと鼠も怪訝そう

谷垣 史好

よく眠る女になって虹が消え

高橋 夕花

老化現象とは哀しかりボールペン

錦織 文子

真白の紙に日の出を描く自信

妹尾 春江

帰るのを忘れたように昼の月

角野かず子

無駄一つ買う日女ははしやいでる

西村かすみ

外は雪みかんの色があたたかい

遠山 可住

朱の腕に何満たしても人恋し

西山 幸

病人に見せたい花を待ちわびる

高杉 鬼遊

男でも女でもない友はよし

小出 智子

つまようじリングに立てたまま帰り

西森 花村

平和だな妊婦が目立つ初詣

川口 弘生

なまけ癖十日戎へ捨てにゆく

福本 英子

手作りを添えて小さな札をする

田中 亜弥

エトランゼ前もつしろも風が吹く

林 はつ絵

正本 水客

黒川 紫香

ひとり暮しかと鼠も怪訝そう

谷垣 史好

ぼんぼこ山の月は狸を眠らせぬ

林 瑞枝

むらさきの好きな女になってゆく

人恋しリンゴの皮が長くなり

震度4ぐらいて妻のヒス終る

二人共無口になって雪しきり

妹を叱ると姉が先に泣く

男でも女でもない友はよし

いい女になろうと思う春の雪

ペンダント失くした胸の広さかな

米櫃を男が覗けば雪になる

離あれ父のない子は十になる

物好きのように言われている幹事

上品な人のあくびを見えしき

泣き虫の少女待つて春の椅子

竹内すみ子

西口いわゑ

内芝登志代

小出 智子

高橋 千万子

野中 御前

川上 溪水

林 瑞枝

事勿れ主義でみんなが距離を置く

小林孤呂二

西山 幸

杉浦婦美子

両川 洋々

安藤寿美子

奥田みつ子

西山 幸

杉浦婦美子

両川 洋々

安藤寿美子

奥田みつ子

小出 智子

高橋 夕花

福本 英子

園山多賀子

納 糸葉

西口いわゑ

内芝登志代

小出 智子

高橋 千万子

野中 御前

川上 溪水

林 瑞枝

事勿れ主義でみんなが距離を置く

小林孤呂二

西山 幸

杉浦婦美子

両川 洋々

安藤寿美子

奥田みつ子

小出 智子

高橋 千万子

野中 御前

川上 溪水

最愛の妻を娘は嫌い抜く

大根が満足そうに煮えている

木の芽だち総理は嘘を考える

堂々と地下タビを干す天がある

幔幕のなかは同士の吐く気炎

むつかしいお顔暦は四月だよ

気に入りの茶碗は早く振きだす

弾まない毬へ日長をもて余す

ココアを飲むと子供の顔になる

こんにやくの角がうまいぞ冬の酒

音痴とはいえ念仏は澄みわたる

忘られてゆく焙烙もゆきひらも

六兵衛と聞かされてから猪口の味

庭石にすえると見える裏表

五十年暮らした家の沈丁花

熱いお茶愛することはやめている

裏話書いて乱れた世を様ぎ

喜寿の冥息子の芸をはじめて見

一万歩毎日続く距離でない

二ヶ月の逃げる速さよ亡妻いすこ

飯田 悦郎

西山 幸

高杉 鬼遊

土居 耕花

春城 年代

谷垣 史好

八木 千代

福本 英子

飯田 悦郎

西山 幸

高杉 鬼遊

土居 耕花

春城 年代

谷垣 史好

八木 千代

福本 英子

田口 虹汀

橋 高 薫 風

谷垣 史好

大矢 十郎

小出 智子

松川 杜的

恒松 叮紅

竹中 綾珠

橋元 美恵

田中 正坊

新岡回天子

金井 文秋

原 独仙

冬の空鳥の世界も低くなる

指さして故郷の山河射落さん

八重桜モラルが少し足りませぬ

うまいもの分けてるらしい咳をする

林 はつ総

岡井やすお

威張ってる割に資産のない大臣

川柳塔賞候補作品

高杉 鬼遊

初風呂に宝の如く児を洗う

呼んでなさると目が醒める冬の蝶

不器用な夫婦で植える柿の種

落葉寄せ虫の褥を厚くする

いきさつはとうあれ猫を飼って居る

果たされぬ約束がある冬木立

ロールキャベツ一部始終を喋り出す

世に男あるうち減量続くだら

目出度さの中で孤独の風に会う

引返す口実にする水たまり

春風に鬼が梯子を踏み外し

風もよし雨はなおよし二人なら

赤木 和子

後藤 正子

浜本 ちよ

羽津川公乃

植松 慶子

八木 千代

鈴木村颯子

羽原 静歩

林 はつ総

岡井やすお

威張ってる割に資産のない大臣

初風呂に宝の如く児を洗う

呼んでなさると目が醒める冬の蝶

不器用な夫婦で植える柿の種

落葉寄せ虫の褥を厚くする

いきさつはとうあれ猫を飼って居る

果たされぬ約束がある冬木立

ロールキャベツ一部始終を喋り出す

世に男あるうち減量続くだら

目出度さの中で孤独の風に会う

引返す口実にする水たまり

春風に鬼が梯子を踏み外し

風もよし雨はなおよし二人なら

赤木 和子

後藤 正子

浜本 ちよ

羽津川公乃

植松 慶子

春城武庫坊

赤木 和子

福は内鬼も時どき間違える

浅野 房子

残り福あてに出かける風の午後

安田 志津

目の鱗みたいに外すコンタクト

福井 桂香

西 田 柳宏子

肩の荷が確かな歩幅決めている

寺田 裕美

髪染めてみても影法師は同じ

藤井 高子

向い風が好きで矢鱈と石を投げ

市川 鱗魚

つぎはぎの人生きれいな色もあり

渡部さとみ

思い切り泣いて明日を晴れにする

神平 狂虎

今日もまた幸せだったと皿洗う

小玉 満江

逃げられる距離にいるから石を投げ

矢野 佳雲

視野変えて針の穴から世相斬る

羽津川公乃

野に咲いて雨も嵐も覚悟する

寺田 裕美

母さんの化粧に一家皆頼り

長尾つた子

精一杯生きて続編など要らぬ

高杉 千歩

てんごくのでんわばんごうしりたいな

(七歳) 寺沢たかし

自分との闘いきびしく今日を生き

稲本 凡子

太陽と瞳が合いやる気湧いてくる

足立由美子

先頭が好きいつでも傷だらけ

北山 悟郎

谷 垣 史 好

姑になる花束を抱かされる

宇野 昭代

クレーン車を天まで伸ばし昼休み

染道佳南子

いきさつはどうあれ猫を飼って居る

林 荒介

傷心の掌をあたためる大湯のみ

井上 照子

立ち並ぶ北山杉は兵に似て

櫻谷 郁子

雪しんしん不義理ひとつへ長い文

高杉 千歩

果たされぬ約束がある冬木立

前川千賀子

僕もいる写真ビントは僕でない

藤井 高子

引返す口実にする水たまり

植松 慶子

流れ星落ちつく先は地図の外

赤沢沢の藤

自己主張する空缶のよく転び

渡辺伊津志

花開く決心ボンと小さい音

平松かすみ

よく切れるナイフを研いでいる美人

寺田 裕美

思惑はみんな消えてく春の庭

後藤 正子

降ってくる火の粉払えば敵が出来る

杉本つゆ草

河 内 天 笑

楽天家などと他人は言ってくれ

八塚三五島

人垣は騙され易い顔ばかり

北山 悟郎

掌に乗せた筈の夫が見当らぬ
ロボットに叱られている夢を見た

藤井 高子

貝割菜土の温みは知らぬまま

山田 保蔵

親の目が届かぬところで娘が熟れる

吉川 寿美

金がありや人が計算してくれる

渡 ただお

手に負えぬ子が大望を抱いていた

上田登志実

余生とやとぎれとぎれの笛を吹く

藤原 秀穂

洗濯機ここの社宅になれた音

舟渡 杏花

投げやりな言葉だけれど温かい

田中 叶

バス停で一円玉がふるえてる

有働 芳仙

華やいていますピエロになりきって

春城武庫坊

目の鱗みたいにはずすコンタクト

赤木 和子

てんごくのでんわばんごうしりたいな

福井 桂香

寺沢たかし

卯の花川柳会（高槻市）発会司会
ご支援ありがとうございました。

会長 若 柳 潮 花

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

中川 滋 雀

チクタクチクタク僕の心の海探す

岩 本 笑 子

チクタクと言う時を刻む音も、この句の場合切迫感はない。むしろ快い響きに心の海の幕開けが近いとも感じられ、明るい句となり拍手を送りたい。

割り切った筈をつり銭なぞ数え

藤 井 高 子

その時は確かにそんな気で解決した筈なのに、後になって未練心もたげてくる。悲しい人間の宿命かも知れぬ。しかし面白い句。ある予感老人手帖を持ち歩く

紀 市 郁 栄

「ある予感」が言い得て妙、持ち歩くまでリズムにのつた句に、不安感は微塵もなく、共感を憶えます。

十五歳へさよならをするときめきよ

中 尾 まゆみ

さよならをする十五歳は、やはりもの想つ

思春期の乙女だろう。ときめきが聞えます。つまずきの風に傾く庵主さま

吉 永 伊三郎

つまずいた一人ひとりの、切実な女性の訴えをふんわりと包んで、庵主さまの時に厳しく時にやさしく仏のみ心で諭される慈顔は少しドラマ的だが秀句。

何事もなかったようにネガ破る

林 荒 介

どんなネガだったのか、誰にも見られたくない秘め事はあるもの。ネガ破るに卓抜な想が生きたいとして好感がもてます。

子が描いてくれた瞳はきれいです

堀 江 光 子

恥ずかしいけれど、ママの眼はこんなきれいいじゃないわと。然し素直で直線的な句。

風が連れてきた囁に耳を貸し

永 田 俊 子

風に乗る囁土足で押し寄せる

児 玉 歌 子

「連れてきた」と「乗る」噂で聞く人の耳にはこうも違うもの。耳を貸す心の動きと、土足の非凡さが秀逸です。

惜しまれて去ったつものりの砂時計

西 本 保 夫

惜しまれて去ることの難かしさが、管理社会の現実の中で、砂時計に集約されていて身につまされる。

愚痴言えるだけ倅せよと聞いてやり

麻 野 幽 玄

愚痴も言えない立場に置かれた非情さは少

しもなく、愚痴を聞いてやる労りと暖かい思いやりが溢れ、佳作となりました。野良犬でいたい首輪を辞退する

寺 田 裕 美

今更三顧の礼で迎えに来られても、キツパリお断りした心の底に、野良犬の意地がそうさせたのかデリカシーな本音と建て前が絡んだ心情がのぞける。

律儀者馬鹿を承知で生きて居る

北 山 悟 郎

自分を馬鹿だと思ってる人はない。けれど馬鹿正直で損をした経験はあるもの。この句穿ちの中に風刺が効いている。

と空白にして置こう恋の距離

林 原 一 尚

空白の距離とは、男の勝手な夢だろうかと空白で始まるリズム感に捨て難いロマンが感じられる。

割愛するには惜しい句の中から並べさせて頂きました。

くしゃみ一つしても赤ちゃん主役なり

福 井 桂 香

出嫌いとお好きがいつももめている

栗 谷 春 子

オンザロック独りの刻を深くする

吉 川 寿 美

悪筆を心でカバーする手紙

宮 本 佳 女 男

音信の絶えて久しい花馬酔木

赤 木 和 子

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
銅鑼鳴れば我も浪漫派の一人
啄木のたむれし蟹市で買つ
和歌山市 西山 幸
柏餅親も子もない身をおもつ
平穩に生きて聖書も閉じたまま
笠岡市 木山 遠二
極楽のお召しなかなからず中風
泣き中風よだれを妻が拭いてやり
富田林市 岩田 美代
風に乗る噂だ脚色しておこつ
いっせいに羅漢笑つた春の幻想
愛媛県 八塚 三五島
考えを変えて渡れる丸木橋
パンコーヒー正門までのエネルギー
尼崎市 西村 かすみ
青りんご丸ごと噛るベアのシャツ
三人の旅の一人は石を蹴り
萩屋川市 岸野 あやめ
同じでも和せず女の友と言つ
遠花火そんな話もありました

米子市 青戸 田鶴
ゆつくりと地虫はい出る土の恩
薄いなさけ薄いきずながふえている
高槻市 笠嶋 恵美子
吹き溜り銀杏が一つ春を待つ
近づくとき色褪せていく虹の橋
高知県 赤川 菊野
表札の亡夫の名前も薄れかけ
写経する一字一字に亡父が住む
萩屋川市 堀江 光子
なくさめの言葉ともなる葉のそよぎ
親友の秘密は夫君にも秘密
大阪市 中西 兼治郎
追加予算花見に我家も可決
よく耐えた植木摘み春の水
大阪市 小野 風童
風あげて子供と大人眼が同じ
岡山市 川端 柳子
仲よしの少年を待つ老いた犬
今治市 矢野 佳雲
鶴飼いの鶴大羽搏きをして飛ばず
米子市 八木 千代
夢がひしめいて人形たちの電話
尾崎市 春城 年代
東の窓はあけぼの色の命かな
島根県 松本文子
花の陰で化粧を落とす日の哀しみ
富田林市 植松 慶子
独り居の静けさ部屋は花の冷え
鳥取県 川崎 秋女
燃えつきて女が白い蝶になる

大阪市 上江洲 勝子
乾涸びるくらしへ孫の潤滑油
藤井寺市 赤木 和子
酔々さんへ
春や春天上界はいかばかり
西宮市 奥田 みつ子
浮世とは関係ないとヘッドホン
羽曳野市 田中 隆二
母の忌へ沈丁花の香流れそめ
吹田市 西川 景子
掃き溜めの鶴はとてつもなく陽気
守口市 羽原 静歩
春おぼろおぼろおぼろの酒を酌み
尾崎市 春城 武庫坊
少年の心で鎮守の森抜ける
羽曳野市 麻野 幽玄
河一つ距てて町の盛衰よ
西宮市 草刈 墮駄
生きている手掛り探す望遠鏡
富田林市 藤田 泰子
ゆつくりと春の女神は羽繕ひ
指宿市 渡辺 伊津志
空間の音として字を描いている
鳥取県 清水 一保
本棚が若かりし日の僕を呼ぶ
岡山県 松本 元江
自画像に孫を抱かせて画いてみる
島根県 小砂 白汀
政治家が絡み風葬汚される
米子市 林 荒介
連弾のピアノになつてふたり

四畳半半分程は妻の息

先発の蛙が春を呼びに行く

土居 耕花

鳥取県 林 瑞枝

雉子鳩の啼く家ありて春眠し

行く先まだ決つていない春帽子

吉田 笑女

鳥取県 奥谷 弘朗

菊の芽に逢まじりて春つらら

国民栄誉賞お元氣なつちが良

岡井 やすお

受賞してリズムに乗つて来たと言つ

賽銭をあげぬと効めなさそう

羽曳野市 天崎 只士

只士

般若経亡姑の黄泉路を照らすべく

ふた心あつて二つのあおをもつ

米子市 沢田 千春

千春

三度目の助走男の意地がある

転勤を機にアデランス

岡山県 井上 柳五郎

柳五郎

留め袖の妻の化粧に惚れなおす

薄命の仏に会いたい秋篠路

和歌山県 中尾 まゆみ

まゆみ

梅桜いっしょに咲いて季節はけ

泣き言も甘い話も隅の椅子

近江八幡市 前川 千賀子

千賀子

おれあけ私ひとりの泥化粧

人を恋う同じ心で人を避け

豊中市 田中 正坊

正坊

おだやかに虫歯を通る春の水

名園へミューズびつそり降りてくる

和歌山県 松原 寿子

寿子

青い鳥探しにメリーゴーランド

結論はこうだと意見もとめられ

和歌山県 松原 寿子

寿子

母にだけ疲れたという里帰り

あの人の薬味となつていた私

和歌山県 若宮 武雄

武雄

振り向かぬ後姿にある驕り

この雑草は残そう可憐な花が咲き

和歌山県 若宮 武雄

武雄

悠々と旅雁の列は月を縫い

鉄筆で闇の世界の詩を打つ

鳥取県 さえき やえ

やえ

巡礼の行進曲は鈴がよい

おばあちゃんが私の留守にピアノひく

米子市 菅井 とも子

とも子

最短の出世頭で理屈はい

田中 亜弥

献血車出た青年の眉清し

名保 正敏

かあさんと呼ばれて辛い別れする

野良の昼浮世忘れて花相撲

唐津市 筒井朴竜
頼被りとれぬ啓蟄まだ寒い
大阪市 白石潔

鳥取県 林露杖
月が差し花散り込めど病みの窓

名古屋市 藤井高子
黄砂降る逢えず帰つた孤児想ふ

川西市 野村静雄
花道の素足は女よりおんな

高知県 曾我部裕
昇進がなかつたらかな一度の職

高槻市 梁川吉子
汚れてるだけの軍手が捨ててある

岡山県 山本玉恵
運命の糸あるように結果出る

米子市 野坂なみ
半紙からはみ出た孫の筆のあと

和歌山県 北山凡太
笛吹いて一人で躍るやせ蛙

大阪市 萩谷まさ
脱皮した蛇が見ている新天地

豊中市 満仲きく子
春霞ふわり体を包み込む

唐津市 木塚素石
できるだけ心豊かに黄水仙

京都府 木本如洲
なりたくなつた夫婦をこ仲裁

笠岡市 松本忠三
自慢聞く軽いゆとりをもっている

うそほんとと当り障りがなくて無事

西宮市 津山冬子
愛情が湧く時女強くなる

岡山県 池田半仙
盆栽の愚痴を聞くにもいる年期

八尾市 松下蕉露
家計簿の補正予算は煙草代

唐津市 田口虹汀
叩けない猫で首輪を着けている

唐津市 浜本ちよ
園児めきボスにも送り迎え要り

鳥取県 松本みさき
騒がしい孫のヤンチャにとき忘れ

山口県 高崎雀声
結婚のシーズン衣裳何人目

宝塚市 丸山よし津
回転木馬ママと目が会つ王子さま

大阪市 川原章久
春麗らお腹の胎児にも太陽を

倉敷市 藤井春日
ふる里は古色に沈んだ城下町

羽咋市 三宅ろ亭
生粋の地金を見せてからの友

守口市 結城君子
野草には野草の香りある散歩

岡山市 広田小菊
一枚の葉書誠の愛運び

岡山県 小林妻子
本当のことは知らぬと他人めく

堺市 高橋千万子
長いながい言わけを聞く電話料

平田市 久家代仕男

倒産のそれから健康とり戻し

岸和田市 芳地狸村
月並な主婦でよかつた三十年

岡山県 岩道博友
風呂敷の扱い上手で和服好き

松原市 佐藤藤子
土筆とりにおいてと電話温かい

鳥取県 武田帆雀
今はなき大臣表彰父も亡き

兵庫県 野々口ゆう也
七彩の幻想炎えてる壺の中

岡山県 千原理恵
地図ひろげ遠い旅などしたくなる

米子市 光井玲子
椿姫わたし今でもファンです

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橋高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「裏」 選者 橋高薫風

締切 6月10日

(ハガキに三句以内)

投句先

大阪市東区馬場町3-43 NHK
大阪放送局「さわやか広場」係

発表

6月24日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

う海しお潮 温 泉

西 尾 栞

昭和五十九年五月八日は「むらくも」の三十五周年観桜川柳大会であった。

それに参加すべく、川柳塔の連中は、本社
の七月の例会もそこそこにして夜行列車で大
阪駅を発った。

紫香さんから、寝台車を用意したげるから
と親切なお誘いを受けたが、血圧の都合と、
折角酷鉄の高い交通費を遣うのだから、知ら

ない温泉にも入りたいと思って、我が儘に、
六日の昼頃新幹線に乗って、三時十分の伯備
線の人となった。今年は長く居坐った冬で、
新見から奥は山影に残雪が深く残っていた。
五時五十九分松江に着いた。改札で海潮温泉
へ行くバスはどこから出るのかと訊ねると、

「これから海潮温泉に行くのですか。あんな山の中へ」と反問された。「それは大変だ
タクシーしかない。ここなら松江温泉もある
し、玉造温泉も近い」と駅員さんは言い乍ら、
海潮温泉へ行く私を如何にも物好きな人間!!
と言わぬ許りに、隣の駅員と笑いあっていた。
致し方がないので、駅の外に出て五、六人
並んでいるタクシー乗り場の列の後についた。
「海潮温泉のうしお荘へ」というと、日交
タクシーの運転手さんはニコニコとして「そ
れは、良いところへ」と言いながら早速、メ
ーターを倒した。

「海潮荘の露天風呂は天下一品ですぞ。自
分も、休みには家族の者をつれて、のんびり
とあの露天風呂へつかりに行くんです。それ
は良いところへ行きなさる」と今度は先刻の
駅員の笑いと別に、ベタほめの言葉で、あんな
山中の温泉という嫌な印象から救われて、
段々に暮れてゆく窓外の暗い気持から、明るい
気持になつていった。

約五十分余り乗ると、歓迎海潮温泉という
電飾が春の闇に浮かんで、赤川にかかる温泉
橋を渡ると、車は温泉町らしい明るい玄關の
旅館を三軒程通り、目的の海潮荘の前で車は
停った。

鞆をもつて、先にたつ女中さんに飛石伝い
について行くと、一番奥の離れの部屋の前で
とまった。上を見ると「蛭」と書いた名札が
かかっていた。三畳の控えの間には冷蔵庫が
あって、次の八畳には本床があり、ホーム炬
燵と石油ストーブが置いてあって、旧式のス
トープの故か、石油の匂いがプンプンとして
いた。

先ず一風呂と、女中さんに訊ねると、ここ
は露天風呂の温泉がメインで、他に浴槽がな
く、雪が降っても露天風呂ですから、ご案内
しますというて、簀の子板を並べた渡り廊下
を露天風呂へと先にたつた。右の入口は殿方
左の入口は御婦人と別れていたが、中に入る
と岩で仕切つてはあるが、湯はいけいけの混
浴であった。先刻の運転手もほめ、女中さん
が自慢するだけの立派な何十トンとある岩が
程よく組み合わされて、二筋の原湯が岩を伝
つて湯船に流れ込んでいた。

私の経験からしての露天風呂は、この温泉
は先ず一級の風呂である。岩と岩との生まれ

て立派なのは、山梨県の石和温泉の花月旅館であつたが、その岩は他国から集めた岩で岩の一つ一つに国の銘が入つていた。が、この岩石は自然のままなのが何よりも嬉しかつた。その外、上州の宝川温泉の露天風呂も一級である。

湯の真中に、大きな一枚岩が丁度お膳のようにしつらえてあつて、先客の四、五人がその岩の上へビールやジュースや、おつまみを並べて、歌こそ唄わないが、身体を湯にとつぷりつけて、いともんびりと静かな宴をしていた。

私は岩を枕に仰向けに浮いていると、折からの春の月が木の間にぐれに上つて来た。

露天風呂岩を枕に春の月

川柳とも俳句ともつかぬ句を口ずさんで、ふと見ると、そこから岩と岩とが押し迫つて女湯の方へゆけるようになっていた。女湯の方はボチャツとも何とも音がしないので、閑かに、こわこわ行くと、岩の肌に

殿方は入欲近視寸留

というユーモアの文字が刻まれていた。

奥出雲の湯の効能を読んで、ゆつくり、つかつて出てくると、ホーム炬燵の上に種々のご馳走が並んでいた。女中さんを相手に、松江駅で笑われた話や、タクシーの運転手さん

にほめられた話をした。そして友達に紹介された旅館は山水館であつたことを言うと、ライバル意識をギラリとだして、女中さんは何かと抗弁した。

こんな山の中で、何故、海潮温泉というのかというと、天平五年（七三三年）の風土記に、地元の旧家今田家の古文書では、尾のないう小牛をこの湯に入れたところ、シツポが生えてきたことから「牛尾湯」と呼ばれるようになったという。海も見えない山里が、牛尾から海潮に変つたのは、泉質にあるといわれている、という話である。

もう一度、露天風呂であたたまって、静かな静かな山の湯の宿に一ト夜の夢を結んだ。

朝の食事をすますと、今日のプランは鬼の舌震へ行くことであつた。曾て「旅」という雑誌で、鬼の舌震の記事を読んで、あこがれたこともあつたが、とても行けるところではないと観念していたが、ここまで来たからには舌震を見通すわけにはゆかない。

タクシーを頼むとキネマタクシーの恩田さんという運転手がきてくれた。恩田さんは、赤川の蜚保存会の提唱者で、蜚を自分で孵化している努力家である。

先ず、絲原記念館へ案内してくれた。ここは鉄師頭取として栄えた絲原家の歴代に亘つ

て所蔵された美術工芸品や、たたら資料が一、二、三の展示室に沢山陳列されていた。残念なことに絲原家の庭園が雪のため閉鎖されて見られなかったことである。

こここの売店で中食のそばを食つた。

雪晴や出雲のそばは旨しとも旨し

それから待望の鬼の舌震へと車は走つた。斐伊川の支流馬木川の中流二キロに亘る大溪谷で、浸食によつて出来た巨岩奇石、鵜穴があり、その岩間を清流が流れ、自然の作り出した壮大な景観は洵に筆舌につくせぬものであつた。下れば上り、上れば下り、橋があれば渡り、渡れば溪に沿い、沿えば巖にぶつつかる。流石亭をはるかに後にしてゆく。自分は、自分の脚を疑つた。恩田運転手さんがもう一息も一息、折角来られたのだからという励ましの言葉で先に立ち、そして木の枝を折つて杖を拵えてくれたから、よく歩けたものだ。

昭和五年五月二十六日、与謝野鉄幹、晶子夫妻がこの地に遊んだ歌に

馬木の溪七つの籠の岩すぎて

ひかれるきぬを曳く泉かな

みづからの投げたる岩に驚きて

舌震いたる鬼の溪これ

山かけの仁多の長者の家ひろし

泉の音に青すだれして

絲原家を訪れた時の歌である。

絲原記念館で、売っていた「碧雲抄」という二人の歌集の中に数十首載っているが、余りにも生々しい雄大な景観に圧倒されたのか「みだれ髪」「恋衣」「舞姫」のような優美な雅かな歌はなかった。

若返りと弱体化

小池 鯉生

角川版の国語辞典に「呆け」が無くても「阿呆」「痴呆」が載っている。つまりない事を気にするようだが、近頃の川柳はさておいて、俳誌に矢鱈にルビ付きの句が目につく。例示してみよう。月刊「俳句」今年2月号P18、飴山実作品25句に就いて。

曾て、路郎先生は、旅行吟はあとで出来るものである。その時の感激は余りにも生々しくて句にならない。何日か何ヶ月か経って、尚心に残るなれば、それが昇華して、印象となって句となるのだと、言われたことがある。心にうなずくものである。

水の精石のこだまは雷に似る

やよ鬼の舌震はよし企わだつる若

岩ありて凭れてきくは春の河鹿ぞ

新芽もゆ、花には早き舌震の谿のこだまを

雁、安道湖、蒼、出雲、石見、鶴嶺、拾得、寒山、性、虚空蔵菩薩、須佐之男、彌宜、鶏、葛、磧、柴漬、鳩

等々、逆に疲れますわ。俳誌を読む程の人に、何故これ程のルビが必要なのか。老川敏彦が読売新聞で嘆いていた如く女性の俳句人口が殖えた結果としてのルビとしたら一千万の俳句人口は何を意味するのか。もし川柳誌にこうしたルビをふつたら何と言うだろう。川柳界にもこれに類する他の心配が起りつつある。よそごとではない。小学生の唄屋が出たり、画家が出る現代になった。若返りも必要であろうが、これでは痴呆美だ。

空耳に又車に乗って、運転手さんも初めて行くという、可部屋集成館を訪ねたが、生憎冬休とて残念ながら、一路海潮荘に帰ったのが三時半だった。

ロビーで休憩していると、ふと目についたのが、毎週水曜日が休と書いてある文字であった。旅館やホテルで完全に一日休日をとる規則の旅館は始めてなので、色々と質問したが、完全に実施しているというので感心した。例えば火水木のお客さんは如何するのかときくと、火曜日は泊ってもらって、水曜日はお隣りのあめや別館で預ってもらい、木曜日に当館へ帰ってきてもらおうのだという返事であった。

大いに感心して、疲れた身体を件の露天風呂で癒やして、早々に部屋に帰った。

翌朝九時半に柊みどりさんのお嬢さんの運転で、藤井明朗さんが迎えにきて下さった。そして堀江正朗さんの旅館のような立派な新築の家へ着いたのが十時であった。そこで、大阪から、和歌山から来られた方々と合流したのであった。

最後に、黒川紫香さんのアドバイスで親切で、海潮温泉を知ったことを心から篤く御礼申上げる。

にせものが出て来てブームがブーム呼びひで

塾ブーム親の銚子に子をはめる
 カルチャーブームマのお鼻が高くなる
 カラオケのブームでプロがおどされ
 ブーム去ってバンで故郷恋しがり
 開発のブームをよそに農に生き
 工場はブームの機嫌見て動く
 華やかなブームの蔭でみがく芸
 スター来演里にブームを置いてゆき
 自信ない女がブームに乗せられる
 金ブーム去りほっとする電話口
 ブーム去りやっとな自分を取り戻す
 自然食ブームで食費高くつき
 ロボットがブームのつて人を追う
 フルムーンブーム老婆から抗議
 ブームにはすぐちよっかいを出したが
 ブームですしてやったりという在庫
 在庫品値上げブームで救われる
 本物はブーム去っても光ってる
 こんなのが今ブームかと手内職
 年金も旅行ブームに乗っている
 次々にブーム手を変え品を変え
 右

是に
 寿風
 里美
 枯梢
 正坊
 はつ
 裕
 元江
 克子
 景子
 綾和
 玉恵
 宵明
 武庫
 浪速
 春日
 武水
 耕花
 テル
 右近

釣りブーム今夜は隣から蝶素身郎
戦争展ブーム不穏な風が吹き和子
手作りの得難い味がブーム呼ぶ軒太楼
浮き沈みブームの明日に桐一葉ゆう也
過ぎ去ればブームの主役納屋の奥ちかし
再就職してからブームの外にいる三五島
ブームにも疎く日銭の靴をはく文子
コマシヤルブームに乗れば占めたものよ志子
地球儀の裏からブーム覗かれる雄々
知らぬ間にブームに乗せられていたわたし克穂
仕掛人次のブームへ眠れない代仕男
退き潮のブームに閉じた貸し店舗狸村
もう飽いて次のブームを待っているたかし
観葉のブーム静かに小冊子キミ
ゲートボールブームに乗った長寿国悠泉
土地ブームの頃に儲けた父の墓カズエ
故里の緑をブームが消したくなる文子
残酷なブーム子供が目が光る文子

住

トイレの中で鬼がブームを考える重人
パソコンのブーム孤独になっていく文子
痺ブームあぐらが好きになった妻美緒
ブームとはむつかしいもの入門書重人
悲しくておしんブームに乗らぬ母優

人

妻いつもブームの過ぎた服を買う公一
ブーム来るたびに看板塗り替える地

天

本蔭棒

天正千梢選

たまたまの趣味を先生にしたブーム
軸
だんだんにブームと縁がうすくなる
年代

彈む

天正千梢選

喜寿祝う子に囲まれて彈む母公一
野心家を乗せると彈む口車枯梢
乗せられて彈みがついて酔いつぶれ素身郎
優しさにきびしさに彈む母のマリ景子
彈むだけ彈ませあとは知らん顔軒太樓
音痴でも伴奏次第で彈み出す今日子
豊作の太鼓へ彈む踊りの輪里風
ラブレータ彈む心よサ克蘭ボ里風
彈んでも心の底に泣くもの浜本ちよ
彈んでる孤兒夢に見た父母に逢う妻
尼僧にも彈む心のあった過去兼治郎
春の陽に声援彈む甲子園紀雄
混浴へ彈む心を意識して兼治郎
白酒に桃のお歌も彈むなり岸野キミ
難関を抜けた男の意氣彈む芳水
会える日を指折り彈む車椅子妻
トントンとはずむ手さばき妻の城小菊
優勝へ彈む力士の勇み足春日
退院の胸の彈みが聞こえそうかすみ

善人は弾む心が隠せない
三五島
成長の子等には未来へ弾む夢
博友
不器用な男が弾む胸の内
与呂志

雪山に心が弾む山男
弘朗
孤児の胸期待と不安に弾ませて
浜本ちよ

弾んでるわけ母親に見抜かれる
静雄
春つららオーデコロンの減りやすく
あやめ

人生の弾みはいつても涙です
重彦
或る時は弾んでくれる女下駄
玉恵

再開の心が弾む時刻表
里風
弾む声悩み事など言いそびれ
好恵

やつと雪解けたと弾む便り来る
今日子
里帰り親子の会話弾む夜
よし津

よく弾むまりは遠くへ行きたがる
恵美子
會計が弾む話へ釘をさす
歌子

弾む日の化粧が少し濃くなる
赤木和子
弾む声祝いに送る広辞苑
美緒

優勝旗持つ手も弾むお国入り
景子
相好をくずして弾む儲け高
軒太楼

ためらわず弾みをつけて跳んでみる
凡太
満洲の話に弾む生き残り
右近

弾む胸相手の出方見るゆとり
木魚
雨だれも弾んで聞こえる嬉しい日
好恵

鬼の面付けても弾みなどつかぬ
与呂志
地
天

ダイヤルピーやっぱり妻は弾んでる
洛醉

軸 列

森田熊生選

シテ株の弾みへ笑いともらない

人生の列へ連なる道けわし
妻子
配給で並んだ列を子は知らぬ
千世子
列を抜けそれから人生狂い出し
秀峰
何もかも捨てた身軽で列の外
ゆう也
一列に漸くなった保母の笛
木魚
宝くじ長蛇の列も夢に暮れ
キミ
列外に掘出し物が落ちている
狸村
恩師にはみんなおんなじ列に見え
三五島
参列の中に日蔭の身をゆだね
裕
宝くじもしかしたらの列にいる
満津子
こんな日が私もあった蟻の列
あやめ
善人でもいつでも列の端にいる
重人
街路樹は車の列を見てあきす
元江
前列の吾子をアップにとっておく
文子
反核の列に子供もついてゆく
枯梢
スパーへ小さい欲の列が出来
晴彦
目玉品だけ買いに来た列にいる
比呂志
列組めばみんなおんなじ事思
ひで
難民の列母さんの糧がある
一尚
ロボットに列をとられている欠伸
武庫坊
此の中に仮面の敵が並んでる

列まるく曲った蟻は水を避け
伊津志
待つたのに列の途中で売り切れる
冬子
バスを待つ列で中流意識せず
正敏
生前の人柄しのぶ列を見る
優
蟻の列みんな忙わしい顔でいる
はじめ
偏差値に人間の列決められる
どんたく
列乱す者へ視線で攻め立てる
規不風
人生の節目節目に列がある
好恵
後列に並んで運を待ってみる
明水
ともかくも列にはいつて訳を聞き
芳水
一人だけ列を乱したからあせり
豊太
整列の声風船に詰めてあり
豊太
葬列のうしろで株のはなし聞く
雄雄
列外に出ると世間がよく見える
重人
後列の方は笑っている訓示
耕花
佳
追い越さず蟻はせつせと列につく
喜醉
合格を確かめ列の前に出る
静雄
はみだした子が帰りたい列のなか
年代
前列で鉦のとれた子が目立ち
代志男
春闘の列に重たい靴を履く
虹汀
列外のハンドマイクで政治斬る
本蔭棒
地
天
後列に並んで愚痴を蓄めている
カズエ
核心に触れると列が乱れだす
歌子
軸
通園の列から朝の詩もらう

初歩教室

題 — 刺 激 —

本田恵二朗

老いてゆく脳に刺激の昨日今日 千代女
 (老境の脳へ刺激の鞭を当て)
 食足りて酒を刺激と男の勝手 豊太
 (食足りて酒が刺激とエゴ男)
 足で書く努力が神経刺激にペンを持つ 寿枝
 (足で書く努力が神経刺激する)
 (足で書く努力が神経刺激する)
 花の私語に刺激されて庭の石一つ 理恵
 (花の私語に刺激されて詩情湧く)
 友の賞刺激となつて励み出し 愛子
 (親友の受賞に刺激され励まされ)
 にぎり寿司わさびの刺激に泣かされる キミ
 (にぎり寿司のわさびが脳に突き刺さり)
 あの人に刺激されてかあかぬけた 美津枝
 (恋という刺激でめつきり垢抜ける)
 生きている張合い刺激あればこそ 同
 (ほどよい刺激に生甲斐教えられ)
 良い刺激与えて帰る友の背な 久子
 (良い刺激くれた友の背追う視線)

土足厳禁人の心理を刺激する 同
 情報化刺激に慣れた無感動
 (情報化時代刺激に慣れ過ぎる)
 ネオンの灯刺激の欲しい顔ばかり 克子
 (ネオン街が刺激に飢えた足を吸う)
 凡夫婦刺激も無いが日日好日 同
 マスコミが異常に刺激を煽りすぎ よ志子
 (マスコミが煽る刺激に或る日負け)
 下垂した胃の刺激にとカレー食べ 小愛
 (胃下垂へカレー粉ぐさつとつき刺さり)
 思い切り刺激の強い映画見る 同
 (強烈な刺激求めて映画見る)
 青春の刺激求めて夜の街 琴柱
 (紅灯に刺激求めるのも若さ)
 一と言の刺激胸突くおそろしき 同
 (一と言が胸板ぐさりと突き破り)
 あまりにも刺激があつてしられ鳥 幸泉
 刺激されやはり決心ついたよう
 (ほとほどの刺激が決心誘い出し)
 超ミニ腰を振り振り刺激的 昭路
 (超ミニの腰振り振りが目に刺さり)
 さんま焼く匂い無暗に刺激的 同
 (さんま焼く匂いが空き腹に刺さり)
 ねむ気とぶ刺激が欲しい春日永 志津
 苦言だが刺激剤になればよし 同
 (刺激的になれよと苦言の矢を放つ)
 五感襲う刺激ころに淘汰され 実
 春の刺激よろこび万象蘇る 同
 (春光の刺激へ万象背伸びする)

川柳塔社常任理事会(5月1日)

出席者 葉・形水・水客・紫香・潮花・鬼遊
 太茂津・柳宏子・岳人・雀踊子・重人・笛生
 凡九郎・薫風

《議題と報告事項》

▼路郎忌、水府忌選者交流の件、鬼遊氏に一人。

▼大矢十郎「みかん船」記念句会万端は野村太茂津氏に一人。

▼きやらばく川柳会(米子市・石垣花子会長)

は「川柳塔きやらばく川柳会」と改称、いよいよ活躍を期されている。

▼川柳高知誌の句評担当に正本水客氏を推薦

▼行吉照路氏(岡山県)を川柳塔社理事に推薦、就任。

▼還暦記念句集は四百五十名の参加。

▼池田寿美子さん(貝塚市)が本社事務専任となられる(5月中旬から)

■6月の常任理事会は1日(金)

温情の中に冷たくする刺激 保夫

(温情に冷たい刺激少しまで)

試験という刺激冷たくあしらわれ 同

(一見冷たそうな試験という刺激)

す
ぎ
も
と



杉 本 智慧子

雅号ぶつちやけばなし (209)

呆け防止悩み心配事欠かず
 (心配事が刺激となって呆けられず)
 いたわりもほどほどにして刺激やり
 (いたわりと刺激ほどよくまぜてやり)
 刺激して蜂に追われた捕虫網
 青竹を踏んで明日への希望呼ぶ
 親友が嫁って見合をせきたてる
 ゲートボールに刺激求めて呆け封じ
 かたくなな心をほぐす愛の鈴
 ひ孫抱く夢を刺激の種にする
 老い二人刺激を上手に合け合つて
 一瞬の刺激求めて空踊り
 看板の刺激へ転居すると決め

ちよ
 同
 照子
 章久
 芳水
 同
 武水
 同
 紀雄
 同
 ふみ

刺激迫う少年ナナハンぶつ飛ばす
 生れたて逆づりにして叩かれる
 中年夫婦の刺激剤という旅行
 刺激的タイトルで売る週刊誌
 刺激は強いが効きます針やいと
 年の功刺激中和の役もする
 それぞれに似合う薬味の母でいる
 児の発病が倦怠はぐすよい刺激
 TVアニメの刺激を憂う親心
 若人の割り切り振りに刺激され
 新築の宴から戻り床磨く
 平凡なくらしに刺激の落し穴
 小さじ一杯の塩に金魚甦り

同
 さと美
 同
 やすお
 同
 あや子
 同
 サワ子
 同
 吉子
 同
 勝美
 同

本名は千重子。これは凝り性だった
 父が、長女の私に、父の名の一字を入
 れた名を皇帝本の中から選び出して名づけました。
 五年前、川柳の道を歩みはじめた時、雅号が欲しい
 と考えた末に、幼い時から呼び馴れたこの名を名乗
 りたいと思いました。
 実家の本家が菅公縁の大覚寺派の寺院、また嫁いで
 来た先が、熱心な真宗の在家仏教家という関係で、八
 代様の御文章の中から、智慧という字を頂きました。
 より自己を見つめ、より熱中するという願いも込め
 て……。

針治療ツボの刺激に嘘みたい
 妹の結納姉を刺激する
 一寸刺激与えて意識確かめる
 友の死が老いの心を刺激する
 一滴の刺激別れの胸に抱く
 水割りの底に刺激がゆれ残る
 別れたくない日の刺激ひと待ち
 一と言でぐさり刺激のある言葉
 ほどほどに刺激たのしむ嫌な事
 シラケ派に刺激与える術さがす
 快い刺激へ紅い血がさわぐ
 好きだけと刺激欲しくて知らぬ顔
 ライバルのグラフが伸びるよい刺激
 もう少し刺激がほしい妻の味
 殿方を刺激する肌咲き終り
 マンネリの刺激へ渴いてゆくネオン
 ヴァイオリン亡父への慕情刺激する
 全集に昔の刺激甦る
 止り木の刺激洩らせば老いてゆく
 伏せた目の高さにふれる脚線美
 トルコ嬢刺激小出しに時かせぐ
 裸婦にあき青いりんごがより刺激
 入社二年少し刺激が欲しくなる
 刺激への反応遅い齢となり
 先人の体験を聞くよい刺激

同
 兼治郎
 同
 同
 寿子
 同
 忠広
 同
 山久
 同
 紀久子
 同
 同
 たかし
 同
 同
 あき津
 同
 同
 よし津
 同

題一 幅一 6月20日締切 (8月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

㊦七一一

本 田 恵 二 朗

柳界展覧

集録・板尾岳人

★京都番傘川柳会創立55年
記念川柳大会

時・6月17日(日)10時
所・京都パークホテル

△宿題A▽

織る 山崎 文義選
京ことば 安武 九馬選

侍 奥田 白虎選
大地 磯野いさむ選

△宿題B▽
不思議 加藤 翠谷選

雲 田向 秀史選
若い 梶川雄次郎選

瞳 片岡つとむ選
枝 森中恵美子選

番号 岩井 三窓選
★直原玉青画伯指導の23回

青玲社日本画展は、6月8
日(金)から13日(水)ま

で、大阪梅田阪急百貨店7

階催場で開かれる。今年は
弘法大師入寂千五十年
に因んで「がテーマ」。

★卯の花川柳会(高槻市)
発会記念句会は6月16日午

後一時から高槻市民会館で
開催、高槻市長江村利雄氏

の挨拶もあり、近郊からの
来会者65名、投句者10名の

盛況。推進者の上原逸嗣会
長に花束が贈られた。

★川柳大阪500号記念川
柳大会

時・7月8日(日)13時
所・大阪市中央公会堂

兼題と選者
風雪

月給 板尾 岳人選
体操 笠原 吸江選

ネズミ 金井 文秋選
友 久保田寿界選

祭 小出 智子選
石 高橋 古啓選

御守り 定金 冬二選
ドラマ 広井 季雄選

火 森中恵美子選
革新 吉野 瑛二選

台風 大坂 形水選
通信 片岡 湖風選

川口 弘生選

兄 黒川 紫香選
鯉 齊藤三十四選

流れ 西村 芳川選
ビール 宮口 笛生選

好き 辰巳 胡村選
期待 大矢 十郎選

強気 河内 天笑選
昔 高杉 鬼遊選

始め 高橋 操子選
積む 時実 新子選

歌 野村太茂津選
山本 翠公選

以上5月31日投句締切
百 片岡つとむ選

号 高橋 薫風選
記 海士 天樹選

念 奥山 春生選
★二〇〇回迎えた「朝日な

にわ柳壇」として欄創設以
来の選者である川柳塔編集

長・橋高薫風氏、番傘川柳
本社事務局長・片岡つとむ

氏と選者の記念対談。
橋高「矛盾を突いた庶民の

怒りを率直にいついただ
きた。それと、人生の余

裕たるユーモアがもつとほ
しいなあ、と思いますね。

川柳大阪500号記念大会

(併設 川柳展示会)

とき 昭和59年7月8日(日)11時開場

開会13時→閉会15時

ところ 大阪市中央公会堂・3階中会議室

地下鉄淀屋橋駅すぐ

会費 五百円

○兼題(25題)事前投句制)と特別課題(5

題)事前投句及び当日投句)並に選者は別

稿のとおり。(各題2句)

○投句締切5月31日。投句料千円。

○大会会場にて三才のみ発表。

○投句先583羽曳野市高鷲8-31-11

塩満 敏

★「記念合同句集」参加作品募集!

○一人十句まで

○切1第一次59年5月末。

第二次7月8日。

○参加料1千円。投句先1塩満 敏宛

主催 大阪市交通局互助組合

文化部川柳部

片岡「投句三句のうち一句
ぐらゐは夢やロマン、詩性
を含んだ冒険的な句にして
ほしいですね。」

4月24日付朝日新聞より
★柳宴5月号に「文楽に酔
う」と題し本社相談役・東

野大八氏が執筆。「人形使
いは豊かな想像力と念力の
持ち主でなければならぬ。
私にとって文楽は歌舞伎よ
り実と心の深いものと常に
心の離れる時はない。」
★富田林市広報紙への川柳

新同人紹介

越村 枯梢
栗・大八・鬼遊・薫風推薦

春城 武庫坊
鬼遊・紫香・薫風推薦

上田 登志実
薫風・いつを推薦

草刈 堕駄
薫風・紫香推薦

堀江 光子
薫風・いつを推薦

投稿、減税のための増税重
すぎる(田形美緒)年老い
て間接税に泣かされる(宮
沢正信)脱税の記事にサラ
リーにが笑う(林 澄子)
サラリーマン昇給よりも減
税を(池 森子)考えてま
だまだ多い税のむだ(新聞
千代子)血税の行方見守る
眼を持つとう(堀川美佐子)
ささやかなおごりに税がつ
きまとい(藤田泰子)

★同人藤岡花梢さん25年間
の民生委員としての業績に
厚生大臣より特別表彰を富
田林市から一人受けられた

▽お便り△

■むらくも創刊35周年記念
観桜川柳大会に栗主幹・薫
風副主幹外16名も御出席を
得、盛大に80余名となりま
した。お礼申し上げます。

(藤井明朗)

■第7回鳥取県川柳大会も
投句も合せて二百名に近い
盛會に終り大会実行委員長
として嬉しく今胸を撫でお
ろして振り返って居ります

(清水一保)

新理事紹介

岡山県行吉照路

●久し振りに故郷の風をお
なか一ぱい吸っています。
命のセンタクを兼ねて娘夫
婦と三人のんびり旅をして
来ました。嬉しくて、楽し
くて頭痛も不眠もおあって
おります。

(小野克枝)

■卯の花句会

時・6月20日(水) 13時

所・高槻市民会館

兼題「バート・思い出・背
■西宮北口川柳会

時・6月11日(月) 13時

所・西宮中央公民館

兼題「すらす・芯・自由
吟

時

■東大阪川柳同好会

時・6月23日(土) 夕6時

所・社会教育センター内

兼題「出番・看板・割勘・
返還

時

■富柳会

時・6月21日(木) 13時

所・富田林中央公民館

兼題「笛・指紋・納得
ム・節約

■菜の花句会

時・6月10日(日) 夕6時

所・八尾神社内西郷会館

兼題「傘・手形・火薬・硯
める・濁る

める・濁る

校正雑感

田中正坊

川柳は、言うまでもなく五・七・五の十七音字で構成される短詩型文学の一つですが、これを文字で書いた場合、特別のものをのぞいて、ほぼ十三字程度でおさまります。字数がきわめて少ないだけに、誤った文字やかなづかい、送りがながあれば、一般の文章よりもめだちます。せつかくの佳吟・名句も、それによって価値がそこなわれることが少なくありません。

国語の表記法が確立されていなかった江戸時代の古川柳に当て字が多く、送りがなもまちまちであったのは仕方ないとしても、著名な現代作家の作品にも誤りが少なくないのは残念なことです。たまたま私が本誌の校正を手伝わせていただいてからちょうど一年になりますので、その間に気づいた誤字・誤用のいくつかを例示し、投句される方、清記される方のご参考に供したいと思えます。

誤字が多いのは、主として同音の文字で、例えば「一緒」とすべきところを「一諸」、「徐々」を「除々」、「機嫌」を「氣嫌」、「煩惱」を「凡悩」、「可哀想」を「可愛想」あるいは「絶体・絶命」を「絶対・絶命」といったぐいです。文字の誤用としては、「掘」と「掘」、「年」と「歳」、「孤」と「弧」、「同士」と「同志」、「露地」と「路地」などがあります。正しい用い方については、辞典にあたってください。

次は送りがなの誤りですが、これは「柔らかい」を「柔い」とするなど、送り足りないケースよりも、「隣」を「隣り」、「手近」を「手近か」、「可愛い」を「可愛いい」、「冷たい」を「冷めたい」など、送り過ぎる場合が多く、「つまずく」を「つまづく」と書かれる方が少なくないのが目につきます。

ただし、送りがなについては、省いてもよいもの、送ってもよいものの許容が認められていますので、これも辞典を参照してください。

もとより川柳は、公用文ではありませんから、規則どおりでなくてもよいわけですが、明らかに誤字・誤用は避けるべきでしょう。

また、川柳は俳句とちがって早くから口語体と現代かなづかいを採用していますから、特別な場合をのぞいて旧字体・俗字体をやめて

新字体を使い、誰でも読めるようにできるだけ常用漢字で表記したほうがよいのではないかと思います。

作句にあたっては、かならず辞典を座右におくことを励行したいのですが、私が最も愛用しているのは、ポケット判の『必携用字用語辞典』（三省堂）で、少しくわしく調べたい時は『岩波国語辞典』と『広辞苑』にあたることとしています。また、近ごろは川柳に外来語がよく使われますが、これについては『外来語小辞典』（福音館）がいちばん簡便でしょう。

若葉集

（川柳塔 三月号より）

和歌山市 玉井豊太

いつからか夫婦茶碗が

つやつやし

（寿馬）

菊澤小松園追悼本社五月句会

5月7日(月) 午後6時・なにわ会館

菊沢小松園さんのお人柄から、出席者は本社関係以外にも、番傘川柳本社やふあうすと川柳社からも来会頂き盛会を極める。黙禱の後、ご遺族からご挨拶がある。次いで栗主幹の故人を偲ぶお話は来会者の胸を打った。

小松園さんと私は弥次さんと喜多さんの仲だった。三年前の五月五日に高橋操子さんの句碑建立記念の会で選をされ、その二日後の七日の本社句会、当時は金属会館だったが柳話をされ、途中で疲れ激しく降壇されて以来入院、遂に再起されることなく幽眠境を異にされた。

金のない友だちはばかりついてくる泥棒の逃げた窓から首を出しなどユーモアの句に本領を発揮された。また

年上の女とくぐるてつちり屋

いつまでも待っていますを持て余しと女性の句にも佳吟が多かったと、小松園さんはだしのユーモアをまじえ、小松園夫人や森中恵美子さんとの掛け合いもあって和やか

なうちに、故人との親交をしみじみと話された。川村好郎氏が久しぶりにお元氣な姿を見せて下さった。

今月の月間賞は、江口度氏の頭上に輝く。

(薰風記)

(進行―天笑) (受付―与呂志・重人)

出席者―与呂志・天笑・春蘭・柳伸・柳右子・勝美・栗・月子・浩一郎・千代三・英子只士・紫香・喜風・道子・満津子・白水・潮花・水客・登志代・武庫坊・年代・あいさ・浦野和子・眉水・岳人・章久・覚然坊・健司千寿子・凡九郎・冬葉・三男・狂虎・太茂津千秀・幸・柳宏子・潔・柳影・智慧子・勝晴智子・射月芳・葉子・たつお・みつる・重人鬼遊・みつ子・はつ絵・萬的・美幸・蕉露・雀踊子・三十四・悦郎・山久・カズエ・節子笛生・花村・美房・正坊・度・狸村・薰風・規不風・吸江・好一・恵美子・郁栄・文秋・

頂留子・美代子・泰子・金太・好郎・英壬子
白兔・楓葉・湖風・公一・寿子・美智子・一
二三

席題「雨」

森中恵美子選

雨脚を一日犬は飽きもせず
わがことのように幹事が雨を詫び
雨降れば雨の仕事がちゃんとある
雨が降っても亀の歩幅は変らない
追伸にピリオドを打つ雨あがり
片袖を雨が濡らしてくれまじり
情けかないいつか遣らずの雨となる
飛行雲明日はきつと雨だらう
通り雨だった昨夜の傘を干す
午後は雨読みさしの本出して
雨が好き紫陽花が好き優しい眼
暗い日記に一日雨が降りつつく
雨の日は古い着物を処分する
雨止んで女の過去が顔をを出す
雨天中止ウラ番組はつまらない
珍らしく妻を誘うと雨になる
雨はななめに女の傷を深くする
うすい耳ばかりで五月雨となり
雨おんな一人になって雨を聞く
春の雨口数多い女くる
雨はげし窓の蓋がしまらない
雨の午後やさしい声を受話器から
雨はげし罪深い顔に見えてくる
雨降りの電話は人を恋っている

水客 柳宏子 節子 月子 射月芳 蕉露 湖風 度 幸 智子 千代三 たつお 健司 武庫坊 眉水 智子 寿子 岳人 月子 只士 武庫坊 年子 水客 年代

止り木のおんなを誘う雨あがり
きつね雨きしむ木馬の涙かも
小糠雨二者択一の岐路に佇つ
人間の都合を雨が聞いている
うやむやにするには丁度よい雨で
仏間からときどきのぞく霧の雨
雨の日の牡丹は私語を交さない
やさしさを貰う四月の雨やどり
つまらない男に雨を逢いにゆく
雨足が激しくなってきた虫歯
細い雨旅に出たがるカタツムリ
雨上り夫婦の軽い話聞く
待つ人が来ぬ日は白い雨となる
ふるさとの雨は一緒に泣いてくれ
風の銭ばかり数える雨の部屋
朝の雨女は少し油断する
春の雨返って来ない金を貸す

席題「ヨガ」

大路美幸選

たつお 雀踊子 浩一郎 天笑 狂虎 紫香 美房 美幸 浩一郎 健司 雀踊子 月子 狂虎 美幸 浩一郎 智子 恵美子 登志代 英子 重人 千寿子 みつ子 みつ子 勝晴 度 文秋 水客

いやいやで始めたヨガに取り付かれ
同室のヨガで目醒めるバスター
ヨガには遠く休は昨日を向いている
ヨガをしているのだからかヒカソの絵
三歳児ヨガを上手に真似て見せ
よく笑う女とヨガの本を見る
ヨガをして齢を見せない寡婦の城
贅肉を取る気のヨガを子が真似る
ヨガに凝る眼が生き生きと天を刺す
空っぽの頭でヨガを組んでいます
ヨガおぼえ森にもどれぬチンパンジー
ヨガに似た形で背中かいている
三面鏡ヨガの心を見抜かれる
ヨガに凝る女の膝が丸くなる
合掌の心をヨガで数えられ
痩せた男が哲学者めいてくるヨーガ
尺取虫ヨガが上手と見とれている
ヨガをして食後の葉飲んでいる
ヨガの寂人は独りの息をする
ヨガをする左で猫が欠伸する
ヨガの足まだ仏心に遠くいる
蟬しぐれヨガの耳から闇に消え
その中にヨガ好きもいる蟻の列

兼題「網」

津守柳伸選

白水 千寿子 寿子 幸 柳右子 冬葉 悦郎 潮花 浩一郎 美代子 武庫坊 狂虎 白兔 浩一郎 与呂志 満野和子 満津子 悦郎 はつ絵 冬葉 射月芳 はつ絵 美幸 墮駄 妻 文秋 千秀

情報網温い手と手をつながせる
にんげんの恐さを知ったかすみ網
人買いが網張っているターミナル
法網の中にいるのは雑魚ばかり
網の目を抜けた魚は倅せか
バーゲンの網は女を逃がさない
網からは逃がられない手毬唄
警察の網に掛った網の屑
網の目をくぐるヒントが欲しくなる
年金は浮世の網の絞り粕
網を打つ川に民話の魚と住む
北風に負けぬ男で網を曳く
玉葱の芽がネットから春を呼ぶ
法の網くぐる手段を闇で練る
頼もしい後継ぎがいる網を打つ
網の目の一つ一つにある抱負
天網恢恢マスコミが踊らされ
大物は確かに網をすり抜ける
網しぼる頃は雑魚だけひっかかり
網をあむ父の振り子は狂わない
法の網くぐり長者番付には載らぬ
大物が網の無力を嘲笑う
人魚だけがうまく避けてる僕の網
鯛網の中で一匹村八分
ざんこくな網へ銀鱗陽をはじく
網の目を抜けた魚の関の声
とんぱ追う網からもれる童唄
網張っていたとはうれし呑み仲間
網を干す島に平和な陽が昇る

はつ絵 たつお 射月芳 正坊 狂虎 美幸 鬼遊 幸 章久 与呂志 悦郎 英子 智子 智恵子 吸江 与呂志 柳宏子 悦郎 楓 幸 千代三 岳人 萬的 吸江 度 笛生 重人

網を干す漁村に海が遠くなる
網膜に残る私のマリア像
金網の中で叫んではかりいる
野放図に生きたる奴から引懸る
残り火の網は一途に愛を追う
女郎蜘蛛網に掛けたいのはひとり
金網の裏スカウトの眼が光る
金網の猿に人間覗かれる
蝶々の仲間を奪う憎い網
望郷は網干す父と潮騒と
補修する網へあしたを疑わず

兼題「女」

岩本 雀踊子 選

赤木和子

哀しみの数だけ女脱皮する
童心に戻る女に花の刑
いざの時覚悟を決めるのは女
融通のきかぬ女で可愛くて
人妻と行くと女の匂いする
嘘つきの鏡を愛用する女
くもの巣を見てる女の深情け
女まだ男に賭ける夢がある
祝い唄女のいくさの灯がともる
待ち呆け女の影が少しゆれ
欲深い女の寿命伸びるだけ
幸せになれない女石を積む
女もう幼馴染の目で見ない
母語る女を捨てた母語る
ときどきは刺激が欲しい女坂
長女次女三女養子は嫌と言っ

雀踊子
正坊
健司
章久
美幸
千代三
千代三
雀踊子
白兔
楓楽
柳伸

手帳から名前を消してゆく女
よく喋る女へ弾む春の毬
転落の道で女を待っている
男嫌いで通り寒がりでも通り
この女とならば走れる風の中
男まさりを鏡の中で悔いている
やがて娘も耐える痛みを知るだろう
一枚の絵に私を捜すのも女
女形から出るお色気に負けました
会っただけでとてもやすらぎある女
残り火がくすぶる遠い女の忌
ひざ枕女も策を練っている
かくし絵の女がいつも胸に棲む
女文字逃げ道が一つ空けてある
再会へためらう私も女です
泣くことを知らぬ女の不仕合せ
絵の中の女が探す非常口
女ひとり住むと噂が歩きだす
線香へ恨みつらみを言う女
ついて来た道を疑う女坂
忘れたい女がいまもひとりとか

健司
浩一郎
文秋
水客
浦野和子
狂虎
美幸
萬的
道子
太茂津
美幸
柳伸
太茂津
水客
萬的
郁榮
白兔
紫香
はつ絵
雀踊子

兼題「冗談」

金井文秋 選

冗談でもうすまされぬ弔辞書く
冗談でなければ本音言えぬ人
冗談がお上手ですとねと抜かれる
ご冗談ばかりと言いい眼が媚びる
冗談で外交ソフトの味をつけ
冗談と思っけていても腹が立ち

カズエ
三男
幸泉
幸一
どんたく
勝美

どんな底にいても冗談忘れな
離婚話を冗談にする共様さ
苦勞人冗談一つに味がある
冗談をビックリ箱に入れておく
冗談が素通りをする自動ドア
アドリアのジョークがうけてネタが増え
冗談の好きな男で敵がない
冗談も詠りがあると信じられ
冗談の時だけ廻る口を持ち
張りつめた空気を抜きにきた冗談
冗談のとびだす家の灯が温い
冗談の言えぬ男と添いとげる
冗談がカンにさわった別れ道
雪解けも間近冗談よくはすみ
冗談のように話はしはったが
冗談が解る女と飲んでる
冗談で美人と言われ拗ねている
冗談にしよう酒の席だから
罪のない冗談も良し旅の酒
軽いジョークにさえも傷つく五月病

度
節子
章久
惠美子
白兔
柳宏子
潮花
与呂志
失名
度
只士
潮花
失名
重人
凡九郎
惠美子
岳人
柳伸
浩一郎
たつお

故菊沢小松園氏のご遺族から
忌明け供養として
金一封を頂戴いたしました。
厚くお礼申し上げます。

川柳塔社

冗談を吹き矢にするは許されぬ
ジョークより皮肉の好きな上役で
冗談を言う益がよくもてる
冗談よなんてその気にさせといて
冗談を言えぬ男がくだをまき

はつ絵
みつ子
浩一郎
美代子
みつる

菊澤小松園さんを悼む

お浄土へ旅立つ今日の春衣
芽吹く春待たず菊の散り急ぎ
潮騒の遠くてわびしい雪の路
たくさんの会話残して逝き給い
小さくて大きなのち舞い終る
如月の雨に打たれて散り急ぎ
川柳の父が浪花に残す種
今にして申し訳ないことばかり
うしろ姿のひょうとして星になる
合掌をすると聞える師のことは
悲しみと想い出瀬戸の海曇る
空即是色 空を仰げば竹が鳴る
竹の子が竹になる日を見てほしい
雲哀し天女が待るとはいえど
時間切れまきわ にっこり小松園
温顔の消えぬ浄土や蓮の上
春風の句座に欠けたる寂しさよ
小松園はすの御句座盛り上る
もつ一度見てはしかった桜土手

栗
柳宏子
柳太
与呂志
岳幸
喜風
静水
蘭幸
菁居
一舟
鈍舟
比呂子
寿馬
天笑
維久子
静歩
洋々
正朗
芳子

泣き出され冗談だよと子をなだめ
落伍者にきつて冗談言えませうか
冗談を言うて持たすだまし舟
冗談の謎解けそれから気が減入り
冗談で逃げるゆとりは取つておく
冗談にしてはちよつぱりひつかかり
冗談にちらちらのぞく含み針
冗談で人を試しているらしい
どこまでが冗談句読点がない

兼題「小唄」

若柳潮花選

一日中話相手のない小唄
ブルジョアの気分に入る小唄会
付合ってみると小唄もいける人
金かけた割には巧くない小唄
カラオケに小唄もまじるバスの中
小唄から月謝泣かせの娘が帰り
青い眼の小唄日本の水に慣れ
遊びはったそうな小唄の粋な喉
夫婦して音痴小唄で馬が合い
肩書への拍手と小唄気付いてず
道楽に生きて小唄が残る父
格子から小唄がもれる京の路地
宴会でもてる小唄の二つ三つ
思いがけぬ男が踊った小唄振り
爪弾きの小唄を粋に聞かせてる
明治まだ小唄がさえるしふい喉
紅殻の格子に小唄がもれる京

頂留子
金太
眉水
千秀
美房
月子
泰子
狂虎
柳影
文秋
泰子
柳伸
勝晴
健司
柳右子
冬葉
たつお
浦野和子
太茂津
楓楽
只士
年代
文秋
柳宏子
冬葉
好一
楓楽

三味線も弾けて小唄の喉を持つ
爪弾きの妻の小唄で飲むビール
からかさのばかりで楽しい父の顔
小唄舞い地で行く過去を持つ師匠
お稽古の小唄が済んで膝枕
義理で聞く小唄補聴器外しとく
小唄振り舞うと白足袋生きてくる
かくしやくと呑めば小唄の出る父で
少し酔いがまわつてこぬと出ぬ小唄
襖越し聞える小唄についひかれ
近ごろは婦唱夫随という小唄
十八番小唄飛び出す酔心地
口ずさむ小唄に足はもつれない
江戸小唄障子は温い色になる
春の宵手形忘れてる小唄
幸せな小唄夫人の三味に合い
ハイヒール脱いで小唄の台檣古
ゴルフにもう厭いて小唄にこつて
小唄なら上座を少し意識する
格子から小唄がもれる石畳
不孝者だった小唄をきかすのど
筋はよいままの小唄で終りそう
三味線のいやいやついてくる小唄
張り饗で檜舞台の小唄振り

(清記・楓楽)

◇

《訂正》5月号24P上段、山下みつ子とある
は、山下みつるの誤り。同71P上段3行目の
句主は、みつると訂正。

笛生
あいき
規不風
頂留子
赤木和子
二二三
冬葉
金太
智美
勝美
美房
山久
武庫坊
水客
鬼遊
重人
千秀
智子
白兔
雀踊子
雀踊子
美房
度
潮花

老地柳増

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

にた川柳会

西村

早苗

これからの余生伴侶は影ばかり
別れ舟はかない音で櫓がきしむ
折りにふれ風が運んだ過去の傷
年寄をまだ力ませるパチンコ屋
泥臭さ抜けぬ女が雪に病む
久びさの弁当を無職持ち花見
道明寺菓子職人の手を染めて
あやとりの糸に心をのぞかれる
宮仕え秘書課で貰う三行半
威を借りてみたが所詮は意地がない
どの位置に居ても遺影の瞳追う
ちぎり絵に思いを焦しているおんな
うちの嫁どこから見ても甲の上
蛇口から聞える春のセレーナ
日日替わるネクタイ何時も洗好み
スパイクを外せば今宵凍りそう
信号は赤ひとときの余裕もつ
男手をそのうちもちろ猫ぐるま
地の底ですてに雷がもつ赤み

川柳ねやがわ

高田

博泉

おにの面のやくはなぜかお母さん
表面でぶりっこしても根はきつく
銀世界玄関のぞく飢え雀
良い職場持つ人多いラツシュ時
飲みこんでしまえばよかった今朝の愚痴
痛くとも豆は好きです鬼若い
バレンタインチョコ来る苦もない暮し
欲ばってみても器は知れている
荒れた手に面をつけたい気持です
見上げてる亀には亀の意地があり
パソコンが判らぬままに買わされる
空白の余生に描く小さい夢
ライバルの対角線に不安
雪の笠かぶって椿紅く燃え
遅ればせに咲く山茶花に肥しやる
大胆になれた仮面が外せない
主婦の面はずして女になるグラス
冷たくも春一番の前奏曲
用意した言葉も詰まり数珠を揉む
北風三日四温が雪とは心なし
定年が近し北風身に沁みる
戸を叩く北風おまえも独りぼち
表面に出ない幸せだつてある
北風に心開かぬ白い梅
北風へ見よ反骨の鷹は飛ぶ
肩書に似合うお面を用意する
北風が春の出番を狂わせる
子が育つ頃内職の腕が湧え
独りごと言うたら大に見上げられ
朝顔に宿る露にも花好み
北風にいのち晒して海苔を摘む

正彦 一鬼 柳歩 キミ 敏夫 勝美 藍子 まさお 一菁 幹子 君子 佳子 光子 春子 たず子 実 花世 一笑 あやめ かすみ シマ久 よしひろ 弘生 てまり 冬葉 一途 晴風 淳朗

玄関を開けると仮面ぬいでいる
左遷の地見上げる星が美しい
初恋と語るところで目がさめた
北風が一陣馬券だけが舞う
側面をつつかれ亀が歩き出す
反省を乗せて崩れた積木つむ
牙削ける北風離婚の傷を刺す
北風がやむと寝返り打つ蛙
生きるため時には見えぬ尾も振ろう
七人の敵に仮面をつけて出る
血圧をなだめすかして春を待つ
用意して姑を迎えるマイホーム
蜜蜂が舞うと花は咲く用意
握りめし程のしこりのまま別れ
宿敵が尻尾を振ってきた誤算
異常寒波へ鳴門の鯛を掬い獲り

川柳塔からつ

浜本

義美

川柳化粧檣

植村客遊子報

野生 静歩 亜也子 亜成 博泉 勝一 英王子 度 右近 重鈍 敬山 覺然坊 麗水 鼓城 小路 柳宏子 虹汀 正敏 四郎 竜 朴竜 久仁 愛郷 多々子 高明 素石 あき 多祢 ちよ 義美

数え唄亡母がうたつてくれた土間
 こんなにも計報が続く寒椿
 お人好し過ぎるとあわれかと思ひ
 白酒にほんのり酔うたひなまつり
 言いにくい事は手紙に書いて来る
 おしぼりの熱さに疲れふつ切れる
 紙幣数える僧は凡夫の貌となる
 手拍子で迎えて上も下も酔ひ
 母逝きて故郷遠きものとなり
 洋風に負けるものと奴風
 カラオケで又唄つてる細雪
 晩酌が減つて不安な妻の顔
 啓蟄というには寒い朝の冷え
 孫連れて手造り風を風に乗せ
 春の宵見事浮彫白鷺城
 御神籤が大吉素直に信じよう
 美しい雪にも側面牙がある
 桃活けてひなの節句が近くなる
 浮世絵に庶民の生活教えられ
 若い間の苦勞はせよと父古ひ
ハワイ川柳ウイロー社 市岡
 和氣あいあい郷土詠りで楽しそう
 宴会で数年振りの手を握り
 宴会の楽しさこわすからみ酒
 宴会で話は野暮だ唄いましょう
 宴会のアロハ気分が馬が合ひ
 宴会でお国詠りの花が咲き
 宴会も負担に思ふ八十路なり
 宴会は幹事の腕の見せどころ
 宴会で友情温め飲みかわし
 宴会つづき財布空となり

岳詩 大鷹 越山 秋月 実男 葉香 紅石 礎石 拍秋 哲子 松石 遊児 伊江坊 永楽 みね子 輝月 サワ子 みつ子 とし 客遊子 曉舟 張賀 万里歩 梨花女 公女 拝山 虹宵 秀山 高原子 蒼生 紅溪

送別宴酒と涙が入り乱れ
 宴会は殆んど同じ物を食べ
 来賓の代表にされる歳となり
 カレンダー今日も宴会吐息つく
川柳しんぐう 川上 漢水報
 初恋は童顔のまま隅で生き
 ライバルにこの初恋はゆずれない
 初恋の命をつなぐ年賀状
 少年のままで初恋住む脳裡
 水割りに浮く初恋は一つある
 赦す気の種火あつさり消して置き
 あつさりといふ無駄な物を買ひ
 あつさりを出直す零に在る強味
 あつさりと譲り花道飾つて
 昼カレー帰ればカレー匂うてる
 外食に慣れて淋しい爪楊枝
 口うるさい妻と向き合うレストラン
 たまさかの外食妻は良く笑う
 贅沢な外食したら胃が狂ひ
 サングラスかけて純白さがして
 サングラス肩張つて歩けば恐く見え
 初対面サングラスには緊張し
 サングラスはすせば青い空が見え
 サングラスはすせばかわい目が見え
菜の花句会 高杉 鬼遊報
 切った咲阿に奉賀帖のつけまわる
 向い風夫婦で廻す風車
 拝む手の隙間に欲がすべり込む
 負け犬の咲阿聞いてる昼の月
 まばたきの向う余白がうずき出す

三十四 香夢女 十吉 曉舟 登志代 白光子 武雄 富子 忠雄 すみれ 紫香 まさ子 登紀夫 輝子 里美 狂虎 英子 ふみ 喜醉 正華 水 八千代 十郎 漢水 蕉露 春蘭 美幸 度 白兎

拝むにも入場料の要るお寺
 そっちへ行くから向い風になる
 休日電池の切れた粗大ゴミ
 長い長い願いが母の背にある
 恋破れ心の電池いれ替える
 それだけ咲阿素面でなぜ切らん
 かけ込み寺男が先に来て拝む
 向い合う視線をらしたコンパクト
 夕めしを覗くつもりた失語症
 三月は神も仏も拝みます
 三丁下は咲阿も切れず覚えとれ
 どん底で拝む心に嘘はない
 向い風めつたに負けぬ父の貨車
 切り札をしつかり握っている咲阿
 飯を食う時は味方の顔をずる
 拝み倒されて憎まれ役を買う
 ぼっくり寺まだまだ往かん気が拝み
 郷愁の向うへ続く貨車の列
 電池外し二人の時間止めておく
わかあゆ川柳会 小砂
 老いたれば忘れ忘れ金のこと
 憧れの女もわたしも年をとり
 おだてられ四角四面の客となり
 客の身にならな店へ客が来ぬ
 医者通いもとをただせばおよび腰
 白い息エイの煮こごり箸で切る
 客減らずローカル線がまた値上げ
 来客の行きと帰りの顔があり
 客として来た娘へ父の眼が濡れる
 さわやかなものを残して帰る客
 コート脱ぐ客の裾から春匂う

喜風 凡九郎 射月芳 雀踊子 シマ子 頂留子 弥生 覺然坊 栗 糸葉 眉水 勝美 悦郎 幸生 信治 恒明 章 英一 律子 白汀報 朝子 敏明 英子 秀穂 ヒデ子 三和 世似 輝水 美栄 歳栄 民子

賛成の拍手しておくおよび腰波に手を伸ばして松はおよび腰ブランドが客に麻酔をかけたかな切り札がおよび腰では絵にならぬ

倉吉川柳会

渡辺

締切りに追われ漫画家雑誌に一年を締切る紅白歌合戦花まつり散ったあの子も桜花四肢動くだけで嬉しいうちの育ち一日は善男善女の花まつり煩惱をまだもって行く花まつり命の締切りを知らずに好き勝手祖母の手に育って遺児のかけもなし花まつり三人の子が九人来る保父もいて活気みなぎる保育園四組も双子が揃う保育園天地指す仏の自尊甘茶浴び初恋が保育園とは恐れ入りべ切りとあるのは表門のこと一行がまとまらず締切りに泣く花まつりレンゲ畑が遠くなる未知数の保育に夢が多すぎる花まつり極楽鳥が酔っている保育園にボス生れてる砂遊び中年の坂へ保育の塔が揺れ非行の芽摘んでおきたい保育園母子二代保育先生まだ元気保育園一人が泣けばみんな泣き締切りの三秒前の稲光り児が去んで保育日誌にVと書く保母さんは千手観音かも知れぬ

昔句報

清江 鈴江 白汀 たるみ 律子 秋草 菊枝 千佐子 松女 しづ江 笑王 寿朗 紫泉 かつみ 車楽 千秋 柳風 柳子 荒介 みなと 観洋 天雀 雄々 蟬々 御前 石花菜 秋女 独歩

先生が好き保育園休まない
どんな辞世句で締切って果てるやら
京都塔の会
松川 杜的報

みな美人観光ボスターに汗がない
勤勉に窓開けてなく鳩時計
父の忌よあの日のように雪が降る
車庫入りの電車寒さが満員で
ストーブのお湯がたぎってティタイム
年頃か集りよくなるクラス会
湯元まで宿屋の傘で歩かされ
知らぬ間に母の仕草を真似ている
反省の夜の時計が寝ろという
手のひらに乗せた蛙にする対話
溪谷の鶯ハイクを喜ばせ
猫ハの聲に驚だまされる
笹鳴きへ座禪の足を組みかえる
好きな道傘寿の芸に燃えるもの
寿が部屋いっぱい結納日
寿の字も踊ってる記名帳
寿へ夜通しになる過疎の酒
石段を踏んで春さく京の旅
せせらぎでやまめの恋をさぞう石
石仏の鼻かけたまま春巡る
背信の背中に当る石礫
借景へ憎つくい程の石の位置
急流へ向う石が陽に光る
一石を投げた波紋に悔いはない
翠洋会
中西兼治郎報

民子 苦句 和友 春江 武庫坊 美穂 孝江 潮花 芳子 弘生 紫香 冬子 花代子 水客 千世子 飛鳥 白溪子 笛穂 落穂 紅代 明陽 杜的 求芽 年代 楓 兼治郎 いつを

老いらくの恋をしたよな四月馬鹿
四月馬鹿だまされやすい人が好き
四月馬鹿父は拳骨上げたまま
結ぶ夢ほどける夢の四月馬鹿
火花散る会議終了さわやかに
四月馬鹿結婚式を厳粛に
若武者の風情思わす花吹雪
修道尼をその気にさせた四月馬鹿

川柳さやま

河原みのる報

外食に飽いて恋しい母の味
飽きもせず夢二見ている老いの部屋
飽きが来て妙に重たい植木鉢
飽きたらぬ言葉がほしい老いの欲
狙いうちしたい意中のひとが居る

佳句地10選

(前月号から) 松岡三吉選

若者の五月とおなじ筈がない
同病がきつかけとなるおつき合い
指ぬきをいつもしている母の指
もう許す気でつぐ朝のおみおつけ
職人の無口で腕の確かなる
逃げるのにいつも庭に来る雀
生きていく決心くれた子の寝顔
口下手の父は丈夫な足をもつ
ポケットに無理に押し込む思いやり
他人のめし食うて実力たくわえる
天笑

狙いうち矢尻磨いている嫉妬
狙つてたよい娘とんびにさらわれる
蛇の眼で狙われ不動の金縛り
一歩身を引ける女にある魅力
一歩ずつ来た坂道は振向かぬ
一歩ずつ亡母に似て来るこのわたし
一歩と企みを持つ蛙の瞳
在りし日の姑に習った忍一字
嘘一つまぜた手本が活きつつき
青春の手本はみ出すためにある
よいカモを狙う女の目が笑う

川柳藤井寺

赤木

和子報

春一番孤児の怒りの黄砂降る
ふれ太鼓浪花の街に春を呼ぶ
再会の涙は遠く持ち帰る
憶い出は亡母につながる星一つ
これからは付録定年生きがたし
元首相罪も罰もない顔で出る
流行と噂は風に遅れない
子の画布の白さを穢す親のエゴ
彼岸会に亡き人好みに装いて
帰る子に軒端の雪を残しおく
白と黒議員の時は何故ほける
松明の火の粉が春の笛を吹く
お上手を真に受け株屋のエサとなる
性格を箒の減りに覗かれる
同権の日本男子が鍋洗つ
明と暗中国孤児の帰る影
改札でカナ字読む児を急ぎ立て
ギリギリのところで耐えてる孤児の顔
裏書の白筆を信じて騙される

百合子 千代子 素水 貞子 畑美智子 やよい テル 法斎 靖子 文平 可住 一香 清心 末心 つや 美房 秀之助 治子 吸江 律子 うめ 俊男 美代子 一屯 喜代志 本蔭棒 秋園 繁男 美佐 与呂志

あれこれとながいの女の旅仕度
米作り機械があらまし米を喰う
主人留守やけに大きいチクタク時計
雪嵐黒い鳥が尚黒い
山ほどに薬もらって医者を出る
紙ひいな孫の残すを枕辺に
温かく孤児を迎える富士を雪
白を着て白の潔さに負けている
川柳たけはら
森井 蒼居報
きんいろをはつてはるみのおひなさま 保育所はるみ
きくぐみよりじょうずにできたおひなさま 保育所あきみ
日ようびだけは早く目がさめる 小三純平
かぜ気味でスキーが出来ずに残念よ 小四亜貴子
体温計熱が下がってほつとする 小六恵子
春のゆめ広い草原走るばく 小六昭
希望不安中学僕をせめてくる 小六仁昭
桃の節句に生まれたかった女の子 中二紀
テレビ見る余裕を母が不安がり 高二愛
通信簿あがっていたらいいのにな 小四美保
ソフト部のレギュラー私のターゲット 小六千恵子
バカなことやっては母にしかられる 小五早代
棟板の字にご先祖の脈が打つ 小五早代
手さぐりへほのかに見えて来た明かり 小五早代
たっぷり時間をかけて許すべし 小五早代
一日の短かさフツと恐くなる 小五早代
保育園児よ胸を張っていき胸を 小五早代
歳月が心の向きをかえてくれ 小五早代
日めくりの一枚ごとに水温む 小五早代
三猿の知恵も少うし借りて生き 小五早代
ひとときも一緒にいたい助手席よ 小五早代
降りしきる雪鮮やかな寒椿 小五早代

麻男 君枝 伴子 義一 正人 雅美 かな女 和子 浄美

筆塚に人の誠を教えられ
かげろうにリズムも溶ける春の海
切り返す言葉を探すマッチ箱
だまされてだましてみんな仏さま
熟年と呼ばれる熱したものが
お向いの犬を啼かせた人が来る
刈られ抜かれ焼かれ雑草なお生きる
半分は逃げ腰である口答え
いずも川柳会
板垣 草丘報
手が運ぶ俵せだから手で受ける
順調に運んで司会マイク置く
春運ぶ梅一輪に花しかけ
体罰の可否果てしなしPTA
よめめきは罪はあつても罰がない
とんでもない処へ飛んだ矢の力み
部下手も所詮課長の汗となる
もつ力むことも出来ない棺の釘
早春に五人囃の荷が届く
自信作一と息入れた茶がうまい
残雪の中に息づく春の草
早春の雪すつぱりと出雲富士
賞罰もないまま男芽が出ない
時効なら語って見た罪と罰
力まねば飛ばされそうなの不況風
父と子の力む土俵に明日があり
深追いをすると大きな罪が待つ
宅配で運ぶ荷物は母の味
賞罰はなしと履歴書を置く
どんぐりの子の卒業でほつとする
母になる力みに耐える玉の汗

鈍舟 美佐雄 笑子 のばら 貞子 シゲオ 不動 佐吉 孝太郎 しま子 智恵子 清一 幸一 早苗 よし子 秋峰 美佐子 美磯 悦朗 房子 寿恵 ちかし 夢酔 禎江 正三郎 多賀子 草丘 九二老

身から出た錆だ文句のない裁き
王手飛車かけて一と息冷えたお茶
天罰を恐れず二十二万取る
早春に一つ貰ったバレンチヨコ

もう一と息押してくれたらなびくの
に
幸せを運ぶ車は急がせず
罪と罰傍聴席は息を呑む

足繁く運ぶと鬼も笑い出す
罰みんな受ける覚悟の母の背
路の臺探す手に来る春の色

一と息の足らぬ挫折を師が叱る
罪と罰水地藏の供物

川柳わかやま 堀端 三男報

生きている理由を街角で拾う
行く末を考えている山の樹々
アンテナを捨てて真直ぐ見つめよう

よろこびの夫婦茶碗にある決意
いまからの喜劇へホケぬスケジュール
満ちたりた日の喜びのしまい風呂

漕ぎつけた喜びの日のほろにがさ
よろこびへ脇役だけの妻がいる
よろこびを配り歩いた良い疲れ

積み切れぬ喜びを乗せ船出する
喜びの涙は拭うのを忘れ
よろこぶと泣き虫になる母の歳

理由など要らん俺について来い
言える日もあるさ黙って理由伏せ
秒針が遅れる理由は許されぬ

男同士の理由に髭がついている
理由など無いから積木くずされず
もつともと思う理由に逢いたいネ

軒太楼
多津老

元之介
壮樹

宗光
芳枝

昭二
文子

桜水
代仕男

緑之助
道夫

英子
狂虎

幸太
紀美女

和子
信秋

正子
寿子

白光子
雀踊子

きみ
光代

緑良
武庫坊
千寿子
凡九郎

女にはちゃんと理由のある涙
欠勤届に悪友死んだと書いてある
しがみつく崖の老樹に意地を見た
自己嫌悪大樹に巣くう寄生虫

千年杉まっすぐ生きて来た誇り
方言がとつても好きな鎮守の樹
過疎進む村を見つめている大樹

ふるりの民話を産んだ大樹の根
記念樹へ二人の鎖が光つて
頼られる樹になるまでの幾星霜

樹齢千年宮の神祕が保たれる
植樹する老いの命も氣にとめず
街路樹の傷は訣れたときのまま

ほんとうの理由は書いてない辞表
納得をさせる理由は外にある
東大阪川柳同好会 斎藤三十四報

登山家のジnkクス山を疑わず
易の灯が迷うジnkクス崩りたて
ジnkクスを破るお願い百度踏み

ジnkクスの墓地を襲う寒鴉
ジnkクスの片棒神様担いで
ジnkクスを作り直して二十勝

ジnkクスを抜けだす言葉子ぐれる
茶柱へ今日のジnkクス信じよう
最後にはジnkクス通り妻に負け

ジnkクスに立ちほだかてみる若さ
縫い物で育てあげた子に坂かれる
縫うよりは買えばと妻の合理主義

孫の目を借りてお守袋縫う
縫うひとがこんなに多い針供養
縫い直す形見の着物に匂う母

紀久子
太茂津

克子
勇太

武雄
登志代

萬的
信代

稚子
公子

照子
誠一

年代
桂香

三男
柳伸

喜風
良京

慶三
千代子

光水
滋啓

三十四
みつ子

好一
弘生

座りだこ縫い目に古き女です
縫ったこともない針箱ももって嫁き
その言葉君の心に縫いこめと
雑巾をとつてもやさしい顔で縫う

嫁の針縫い目が粗いとたしなめる
川柳塔まつえ 恒松 町紅報

再開の友はキレイな女といった
再開の街でつむいだ過去の糸
再開へ多彩な風に身を委す

再開へ気兼ねをもたぬ出雲弁
再開の夢をくずした母の国
再会でこわれた玉手箱をみる

マンションの壁は人情冷えて
病院の壁は悲しみ吸いつくし
壁掛けの裸婦を見飽きぬ独り者

壁のない人生ならきつと阿呆になる
囲まれた壁で人情うすくなる
壁に突き当たると人間に戻ります

壁なくて自由に行けるとなりぐみ
肩書きが招かれすわる披露宴
母ひとり招けば父を連れてくる

金封を当てにされてる招待状
ライバルを招く手練の試し業
繁昌の店に古びた招き猫

招かぬ客が正座に座り込み
気のおけぬ人を招いて春炬燵
医者の嘘に安心して酔っている

二分咲結構酔っている芝生
弱虫もせつばつまれば囁む手持ち
弱虫の熱気球は低く飛ぶ

雀踊子
柳宏子

凡九郎
湖風

眉水
愚童

雄江
芳子

昭二
文子

与根一
巡歩

早苗
きみえ

由郎
孤呂二

春梢
ちかし

素蛙
留

代仕男
正朗

多賀子
嘉寿子

鶴丸
通児
芳枝
壯樹

弱虫で自動ドアに躊躇する

富柳会

藤田

泰子報

叮紅

用件は無心末尾にそつと書き
言訳がありすぎ無心にはなれず
神様に手を合す時無心

つつがなく無心できざむ千六本
湖に捨てると沈む知恵袋

無心にはなれぬ私の罪の数
鍵束を渡す未来を信じ切る

知恵袋出しても解けぬ謎がある
消しゴムを持つその中の知恵袋

あの人が鍵にぎつてるといふ噂
幼な児が無心に引いた特等賞

鍵かけて胸開かせた愛がある
鍵かけて破れた夢のつづきみる

自閉児の心を聞く鍵はどれ
ライバルの知恵袋から弾丸が飛ぶ

みちづれの人からもう知恵袋
知恵袋と言われた母もはげかけん

眠る孫無心の顔がゆるんでる
窓際に馴れて無心の社の人事

どん底に落ちて無心となる私
合鍵に信頼という銘がある

出さないと判りつつ無心言うてみる
百万の味方は母の知恵袋

引出しの鍵は秘密をしやべらない
いくさが終るといっばいになる知恵袋

ハネムーン鍵穴までも紙を貼り
サークル檸檬

田形

美緒報

美津枝

魅力ある男女難もありそうな
広重の絵で見る松の五月山

恵太郎
与呂志
千代

岳人
泰子
美緒

美佐子
冬二
富美子
千代女
富久一
森子

金太
花梢
きぬ
章久
優久
山久
弘生
幸一
美津子
文次
狂虎
正信

逸

誠実で人の良いのに魅せられた
過ぎし日の魅力のえくぼ皺となり
まだかたい花へ今度を約束し
赤札の魅力に負けて悔いを買う
まごころと魅力いっぱい妻の顔
愛嬌が魅力で心ひかれてる
満開に一人はさびし山の寺
さからって生きる男に魅力あり
花の山視界は三六〇度

登志実
よし子
さと美
恵美子
千代
千代女
慶子
恵

美房
泰子
美緒
森子
藻介
薰風

はじ芽
晴子
紫香
定人
年代
美代子
礼子
佳秋
歌子
君子
春子
よしを
牧郎
かすみ
玉子
美智子

七人の敵より恐いねねと寝る
嘘発見機針が盛んに動きます
これ以上嘘になるから笑つとく
病室の花が祈りの灯をともし
義理一つ済ませて旨いめしを食う
さりげなく話す夫に嘘がある
機械化で農夫の手から胼胝が消え
恋吹雪燃えて散ります夜の街
子等にしたらおとき話を孫にする
枯菊を焚いたそがれに鐘の音
七人の敵居酒屋で気を許し
多情仏心遊び球とは知りながら
仏花庭に育てて身よりのない女
鐘の音悲喜こもごもの茜空
返す気が全然ないのが借りに来る

岸和田川柳会

植山

武助報

小一あつし
小四ようこ
世界人
ゆづる
浪速子
狸村
佳生
礼子
ひで
さよ子
幸代
武助
白光子
富志子
射月芳

伊三郎
すえ
弘生
かず子
郁栄
かね子
良征
保蔵
一郎
墮駄
水声
伊升
伸江
静江
幸子

おとうさんすきなあそびがおおき
おしれのあふさいでるカレンダー
サラ金も便利不倫に金がある
告白をしてから鳴咽堰崩れ
初恋を打明けたら同窓会
さよならを言わす小鳥が消えた朝
忠告を車窓に受けて発つ列車
れんきよの一枝に亡き友の顔
生きてゆく焦点にいる好きな人
忠告を素直にきいて今日の地位
忠告をした俺だけが左遷され
春暖へ向けて内職急ピッチ
陽だまりへ久方振りの祖父の椅子
ねぎらいの言葉に疲れがとけてゆく
巣立つ子を送る四月の風の中

伊三郎
すえ
弘生
かず子
郁栄
かね子
良征
保蔵
一郎
墮駄
水声
伊升
伸江
静江
幸子

カラオケへ飛入りが来る花の下
春の机あの娘この娘の花を盛る

三幸川柳教室

桜井

橋なくて近くて遠い向う岸

觀光バス二重橋から廻り出し

両陛下でてこれれそな二重橋

先ず兄が渡つて見せる吊り橋を

この橋を渡りきるまで伏せておく

三代がこの地で生きたる渡り初め

すがる手を欲しいと思ふ丸木橋

大自然バックに鉄橋錆びたまま

蹴つて立つ畳はなんにも知らんのに

寝たばこを落とされ畳のご災難

青畳敷けば今夜の灯が冴える

一畳へ手足存分のばして見

これだけは言えぬ畳へ目をおそす

冷えきつた畳に帰る午前二時

滑走路今夜は畳の上で寝る

梅咲いて猫戯れる青い空

猫いらす飲むわと浮気に釘をさす

疑いを晴らさぬ内に暮が降り

疑われ腹割つても見せたい気

尾浜川柳会

上田

美しいから虫は刺されてる

舟虫が月夜の波を聞いている

貸す本にあんだ好きよと書いておく

茶羊かん味かみしめる齡となり

仲人の手帖に離婚は入れてない

金儲け後へ引けぬ軍鶏の意地

遍歴の女の背なうしろ指

追い越した後の女気にかかり

甘平 操子

千秀報

幸子

静

みね

千香子

敏子

千秀

文子

ふく代

つゆ子

千枝子

久美

志津子

愛子

桂香

智水庵

当代

靖子

孝子

重次

佳秋報

清太

牧郎

光重

勝美

定人

夢之助

良征

よしつぐ

まっすぐに歩く夫についてゆく
旅立ちの息子うしろを振り向かず

後釜でおやじの余生解いてやり

始発駅女うしろを切り捨てる

後から同じ歩幅で来る怖さ

この町で名刺のいらぬ顔になり

定年で名刺の肩書顧問だけ

名刺でときとまれば田くなり

ひとときを差出す花名刺

切札を妻が差出す花名刺

馬券買う阿呆の列の中にいる

五右衛門の詠んだ一首がうなずかれ

知恵貴い後見すわたる渡月橋

風邪を引き只の男になっている

石仏に探してあてたる父の顔

ハイミスが探してくれと少し酔い

南大阪川柳会

友達がほしいと思う天の邪鬼

横槍を一度は入れる天の邪鬼

天の邪鬼そんな自分を見る思い

天の邪鬼手の鳴る方にあきたらず

天の邪鬼に反対ばかり言っておく

逆らつてうやうや晴らす天の邪鬼

かごめのかごめひとりぬけてる天の邪鬼

採決へそっぽ向いてる天の邪鬼

新兵器威力を試してみたくなる

娘にすれば金の威力が気に入らず

ボス猿の威力で保っている平和

底知れぬ威力を秘めて妻無言

ヒジテツの威力に負けてばかりいる

子の威力別れ話に釘を打つ

江美 昌子

保

歌子

紫香

武庫坊

新吉

貞吉

寅之助

すみ

佳秋

貞男

いわを

礼子

よしお

弘治

滋雀報

智子

文秋

芙佐女

重人

智慧子

勝美

寿美

山久

柳宏子

久子

秋子

真砂

美幸

善信

臥せいても親父の威力はまだ失せぬ
ドンと来いと言えぬ威力の無い日本

威力出るようにチップのタイミング

威力ある兵器備えて平和論

票になる陳情うやむやにはしない

うやむやに出来ず身銭を切っている

うやむやになった時かれ不眠症

うやむやに出来ぬひとこ胃にたまり

うやむやに出来ぬひとこ胃にたまり

正直なところうやむやをほつとする

うやむやにさせぬさいそくばかりする

うやむやが嫌い直線ばかり引く

うやむやの付け歳月をおいて来る

園芸家花のことは聞きわける

手折られた花の痛みがわかる人

物干の足場が狭い植木鉢

寄せ植えの花壇に春の芽が唄う

園芸家の鉄無情な音で鳴り

園芸の腕競い合う貸し農園

押し引くコツを覚えて橋渡る

押し切った意地がむなしちぎれ雲

一徹を押して妥協を知った老い

押し足らぬ恋が野菊の花にする

押し強いだけが取柄という男

念押しして居たにと夫詰められる

奥の手は押しの一手で行くつもり

春うらら俄か園芸でつみる

饅頭がまだやわらかい指のあと

川柳高知

薬ぶきが歴史を語る文化財

定年のない商人のひくい腰

凡子 章久

雅風

庸佑

信治

浩一郎

頂留子

凡九郎

冬葉

恒明

柳伸

千代三

弘生

度

千里

公一

春蘭

静香

喜美子

楓楽

悦郎

喜風

慶三

好一

覚然坊

節子

蘭

滋雀

松風報

幸泉

竹萌

車窓から全山雪の富士低し
初恋の人の笑いが胸に棲み

明治生れがうなすいて見るおしん

遠方の神様何故か有難し

肩書を捨てた余生を趣味に生き

幸せな余生夫婦でたしかめる

趣味一つ母の余生に友が増え

夕風のような余生で終りたし

幸せは孫も曾孫もいる余生

美容室女自信をつけて出る

鏡との対話楽しい日の女

女には出せぬ色気の夢芝居

悪女にはなれず淑女に尚なれず

水子像女は罪を一つ抱き

川柳化粧槽

露天風呂湯気が美人にしてしまふ

関東煮の鍋へ舞い込む花吹雪

老醜は子には見せまじひげを剃る

誘つたら左右にゆれるイヤリング

これ以上話せば嘘がばれてくる

ピエロにも田舎の山や川がある

善も悪も都会は闇に消してゆく

都会が好きでお嫁に來たと云う

酔いさめの水で移り香消しておく

振り出しに戻れば鬼はついて來ず

税金を背負うて並ぶ酒のびん

大会旗明日の天気が気にかかる

帽子買った鏡の顔に春うらら

嫁の留守息子も老人食となり

本音かと疑いだして胸疼く

合格の列に飛び込む赤電話

植村客遊子報

青果 春枝 登舟 弘生 菊野 岩男 広風 節鳥 千鳥 佳風 康子 草風 朱坊 松風 岳詩 紅葉 葉香 大鷹 実男 礎石 悲子 拍秋 秋信 越山 哲山 石松 松子 是つ子 輝月 みね子

古稀くれば暇で困るは大誤算
土筆が顔揃えてるバス停めてんか
梅の香を求めて山を登りつめ
結ばれて静かに燃えている絆

川柳後集

井上柳五郎報

散る花は大地に還る安らぎよ
奥さんの欠伸早目に散った宴
散り散りになつて親子の血が騒ぎ
散る青春を持たぬ世代でうつろな眼
国鉄の赤字斜面を雪ダルマ
初歩き斜め斜めに足が向く
芝生焼く斜めへ走る火にあわて
急斜面これも運命と農に生き
通り雨斜めに道を横切らせ
父の釘いつも斜めに打ち込まれ
老妻の斜めうしろにいつもいる
地震慣れたババコゆっくり喫い終える
一人娘嫁がす父の心揺れ
女心揺れる日花瓶の水乾く
プランコが素直に揺れる青い空
ライバルにそつと引金あててみる
定年へ引金のないぬるい酒
引金を母の涙が引かせない
愛と憎引き金の指動かない
引金へ拝む所作する猿に負け
幸せな夫婦引金錆びてくる
引金を向ければ心の顔が見え

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

運勢の凶は努力で吉にする
運勢が掴んだ薬太くする
運勢を背負うてゆつくりカタツムリ

永楽 みつ子 とし 客遊子 照路 宏大 桃風 青銅 幸好 柳五郎 紫峰 博友 健一 弘隆 敏昭 胡風 恒洋 玉水 鮫虎狼 番茶 秋加恵 哲郎 哲郎 哲郎 松女 俊子 定子

逆境の運勢神と巡り会い
仲人の熱意捻った華燭の典
激流に吞まれた運を這い上る
運勢へ喪服の女も泣かず
能面の中の運勢見抜けない

運勢の説めぬところに味があり
ささやかな運勢だけの靴を履く
恵まれぬわが運勢を子に賭ける
手相読む暗い灯りの低い声
お金には遠い運勢無事生きる
寡婦となる運勢神の試練かも
あまた中夫婦にきまるめぐり会い
運勢は一人で回す車椅子
年男得手に帆を揚げ運握る
上昇運周りの景色目に入らず
献身の汗に幸運向いて来る
西宮北口川柳会
うっかりも可愛嬌になる春うらら
うっかりうっかり人生楽しいものですな
うっかりと結婚したとは言えず
お人好しうっかり本音さけ出し
うっかりと寝しなの薬二回飲み
着替える窓をうっかり閉め忘れ
うっかりと乗り越した距離歩かされ
花の香に言葉のいらぬ二人です
木の香まだ残る新居へ辞令くる
新しい豊若葉の香りして
よい香り点字の部屋に置いてくれ
磯の香のぬるむ日射しに春拾う
湯の花の香りに浸る湯治宿
香たいて女の城を守り切る

妹尾

春江報

梅朗 弘生 ゆり子 規仔 紫映 文心 一子 亮二 柳風 繁代 喜美子 高代 越舟 吉朗 道朗 弘朗 勝紀 凡九郎 てる 千世子 花村 笑女 定人 奈々 君子 東洋男 冬子 紀雄 好江 正一

寒い日の心配りへレモン風呂
たくましい男に潮の香が消えぬ
病む友へ淡い香りの花を買つ
紫の袴に秘めた恋がある
紫の袈裟から覗く浮世の絵
人生の無常紫煙をじつと見る
雑草へ紫ひっそり咲いている
片想い紫色が忘れず
紫水晶ある日虜になる女
紫の稜線冬の旅終る
紫陽花の好きな絵かきの恋にぬれ
紫を好む女は冷え症で
春よりは紫紺の旗に酔う野球
紫が好きで無口な妻でよし
紫蘇あかく母の想いが掌を染める
紫は日暮れる色よ雀の巢
勉強部屋あたたけて頭悪くなり
妹の越えたいとこに姉がいる
春休みどたんばたと二週間
極楽へ旅立つ母の鈴の音
芸術の境で裸婦が騒がせる
ひげのある人に物訊く面白さ
労基署は動きもみんな風になる
昨日の風追えば足元崩れ出す
電車着く羅漢の顔が皆変わる
市松さんが二つ未婚の娘が二人
宅急便で着替えばかりが帰ってき
火になるなさとて消える煙は嫌
焼酎の好きな社長で近くいる
点滴に病窓の雲動いてる
さびしさは顔に出さない山ざくら

恵美子 郁栄 かすみ 葭水 婦美子 一 郎 いわゑ 照子 紫香 春江 墮駄 眉水 清太 光代 はつ絵 伊升 美津枝 年代 キミ ズ女 歌子 春子 はつ絵 みつ子 武庫坊 弘生 まさお 伊三郎 舟二 半歩 礼子

定年かそうかと味の無い返事
角一つ曲つて一つの知恵がつく
妻逝きて三年米研ぐことに馴れ
受売りをしてから辞書が水くさい
少年の見つけた化石にある重み
許されてゆつくり眠る愛の壺
本心を書けば喜劇になりそうで
夫婦茶碗妻の茶碗の強いこと
梅の香に言葉少なく歩いてる
むらさきを秘めて四月の花菖蒲
城北川柳会 野呂
病む妻に嵯峨の若葉が美しい
蟻の列じつと見て居る閑な人
木の芽あえ明治の母の味を褒め
珍らしや浪花の街に雪が降り
列島異変低温春を斥ける
退社ベル聞いて心が弾み出し
はしゃぐ子を叱って夫婦仲直り
逢いに行く胸の弾みを押えかね
郵便受雪崩の中に消えて居た
人生の弾みはいつも涙です
ハネムーン心が弾む孫娘
奥の院法衣の列が続く朝
延海の杖の跡追う遍路道
延着の列車の雪に春はまだ
浮子ひとつ動かず春の日はうらら
お礼所も列が出来てる菜種時
山の端の月は斜めに転げそう
天狗よりウルトラマンの腕が好き
胎動へ指から弾む毛糸玉
停年へ雑音までも遠ざかる

保蔵 園歩 水声 幽香 文子 幸 春蘭 静子 寿馬 新一郎 炉子 千世子 秀月 達子 山久 圭介 ふみ すみれ 重彦 晴子 静子 ただし 麻黄 星斗 達一郎 テルミ 節子 婦美子 悟郎

いつの世も不満はつきぬデモの列
縄張りをつくぐる年寄り知らん顔
寡婦の足したたか信仰持つて居る
PLの文字は涙か春の雨
五十路来て此れから僕の出番です
宝くじもしかしたらの列に居る
御地蔵さん新築待ちの仮住居
袖通す着物に色香まだ残り
愛犬に服を着せるエゴイズム
弾まなくなった手毬のひとりごと
血書付きで鎖につながれる
忘れたい時は静かに茶筌くる
顔一つ一つに書いた遺言状
したたかに生きる女の太い首
わからぬ鍵を持つてて老いこめず
うみなり川柳会 森田
幾度か転んで起きた人生譜
霞喰う仙人物価気にならず
寒くても亡母をしのんで朝起きる
一寝入りしてから妻のする写経
明日へ積む愛へ裸足でいる二人
親切が素直にとれぬ日の孤独
霞む目をいたわり老いの虹を描く
若夫婦姑の早起きもてあまし
よじ登る孫の裸足がたくましい
病夫起きて窓辺の桜見てたつけ
焦点がかすみ矢尻が錆びて来る
霧はれてはつきり明日が見えてくる
時差はけで起きてコーヒー濃ゆくする
弁解の汗に疑惑が霞んでる

道子 茂樹 利義 午郎 茂一郎 満津子 正之 泰世 好恵 倫子 静子 右近 公一 登志代 弘生 雅女 希満子 とみ枝 芳泉 草人 富美湖 舟宏 正 華子 とし江 静生 葉士人 豊生 熊生

● 募 集 ●

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選	水煙抄 (10句) 黒川 紫選	愛染帖 (3句) 橘高 薫風選	課題吟 (各題5句以内)	「良心」 西森 花村選	「瓶(壺)」 林 瑞枝選	「年輪」 小西 雄々選
-----------------	-----------------	-----------------	--------------	-------------	--------------	-------------

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選	水煙抄 (10句) 黒川 紫選	愛染帖 (3句) 橘高 薫風選	課題吟 (各題5句以内)	「迷う」 野呂 鶴汀選	「溝」 浦野 和子選	「得意」 舟木 与根一選
-----------------	-----------------	-----------------	--------------	-------------	------------	--------------

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

6月の常任理事会は1日(金)

定価 五百円 (送料50円)
 半年分 三千二百円 (送料共)
 一年分 六千三百円 (送料共)
 昭和五十九年五月二十五日印刷
 昭和五十九年六月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎
 印刷所 藤原 童心社
 〒545 大阪市阿倍野区三木町二丁目一六
 ウエムラ第2ビル202号室
 発行所 川柳塔社
 電話 (六六九) 一六九一四番
 振替口座大阪 813336八番

遠山可住句集 本社6月句会
 「ふろんぼ」出版記念

会席費 一題 当日発表 千五百円 (句集呈)	兼題 「おはなし」 「遠い」 「道」 「踊り」 「城」 「とろろ(芋)」	日時 六月七日(木) 午後六時 会場 なにわ会館 天王寺区石ヶ辻町19番 地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南 電話 06・772・1441番
---------------------------	--	---

黒川 遠山 北山 辻西 西尾
 紫可越文 幸栗
 香住山平選
 選選選選選
 各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

7月の兼題 「封筒」「うっとり」「枝」「民」

7月の本社句会は7日(土)

暑中広告受付!

★一口五百円 (タテ3.3×ヨコ2.5cm大)
 本誌5段組の一段 (柳界展望の一段)
 分が二千五百円です。

★原稿締切 6月25日

申込みは

〒581 八尾市中田二丁目三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室へ

編集後記

☆今年の寒さは日本がすっかり冷蔵庫に収まった感じとして梅と桃と桜が一時に咲いたような春、春の終りに雷雨があつてまるで梅雨明けのよう。昔なら神仏に祈禱をしたであらう程に地球のネジが弛んでしまつて

いる。

☆五月半ばから事務所に新らししく池田寿美子さんという助っ人を迎えた。月曜日から金曜日まで午前十時から午後四時まで詰めて貰うので雑務がはかどることだ。美人がいると事務所への訪問者も増えることだろう。せいぜいお越し下さい。

☆阿達義雄博士（元新潟大学教授）が定年退職されたことから、再び本誌に執筆して下さいになった。博士のような古川柳の権威者の連載を得たことは望外の喜びだが、それも路郎先生からの実績のお蔭である。先年、中島生々庵主幹と柳都の大会に出席、新津でお会いした時のことを思

い出す。

☆東野大八さんの川柳群像と双璧をなし、読物が充実して有難い。編集者として伏龍鳳雛を得た思いだ。☆うれしき余つて、執筆者を見下げた言い方になってごめんなさい。

☆遠山可住さんの「ふろんば」大矢十郎さんの「みかん船」と句集が相次いで出るが、川柳界もまさに句集ブームだ。

☆時実新子著「時実新子一萬句集」が出た。個人句集での一萬句収録は画期的であらう。また、故大谷弘平著の「泉の詩」も、ふあうすとの根元紋太の味を髣髴とさせる好著である。

☆八ヶ月の孫の亮匡（あきまさ）は、まだ立てもしない二月も前から、リュックを背負つてやってくる。リュックにはウエハースや襪が入つていて。風薫る五月、長男の初節句の二十年前を思い感無量であった。☆還暦記念句集は、四百五十名の協力を得て、目下整理をすませ印刷所へ回わ

したので、路郎忌までにはお届け出来る予定である。深謝申し上げる。（薫）

▼入院中のある日、アイソトープ検査のため他の病院まで救急車に乗せてもらった。初めての経験なので興味が続く。運転手は特殊な人だとばかり思っていたので、医局の若い職員なのが意外だった。「普通の方です」ね「そうですね」

「そうですね」

▼三月二十日は春分の日である。病室には朝から見舞客が訪れる。同室には年輩者が多いため、息子夫婦や孫までがベッドを取開んで賑やかだ。すこし早過ぎたお彼岸のお墓参りを連想した。それは美しい花束を持った一家眷族のお喋りのせいなのか。

▼検査のため鎖骨の附近を切開して肉片の一部を切除

した。胆石などの手術をすれば、切除された結石を見せられるが、検査のため肉片は見せてくれない。

「先生わたしの品物を見せして下さい」。小さな瓶に入った新鮮な肉がアルコールに飄然と浮いている。自分の肉体の一部だと思つて愛おしく惜別の情を覚える。それは百グラム二百円程度の脂身のまじつたものだった。「先生、こんな川柳ありますねん」院長があか

んいうてる独逸語で「豆秋さんの句を披露した。これも何かの縁である。（き）」

☆背の低い日本男子が外国のトイレで苦労した話がよく聞く。4月本社句会で黒川紫香さんもそんな経験談をしておられたが、生理現象という嚴肅な行為にかかわるだけに、この種の笑話はいささかホロ苦い。

☆日本の公衆便所では淑女達が使用中の扉の前に列を見て待つのが普通だ。外で待つのが普通だ。列を作らずとも先着順

は正しく守られる。たしかに、その方が淑女にふさわしいと思うが、果して日本ではどうだろうか。

☆紳士用の小が混んでいる場合、どの列に並べば一番早いのか、この判断は簡単ではない。五人の列より四人の列が早いとは必ずしも限らないのである。状況切迫のときに限つて停滞が起り勘の悪さを悔んでも後の祭りという経験はよくある。

☆大阪の地下街には白昼、大の男でも薄気味悪いような公衆便所が少くない。「特別警戒実施中」なんていう貼札が麗々しく一年中貼つてある。一体どんな特別の警戒をしているのだから。

☆最後にアメリカの紳士用公衆便所の楽書の古典的傑作の一つと言われているものをご紹介します。（開高健「食卓は笑う」より）

「あなたの物はあなたが考えているほど大きくありません。どうぞ、もう一歩前へ出て下さい」

